

京都市内遺跡発掘調査報告

平成26年度

2015年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡発掘調査報告

平成26年度

2015年3月

京都市文化市民局



1区南半 土塁(北西から)

巻頭図版2 山科本願寺跡(2) 遺構



1区南半 土塁南断割(北東から)



2トレンチ 排水溝（西から）

ご あ い さ つ

京都市は、旧石器時代から近現代に至るまで、日本の歴史を考えるうえで欠かせない多くの有形無形の文化財を有しています。特に平安京建都以降は、長く我が国の中心的役割を果たし、その重ねられた時間の中で育まれた華麗かつ繊細な文化が、今なお伝え続けられている世界有数の文化都市でもあります。

埋蔵文化財も同様に、市街化区域では全体の4割を超える区域が、埋蔵文化財包蔵地に該当します。こうした幾層にも積み重なった遺跡は、本市でしか得られない情報を提供し、我が国の歴史や文化を理解する上で欠かすことができない国民共有の財産といえます。

本市では先人が残した貴重な埋蔵文化財を適切に後世に伝える責務を果たし、将来にわたって日本文化を国内外に発信していけるようその活用に取り組んでいます。

この度、平成26年度に文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財の調査成果をまとめた報告書を作成いたしました。この報告書が、京都の歴史と文化財への理解と関心を深めるために、広く活用いただければ幸いに存じます。

文末になりましたが、各調査の実施にあたり、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と御指導を賜りました関係機関の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

京都市文化市民局文化芸術担当局長

奥 美 里

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した、平成26年度の京都市内発掘調査報告書である。本書では平成26年1月から12月までに実施した発掘調査成果を報告する。なお、平成26年1月から3月までの発掘調査は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した。
- 2 調査にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。
- 3 調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。
 - I 嵯峨院跡（受付番号 13S725）
京都市右京区嵯峨観空寺明水町34-1, 35-1, 36
2014年5月12日～6月20日 357㎡ 西森正晃
 - II 山科本願寺跡（1）
京都市山科区西野山階町34-1, 35
2014年1月20日～2月7日 30㎡ 近藤章子（（公財）京都市埋蔵文化財研究所）
 - III 山科本願寺跡（2）（受付番号 14A001）
京都市山科区西野山階町34, 34-1, 35
2014年7月22日～9月30日 231㎡ 新田和央
 - IV 中臣遺跡（受付番号 14N177）
京都市山科区勤修寺西金ヶ崎244
2014年11月10日～11月26日 192㎡ 家原圭太
 - V 芝古墳（受付番号 14A003）
京都市西京区大原野石見町632-3
2014年10月1日～11月21日 45.9㎡ 熊井亮介・熊谷舞子
- 4 本書の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 5 本書に使用した写真の撮影は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、遺構の一部は調査担当者が行った。
- 6 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1996年に準拠する。
- 7 本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系 平面直角座標系VIによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお、調査におけ

る測量基準点の設置は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

- 9 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「北嵯峨」「山科」「勸修寺」「石見」「粟生」を調整したものである。
- 10 本書の編集は、西森正晃・新田和央が行った。

本文目次

I 嵯峨院跡	
1. 調査経過	1
2. 遺跡	2
(1) 立地と歴史的環境	2
(2) 周辺の調査	4
3. 遺構	6
(1) 基本層序	6
(2) 第1面の遺構	9
(3) 第2面の遺構	11
4. 遺物	12
(1) 遺物の概要	12
(2) 土器類	12
(3) 瓦類・石器	14
5. まとめ	15
II 山科本願寺跡(1)	
1. 調査経過	18
2. 遺跡	19
(1) 遺跡の位置と歴史	19
(2) 周辺の調査	20
3. 遺構・遺物	25
(1) 基本層序	25
(2) 遺構	25
(3) 遺物	29
4. まとめ	29
III 山科本願寺跡(2)	
1. 調査経過	30
2. 遺構	31
(1) 基本層序	31
(2) 1区	32
(3) 2区	40

3. 遺物	40
4. まとめ	44
5. 総括	47
(1) 調査成果と山科本願寺	47
(2) 今後の課題	47
IV 中臣遺跡	
1. 調査経過	50
(1) 調査に至る経緯	50
(2) 調査の経過	50
2. 遺跡	51
(1) 遺跡の位置と環境	51
(2) 周辺の調査	52
3. 遺構	53
(1) 層序	53
(2) 遺構	53
4. まとめ	56
V 芝古墳	
1. 調査の目的と経過	57
2. 遺跡	57
遺跡の位置と地理・歴史的環境	57
3. 遺構	62
(1) 1トレンチ	62
(2) 2トレンチ	64
(3) 3トレンチ	70
(4) 4トレンチ	72
4. 遺物	74
(1) 埴輪	74
(2) その他の遺物	79
5. まとめ	80
(1) 規模	80
(2) 埴丘の構築法	80
(3) 排水溝	81
(4) 埴輪	82

図 版 目 次

巻頭図版1	山科本願寺跡 (2)	遺構	1 区南半 土塁 (北西から)
巻頭図版2	山科本願寺跡 (2)	遺構	1 区南半 土塁南断割 (北東から)
巻頭図版3	芝古墳	遺構	2 トレンチ 排水溝 (西から)
図版1	嵯峨院跡	遺構	1 南区第1面全景 (北西から) 2 北区第1面全景 (南西から)
図版2	嵯峨院跡	遺構	1 南区第2面全景 (北西から) 2 北区第2面全景 (南西から)
図版3	嵯峨院跡	遺構	1 井戸4 (北から) 2 井戸200 (北から) 3 土坑23断面 (東から) 4 P436遺物出土状況 (南から) 5 土坑171 (北西から) 6 土坑571 (西から) 図版4
図版4	嵯峨院跡	遺物	出土遺物
図版5	山科本願寺跡 (1)	遺構	1 調査区東部全景 (東から) 2 調査区西部全景 (東から)
図版6	山科本願寺跡 (2)	遺構	1 1区南半全景 (北東から) 2 1区北半全景 (南から)
図版7	山科本願寺跡 (2)	遺構	1 2区全景 (北西から) 2 1区南半土塁北断割 (北東から) 3 堀2 (北西から)
図版8	山科本願寺跡 (2)	遺物	出土遺物
図版9	中臣遺跡	遺構	1 調査区全景 (北東から)
図版10	芝古墳	遺構	1 芝古墳全景 (北西から) 2 芝古墳全景 (南西から)
図版11	芝古墳	遺構	1 1トレンチ (北西から) 2 2トレンチ (西から)

		3	3トレンチ (南東から)
		4	4トレンチ (南西から)
図版 12	芝古墳	遺構	1 排水溝 (蓋石除去前)
			2 排水溝 (蓋石除去後)
図版 13	芝古墳	遺構	1 2トレンチ排水溝 9石目除去後 (西から)
			2 3トレンチ石組み遺構 (東から)
			3 4トレンチ埴輪出土状況 (北から)
図版 14	芝古墳	遺物	出土埴輪

挿 図 目 次

I 嵯峨遺跡		
図1	調査位置図	1
図2	調査区配置図	2
図3	調査前全景 (北から)	2
図4	作業風景 (南西から)	2
図5	発掘体験作業状況	2
図6	調査地遠景 (南東から)	2
図7	周辺調査区配置図	5
図8	第1面平面図	7
図9	調査区断面図	8
図10	第1面個別実測図	9
図11	第2面平面図	11
図12	出土遺物実測図	13
図13	瓦・石製品実測図	14
図14	近隣調査平面図	15
II 山科本願寺跡 (1)		
図1	調査位置図	18
図2	調査前全景 (東から)	19
図3	作業風景 (東から)	19
図4	土塁保護および埋め戻し状況 (東から)	19
図5	土塁西面保護状況 (東から)	19
図6	主要調査位置図	22

図7	断面模式柱状図	25
図8	調査区配置図	26
図9	遺構実測図	27
図10	調査区南壁・断割り北壁断面図	28

III 山科本願寺跡(2)

図1	調査位置図	30
図2	調査前全景(南東から)	31
図3	作業風景(南東から)	31
図4	1区埋め戻し状況(南東から)	31
図5	2区埋め戻し状況(北東から)	31
図6	調査区断面模式柱状図・断面図	32
図7	遺構平面図	33
図8	土塁断面図・平面図	34
図9	土塁・溝44実測図	36
図10	堀1・2実測図	38
図11	堀3・4実測図	39
図12	2区実測図	40
図13	土師器4内面赤外線写真	41
図14	土師器4外面赤外線写真	41
図15	土師器5外面赤外線写真	41
図16	土師器6外面赤外線写真	41
図17	出土遺物実測図	42
図18	今回調査区と周辺調査	45
図19	山科本願寺概念図	48

IV 中臣遺跡

図1	調査位置図	50
図2	調査前全景(北から)	51
図3	作業風景(北から)	51
図4	調査区配置図	51
図5	周辺調査位置図	53
図6	調査区断面図	54
図7	調査区平面図	55

V 芝古墳

図1	調査位置図	57
図2	樹木伐採風景（北東から）	58
図3	現地説明会風景（北西から）	58
図4	トレンチ埋戻し後風景（北から）	58
図5	周辺の遺跡位置図	59
図6	トレンチ配置図	63
図7	1トレンチ平面図	64
図8	1トレンチ東壁断面図	65
図9	2トレンチ平面図	66
図10	2トレンチ南壁断面図	67
図11	2トレンチ北壁断面図	68
図12	2トレンチ排水溝平面及び断面図	69
図13	2トレンチ拡張部東壁断面図	69
図14	3トレンチ平面図	70
図15	3トレンチ北壁断面図	71
図16	4トレンチ平面及び東壁断面図	73
図17	4トレンチ西壁断面図	74
図18	遺物実測図1	76
図19	遺物実測図2	77
図20	遺物実測図3	78
図21	遺物実測図4	79
図22	遺物実測図5	79
図23	墳丘復元図	81

表 目 次

I 嵯峨院跡

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	12

II 山科本願寺跡（1）

表1	山科本願寺関係略年表	21
表2	周辺調査一覧表	23

表3 遺構概要表	25
表4 遺物概要表	29
III 山科本願寺跡 (2)	
表1 遺構概要表	35
表2 遺物概要表	41
IV 中臣遺跡	
表1 遺構概要表	54
表2 遺物概要表	55
V 芝古墳	
表1 遺構概要表	62
表2 遺物概要表	75

I 嵯峨院跡

1. 調査経過

調査地は、京都市右京区嵯峨観空寺明水町34-1、35-1、36にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地である嵯峨天皇の離宮「嵯峨院跡」に該当する。ここに住宅建設が計画され、平成25年11月6日付で文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が行われた。これに対し、文化財保護課では平成25年11月21日に試掘調査を実施したところ、平安時代後期の整地層及びピット群を確認した。その後、計画が変更されたため平成26年3月31日付で再度届出が行われたが、届出された内容では遺構面に影響が及ぶため、発掘調査が必要と判断し、文化庁国庫補助事業による調査を実施することとなった。

今回の調査では、嵯峨院跡西半での遺構分布状況を確認すること、嵯峨院を仏寺とした大覚寺及び地名に冠せられる観空寺に関連する遺構を確認することを目的とした。

調査区は、東西17m、南北21mの合計357㎡である。調査は、排土置き場を確保するため南北で反転することとし、平成26年5月12日から開始、6月20日まで実施した。また、5月22日には、山口市立秋穂中学校の修学旅行発掘調査体験を2名受け入れ、普及啓発活動を行った(図5)。調査の結果、平安時代後期から南北朝時代にかけての整地層及び遺構群を確認した。



図1 調査位置図(1:2,500)

2. 遺 跡

(1) 立地と歴史的環境

調査地が立地する嵯峨野は、京都盆地北西部の一角を占め、東を御室川、北を北嵯峨の山麓、西を小倉山、南を桂川で限る一帯を指す。嵯峨野の地名の起りは定かではないが、①坂道が多いこと（「坂路ヲサカト云フノ義ニテ今云愛宕山ノ阪ヨリ出デタル名ナルヘシ、真ハ愛宕山ノ誠ニサカシキヨリ」『嵯峨名勝志』¹⁾）や、②山が険しき（さがしき）こと（「背面に高山ありて険しきが故に、単にさがと呼びし」『嵯峨誌』²⁾）、③唐の都長安北方の涇陽県にある嵯峨山の名を冠したもの等の説³⁾がある。一方で嵯峨野の初出は嵯峨院の造営以降であることから、嵯峨院に由来する可能性も指摘されている⁴⁾。

嵯峨野の地は、平坦に見えるものの、北側の山麓から流れ出る瀬戸川、有栖川、御室川が形成し

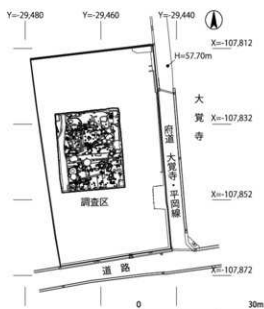


図2 調査区配置図 (1:1,000)



図3 調査前全景 (北から)



図4 作業風景 (南西から)



図5 発掘体験作業状況



図6 調査地遠景 (南東から)

た扇状地や洪積台地が広がる緩斜面となっており、調査地も洪積台地上に位置する。扇状地や台地上は高燥であり、灌漑を行わなければ水田を営むには不利な場所といえる。そのため、秦氏が築いた葛野大堰によって灌漑され開発が進んだ嵯峨野南部とは異なり、調査地周辺は平安時代にいたるまでほとんど開発が及んでいないことが、天長5年(828)頃の成立とされる「山城国葛野郡班田図」に「野」の表記が多いことからわかる⁹³。古代葛野郡条里の一・二條が西に約15度偏向するのは、嵯峨院の庄園として遅れて開発されたためとされる⁹⁴。周辺には古墳時代後期の古墳群は存在するものの、集落遺跡が展開していないことからそれを裏付けられよう。だからこそ、平安京遷都以降、清少納言が「野は嵯峨野さらなり」と表したように、嵯峨野は遊猟や別業の地として利用される余地が十分に残されていたといえる。

嵯峨院 嵯峨天皇が神野親王時代に設けた荘が起源の離宮であり、延暦21年(802)に桓武天皇が的野にて遊猟した際、神野親王の嵯峨荘に立ち寄ったことが記されている⁷⁾。即位後にも嵯峨院にて度々詩宴を開き⁹⁵、遊猟に出向いた際に立ち寄り⁹⁶など頻繁に幸幸している。

弘仁14年(823)4月、嵯峨天皇は皇太弟大伴親王に譲位(淳和天皇)、自らは冷然院に居し太上天皇の尊号を受ける。承和元年(834)、淳和天皇は、嵯峨天皇皇子正良親王に譲位(仁明天皇)し、冷然院を後院として定め、嵯峨太上天皇は太皇太后橘嘉智子(増林皇后)とともに嵯峨院に遷御する。この際、嵯峨院は嵯峨太上天皇及び太皇太后常住の居所として大規模な整備が行われたようで「嵯峨新院」と称され¹⁰⁾、同年10月には新たに寝殿が造営されている¹¹⁾。

嵯峨院領の規模は定かでは無いが、大覚寺の四至を定めた勅からは、二條山田里の全三十六町を占めた大覚寺の寺地を越える広大な範囲であったことがわかる¹²⁾。また、天長5年(828)頃の成立とされる「山城国葛野郡班田図」には、嵯峨院の庄園を指すと思われる「嵯峨庄」の記載が認められる。

嵯峨太上天皇は承和9年(842)7月15日に嵯峨院にて崩御したのち、太皇太后は冷然院に遷御する。主を失い嵯峨院は衰退したようで¹³⁾、貞観18年、嵯峨太上天皇の娘で淳和太皇太后正子内親王が清和天皇に嵯峨院を仏寺とする旨の勅許を請い、「大覚寺」の寺号を賜ることとなる¹⁴⁾。

大覚寺 貞観18年(876)に淳和太皇太后正子内親王によって仏寺となった大覚寺は、元慶5年(881)の勅により寺地が定められた¹⁵⁾。さらに同年、大覚寺第一世門跡とされる恒貞親王(仁明天皇庶子)によって、大覚寺及び増林寺、嵯峨太上天皇、太皇太后、淳和大后三陵を檢校するため、淳和院に公卿別当を置くことを奏し許可されている¹⁶⁾。第三世定昭は興福寺別当を兼ねて一乗院を開いて以降、大覚寺門跡は一乗院主が兼帯することとなった。そのため、藤原摂関家の強い影響下に置かれ、平安時代中期、後期には寺に関する文献上の記載は少なく、寺勢は振るわなかった。

鎌倉時代に入ると後醍醐・龜山・御宇多上皇が相次いで入山して院政を敷き、大覚寺統の中樞となる。中でも御宇多法皇は大覚寺中興の祖とされ、徳治3年(1308)に遷御して以降、多くの寄進を行うとともに現在の覚寺の基となった不壞化身院をはじめ大規模な造営を行っている¹⁷⁾。しかし、大覚寺統の出自である後醍醐天皇は足利尊氏と対立、建武3年(1336)に兵火によって全焼する¹⁸⁾。再建した後も大覚寺と南朝の結びつきは続き、明徳3年(1392)の南北朝合一の際

は、大覚寺にて南朝の後龜山天皇から北朝の後小松天皇へ三種の神器が譲渡された。

室町時代には、度重なる兵火によって荒廃、応仁の乱によって灰燼に帰した。その後、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康等からの寄進を受けて徐々に復興が進み、江戸時代初頭に後水尾天皇弟の尊性法親王、皇子である性真法親王が門跡の代に整備され、現在見られる寺観の基盤が整えられた。

観空寺 調査地が所在する嵯峨観空寺明水町の他に、観空寺を冠する地名が周辺に広がっている(久保殿町・岡崎町・谷町)。現在も久保殿町小字観空寺には観音菩薩が安置される観空寺観音堂が所在し、大覚寺の境外仏堂となっている。

観空寺の創建は定かではないが、貞観12年(870)に定額寺とするのが初出である¹⁹⁾。ここでは、観空寺は嵯峨太上天皇の創建であり、以来親王や源氏が檀越となっているとある。したがって、創建は天皇が崩御する前の承和9年(842)以前に遡る。また、先述した「山城国葛野郡班田図」には現在の観空寺が所在する葛野郡一條小倉里八坪には「栗原寺」との記載が認められ、栗原寺は観空寺の別名又は定額寺になった際に観空寺と改名されたのではないかと推定されている²⁰⁾。その後の観空寺に関する記載はほとんど無く、長保4年(1002)に栖霞寺と所領争いを行ったこと²¹⁾などが記される程度である。中世以降は大覚寺の支配下に置かれたものの荒廃し、近世に至り後水尾天皇が観音菩薩を安置して再興したとされる²²⁾。

(2) 周辺の調査(図7)

嵯峨院跡に関する調査は大覚寺境内での発掘調査と、道路敷内の公共下水道工事に伴う立会調査の事例がある。ここでは、主な調査と成果を述べる。

調査1 大覚寺境内中央、多宝塔西側の大日堂・聖天堂移築に伴う発掘調査である。平安時代初期から中期にかけての礎石遺構、景石、中世の石敷き等が確認され、出土遺物には「大井寺」銘の軒平瓦、緑釉陶器、土師器等がある。

調査2 下水道工事に伴う立会調査である。大沢池北側の広範囲に平安時代の包含層が認められ、平安時代前期の遺物を多量に含む土坑が複数見つかっている。出土遺物は緑釉陶器の割合が高く、嵯峨院に関連するものと想定されている。

調査3 大沢池北岸復原整備事業に伴う発掘調査である。名古曾の滝が嵯峨院成立期まで遡る可能性が高いこと、滝から池までの遺水は当初蛇行する素掘り溝だったものが、後宇多天皇入寺後の中御所造営に合わせて大幅に意匠を変化させていること、大沢池の北西で北に入り込む谷地形があり、天神島は元々島ではなく半島状に突き出していたことが確認された。

調査4 府道大覚寺平岡線及び大覚寺門前の東西道路の下水道工事に伴う立会調査である。今回の調査地と大覚寺の間で平安時代後期の南北溝、時期不明の堀状遺構を確認し、当該期の区画が存在することが確認されている。また、部分的に平安時代後期の包含層が確認されている。

調査5 今回の調査地の東側で大覚寺境内南西隅の信徒会館新築工事に伴う発掘調査である。調査区北側では平安時代前期の池状遺構、掘立柱建物、中世の柱六群が多数確認されていることに對し、南側では平安時代と中世の有栖川旧流路、南端で中世の南北溝が確認された程度である。

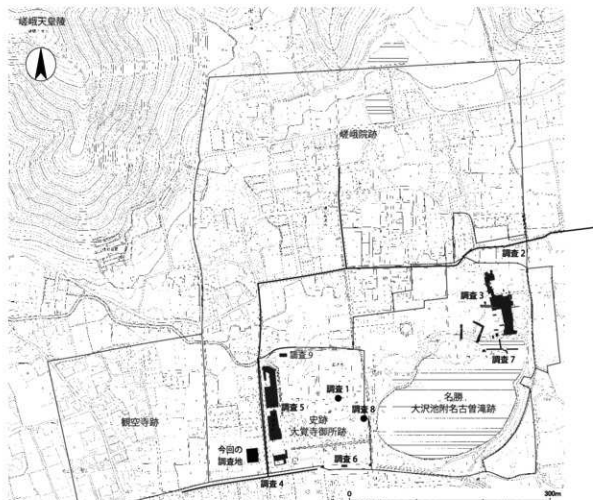


図7 周辺調査区配置図 (1 : 5,000)

調査6 大覚寺門前の東西道路の下水道工事に伴う発掘調査である。江戸時代の路面、有栖川の旧流路を確認。

調査7 名勝大沢池附名古屋湾整備事業に伴う発掘調査で、菊の島の築造は室町時代であることを含め、現在の大沢池北岸の景観が室町時代に整えられたことが明らかになった。

調査8 大覚寺境内中央南より御影堂と御霊堂改修工事に伴う発掘調査である。近世の基壇石列を確認している。

調査9 大覚寺防災施設工事に伴う立会・発掘調査で、現境内地内は近世の伽藍整備によって大きく改変されていることが明らかとなった。

周辺の調査成果からは、平安時代前期の遺構は主に大沢池の北側に集中することから、嵯峨院の中枢は池の北側に展開することが想定できる。大覚寺成立以降は、平安時代中期に遺構、遺物ともに減少するものの、後期から鎌倉時代にかけてさらに北側及び西側に遺構が展開する。調査区周辺でも平安時代後期の包含層が部分的に広がりを見せる。また、調査区東側の道路内で確認された南北溝の存在は、平安時代後期の大覚寺を示す遺構として注目できよう。

鎌倉時代後半の後宇多天皇入山前後からは遺構・遺物ともに急増し、中御所造営に伴う園地再整備を含め活発な土地利用状況が見受けられる。

文献一覧（図7内の調査番号と下記の番号は対応する）

- 1) 「大覚寺境内地埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』烏羽離宮跡調査研究所、1976年
- 2) 家崎孝治「嵯峨院・大覚寺御所跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1987年
- 3) 『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告 大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』嵯峨御所大覚寺、1997年
- 4) 小椋山一良「嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1995年
- 5) 堀内明博ほか「史跡大覚寺御所跡」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1995年
- 6) 小松武彦「史跡大覚寺御所跡」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1995年
- 7) 南孝雄ほか「史跡大覚寺御所跡・名勝大沢池附名古管滝跡」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1997年
- 8) 出口勲ほか「史跡特別名勝大覚寺御所跡」『平成14年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2004年
- 9) 前田義明ほか「史跡大覚寺御所跡」（財）京都市埋蔵文化財研究所、2007年

3. 遺 構

（1）基本層序（図9）

調査地周辺は洪積台地上に位置しており、自然地形は北西から南東に向かって緩やかに下がるが、調査地の現地表面は平坦であり、標高は58.2mである。東側の道路と比べて北で0.5m、南で1.2mの比高差がある（図6）。

基本層序は、表土以下、GL-0.15mで近世後半の整地層（1層）、-0.3mで近世耕作土（3層）、-0.45～-0.5mで平安時代後期の整地層（15層）、-0.45～-0.65mでいぶい黄褐色シルトの地山（23・24層）となる。平安時代後期の整地層は北に向かって薄くなり、北端で地山にすりつく。地山上面の標高は、北端で57.9m、南端で57.6mである。調査は平安時代後期の整地層上面を第1面、地山上面を第2面として実施した。ただし、第2面で検出した遺構の年代と整地層に含まれる遺構に年代幅は無く、整地層と遺構埋土の区別が困難であったこともあり、第2面で検出した遺構の一部は、第1面に属する遺構の可能性がある。

遺構は、平安時代以前から近現代に属するものまで検出しているが、平安時代後期から南北朝時代に集中し、柱穴、ピット、土坑、井戸等がある。室町時代後半の遺構、遺物は認められないことから、土地利用が一時断絶したことを示している。その後、江戸時代に入りピット、井戸、溝等が認められ、土地利用が再開されたことがわかる。

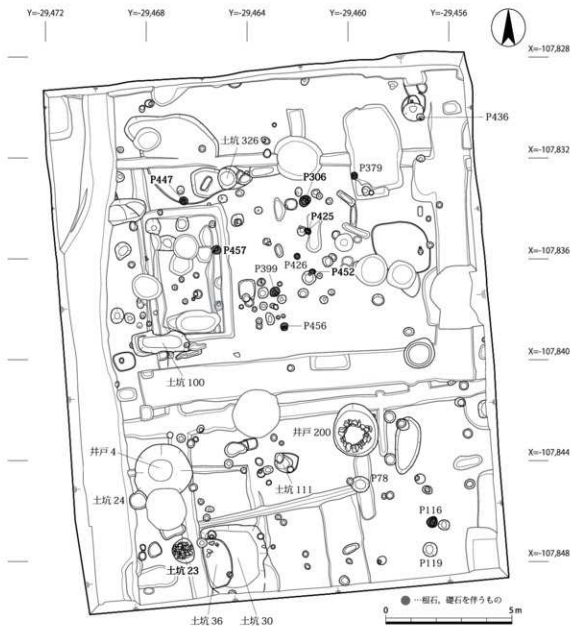


図8 第1面平面図(1:150)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代以前	土坑171, 571	
平安時代	P110, 井戸228, 井戸4	
鎌倉時代	土坑23, 30, 36, P119, 436, 井戸200	
室町時代	土坑100, 326	

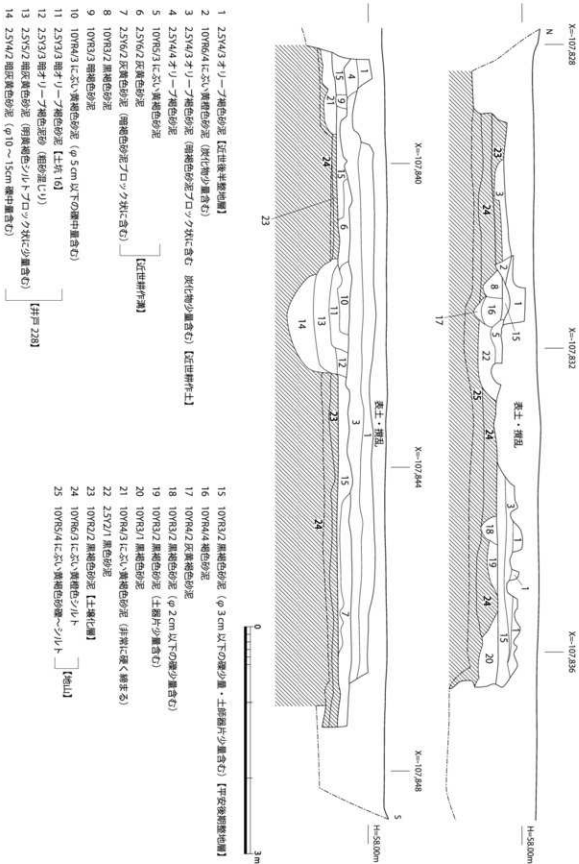
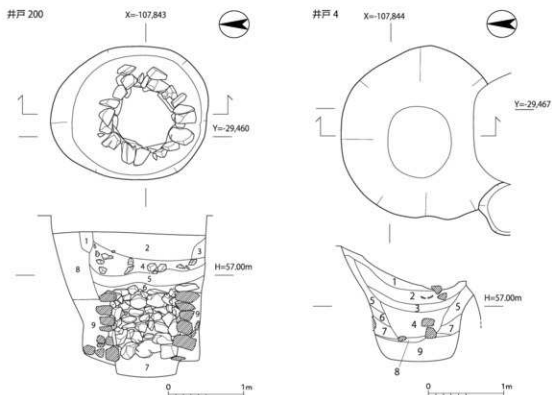
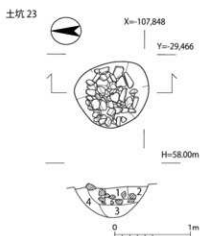


図 6 調査区断面図 (1 : 50)



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (10YR7/6 明黄褐色ブロック・φ20cm 礫混じる) 2 10YR4/4 にぶい黄褐色砂泥 3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (やや粘質, φ7~20cm 礫多量混じる) 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ20cm 礫微量・土器片含む) 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 7 10GY6/1 緑灰色泥土 8 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (10YR3/3 暗褐色砂泥ブロック混じり) 9 礫層 (φ1~5cm・10~20cm, 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土混じり) | <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 (固く締まる, 炭化物含む) 2 10YR3/1 黒褐色砂泥 (礫・土器碎片多量含む) 3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (礫多量含む) 4 5Y4/1 灰色泥砂 (礫多量含む) 5 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 (固く締まる) 6 7.5YR3/2 黒褐色泥砂 7 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 8 10YR5/2 灰黄褐色泥砂 9 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 |
|---|---|



- 1 10YR3/2 黒褐色泥砂
- 2 2.5Y5/3 黄褐色泥砂 (φ15cm 前後の礫多量混じる)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥ブロック混じる)
- 4 2.5Y5/6 黄褐色泥砂

図10 第1面個別遺構尖測図(1:50)

(2) 第1面の遺構(図8・図版1)

平安時代後期から南北朝時代にかけての遺構群である。多数の柱穴を検出したものの、建物としてのまともな形はつかみにくい。

井戸4(図10・図版3-5) 南区西寄りで検出した井戸である。堀方の形状は円形で南側を近世の井戸によって切られている。規模は、東西2.3m、南北1.8m、深さは1.5mを測る。埋土内には20cm前後の礫が多量に含まれるが、埋め戻す際に入れられたもので、井戸枠の構築材ではなく素掘りである。断面観察から掘り直しがあったことがわかる。

遺物は土師器、須恵器、瓦器、白磁、石鍋等が出土しており、12世紀中頃から後半、平安時代後期に属す

るものである。

土坑23 (図10・図版3-7) 南区西寄りで見出した集石土坑である。東西0.9m、南北1.0m、深さ0.4mの円形を呈し、上層には拳大の礫が密に詰まる。埋土にはぶい黄褐色シルトで、遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、焼締陶器、白磁、軒平瓦等が出土しており、13世紀前後の平安時代末期から鎌倉時代前半に属するものである。

土坑30 南区西寄りで見出した大型土坑で、土坑36に切られている。形状は不整形な隅丸方形で、東西2.7m、南北2.7m以上、深さ0.4mで、南肩は調査区外に広がる。埋土は灰黄褐色砂泥の単層で、土器片を多量に含む。遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、青白磁、青磁、瓦質土器等が出土しており、12世紀末から13世紀初頭の平安時代末期から鎌倉時代前半に属するものである。

P436 (図版3-8) 北東隅にて見出したピットである。東西0.5m、南北0.4mの円形で、深さ0.25mを測る。埋土にはぶい黄褐色砂泥で、完形に近い土師器皿を多量に含み、底には完形の土師器皿が伏せて置かれている。地鎮遺構と考えられる。遺物は土師器、瓦器碗が出土しており、13世紀中頃、鎌倉時代に属する。

土坑36 南区西寄りで見出した土坑で、土坑30を切っている。形状は南北に長い楕円形で、南北1m、東西1.6m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰黄色砂泥である。土師器、須恵器、青白磁が出土しており、13世紀後半の鎌倉時代に属するものである。

井戸200 (図10・図版3-6) 南区中央で見出した石組み井戸である。堀方は東西1.75m、南北2.1mのやや楕円形を呈する。検出面から1mまでの石組みは抜き取られているが、約1m残る。石組みの内法は直径0.8mを測り、円形を意図しているが最下段は径30cmを超える大型の石で囲い多角形を呈する。積み方は稚拙で、直線方向に目地が通り内側に凸む部分も認められる。石材はチャートを主とし、一部花崗岩や砂岩系も含まれる。

遺物は、土師器、須恵器、白磁、青磁、瓦が出土しており、13世紀後半から14世紀初頭の鎌倉時代に属するものである。

P119 南東隅にて見出したピットである。南北0.6m、東西0.5mの円形で、深さ0.25mを測る。埋土は暗褐色砂泥で、完形に近い土師器を多く含み、14世紀初頭の鎌倉時代末期に属する。

土坑100 中央西寄りで見出した土坑である。東西2.2m、南北0.8mの方形を呈し、深さ0.45mを測る。埋土には炭化物・焼土が多量に混じり、含まれる瓦も被熱しており、火災処理土坑と考えられる。遺物は、土師器、瓦、土製品が出土しており、14世紀前半の鎌倉時代末期から南北朝時代に属するものである。

土坑326 北半中央にて見出した土坑である。南北0.8m、東西の0.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。上層には多量に土師器片を含む。遺物は、土師器、須恵器、焼締陶器が出土しており、14世紀中頃の南北朝時代に属するものである。

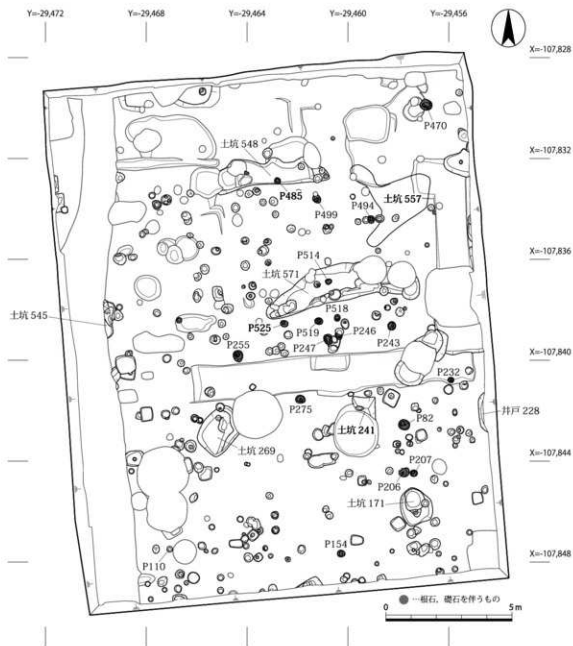


図11 第2面平面図(1:150)

(3) 第2面の遺構(図11・図版2)

地山上面で検出した平安時代後期以前の遺構である。

P110 南西隅で検出したピットである。直径0.2mの円形で深さ0.45mを測る。埋土は暗褐色砂泥で、土師器皿が出土している。11世紀前半に属する。

井戸228 南半東壁沿いにて検出した井戸である。南北1.5m以上の円形で西肩の一部のみ確認し、大半は調査区外に広がる。堀方の壁は急であり規模、形状から井戸の可能性が高い。大半が調査区外であり掘削範囲の制限から遺物は少なく、時期は不明である。

土坑171(図版3-9) 南区東寄りて検出した土坑である。東西1.3m、南北1.5mの楕円形を呈

し、深さ0.8mを測る。埋土は黒褐色シルトを主とし、遺物は出土していない。

土坑571（図版3-10）中央で検出した土坑である。東西6.1m、南北1.5mの三日月形を呈し、深さ0.27mを測る。断面観察では、三日月形の中央南端は内側に抉れており、北側に向かって浅くなっている。埋土は黒褐色シルトを主とし、遺物は全く出土しておらず時期は不明であるが、切り合い関係から最も古い遺構である。形状、埋土等から風倒木の痕跡と考えている。

他に土坑548、479、557、545、269、241も埋土がいずれも黒褐色シルトであり、遺物が全く出土せず同様の性格を持った遺構の可能性が高い。

4. 遺物

（1）遺物の概要（表2）

出土した遺物は整理箱にして33箱である。内訳は土器、瓦、石製品、土製品、金属製品で、土器類が大半を占める。時代は平安時代前期から江戸時代に属するものであるが、平安時代後期から南北朝時代までの遺物が大半を占める。平安時代前期の遺物も僅かに出土するものの、後世の遺構に伴うものである。室町時代後半に至って遺物は激減することから、土地利用が断絶したことを示している。

土器の種類は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器等で土師器が最も多い。瓦は土坑100から少量の焼瓦が出土した以外は、全体量は少ない。

（2）土器類（図12・図版4）

1は土師器皿である。いわゆる「て」の字状口縁を持つ皿で口縁端部を上方につまみ上げる。口径10.8cm、器高1.5cmを測る。平安京IV期古段階に属し、11世紀前半に属する。P110出土。2は尾張型の山茶碗で、貼り付け高台で底部に糸切り痕が残る。底径8.6cmを測る。11世紀後半。3は灰釉陶器碗である。高台断面は三角形で外側に開き、口縁は僅かに外反する。口径16.3cm、底径8.0cmを測る。11世紀前半に比定できる。2・3は整地層からの出土である。4～10は土師器皿である。口縁端部は上方に立ち上がったものが多く、断面形状が三角形になるものが多い。口縁部

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代以前	石器		石器1点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、山茶碗、輸入陶磁器、瓦		土師器9点、灰釉陶器1点、山茶碗1点、石鱗1点、瓦3点		
鎌倉時代	土師器、輸入陶磁器、瓦		土師器7点、輸入陶磁器1点、焼締陶器1点		
南北朝時代	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器		土師器10点、輸入陶磁器1点、焼締陶器1点		
合計		33箱	37点(2箱)	2箱	11箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後にAランクの遺物を抽出し、詰め直しを行った為出土時より17箱少なくなっている。

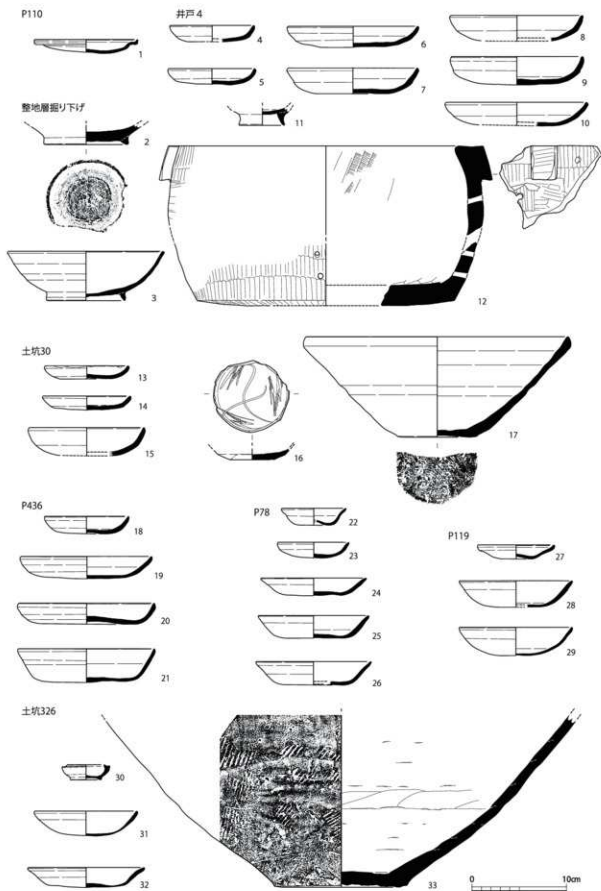


图12 出土遺物実測図(1:4)

には2段のナデが明瞭に残る。口径は8cm台と14cm前後の大小2法量がある。11は土師器台付皿で、土師器皿に高台を貼り付けたものである。高台径は4.7cm。4～11はV期中～新段階に属するもので、12世紀後半に属する。12は滑石製の石鍋で体部が欠損しているが、同一個体と判断した。口縁部外側に縦方向の把手が付き、蔓取手穴が計3箇所穿たれている。口径31.0cm、底径27.2cmに復元できる。4～12は井戸4から出土した。13～15は土師器皿である。口縁のナデは不明瞭となる。13・14は口径9cm前後、15は12cmを測る。VI期古～中段階に属し、12世紀末から13世紀前半にあたる。16は白磁皿である。17は東播系の須恵器鉢で、口径27.6cm、底径8.5cm、器高10.6cmを測る。13～17は土坑30から出土した。18から21は土師器皿で、底部から体部にかけての境が丸みを帯びたもの(18)と、明瞭なもの(19～21)がある。18が口径8.9cm、19～21が口径14.0cm前後である。VI期中段階に属し、13世紀中頃にあたる。18～21は地鎮遺構と考えられるP436から出土した。22～26は土師器皿で、22はへそ皿である。いずれも体部から口縁部にかけてやや外反する。口径は7cm前後と11～12cm台の大小2法量がある。VII期中段階に属し、14世紀前半にあたる。22～26はP78から出土した。27～29は土師器皿で、27はへそ皿である。28・29は口径12cm弱を測り、体部から口縁部にかけて僅かに肥厚する。VII期新～VIII期古段階に属し、14世紀後半にあたる。27～29はP119から出土した。30は青白磁の合子身である。口径3.8cm、底径3.1cm、器高1.6cmを測る。31・32は土師器皿である。31・32は底部からの立ち上がりにかけて器壁が最も薄くなり、口縁端部にかけて肥厚する。31は口径10.7cm、器高2.7cm、32は口径12.2cm、器高2.1cmを測る。VII期新段階に属し、14世紀中頃にあたる。33は常滑焼の底部である。体部外側にかけて叩きが残る。底径14.1cmを測る。30～33は土坑326からの出土である。

(3) 瓦類・石器 (図13・図版4)

瓦1は均整唐草文軒平瓦である。欠損しているものの「大井寺」銘を持つ軒平瓦の脇区珠文帯を切り落としたものである。主葉は強く巻き込む。平瓦凹面に布目痕、瓦当部上面と顎部、平瓦凸面にかけてケズリを施す。整地層から出土した。平安時代前期。瓦2は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りの対向するC字形の中に十字形が入る。平瓦凹面に布目痕、顎部から平瓦凸面にかけてケズリを施す。土坑23から出土した。栗栖野産で平安時代中期前半に属する。瓦3は剣頭文軒平瓦で

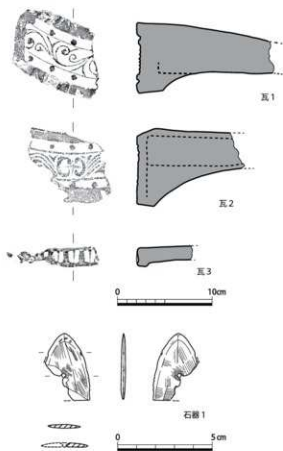


図13 瓦(1:4)・石製品(1:2)実測図

ある。平瓦凹面布目痕、頸部から瓦当裏面にかけてナデを施す。土坑100から出土した。平安時代後期に属する。

石器1は、粘板岩製の有孔磨製石鏃である。長径3.5cm、幅2.3cm、厚さ0.2cm、重さ2gを測る。穿孔は両面からである。P24から出土した。

5. ま と め

今回の調査で、平安時代後期から南北朝時代にかけて多数の遺構が成立し、活発な土地利用が行われていたことが明らかとなった。ここでは、周辺調査成果を踏まえて時代順に遺構の変遷を追ってまとめたい。

出土した最も古い遺物は、山城で弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて見られる有孔磨製石鏃である。しかし、後世の遺構に混入していたものであり、他に同時代の遺構、遺物は全く認められない。ここで注目されるのが、第2面で検出した黒褐色シルトを埋土とした不整形の土坑群である。遺物は出土しないため年代の特定は出来ないが、切り合い関係から平安時代以前に遡ることは間違いない。隣接地の2次調査(図14)においても同様の遺構群が広がっており、全てではないにしろ、風倒木や切り株の痕跡とするならば、嵯峨院造営以前には原野が広がっていたことを物語っている。

嵯峨院が造営された平安時代前期に属する遺構は調査地では認められないが、前期の瓦が出土している。中でも瓦1は破片であるが、「大井寺」銘を持つ軒平瓦の脇区珠文帯を切り落とした可能性が高い。「大井寺」銘の瓦は、嵯峨天皇皇后橘嘉智子造営の檀林寺周辺や、

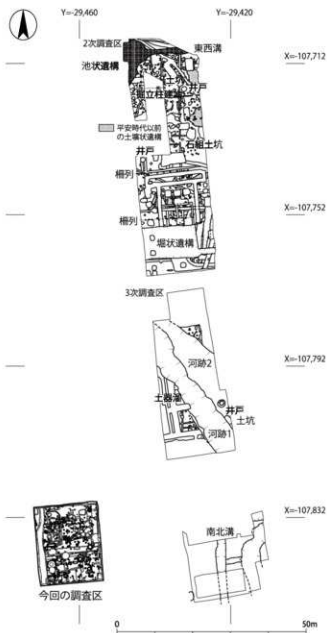


図14 近隣調査平面図(1:1,000)

大覚寺境内の発掘調査(図2-調査1)などから集中して出土しており、調査地が嵯峨院の中枢からは外れているものの、その範囲に含まれることを示唆している。ただし、隣接地では平安時代前期の池状遺構と池に伴う掘立柱建物を検出している。隣接地と調査地の間には、3次調査で確認された旧有栖川が流れており、河川が嵯峨院内の区画として認識されていたと捉えられる。

調査地は、平安時代後期にいたり遺構、遺物ともに急激に増加する。多数の柱穴、井戸等が造られ、復元は出来なかったものの複数の建物が存在していたと考えられる。また、それまで自然地形に沿って北西から南東に向けて緩やかに下がっていた地形を整地し、周辺道路に対し一段高い平坦面を造りだしている(図6)。この整地は調査地だけではなく、現地地形から南側の道路に沿ってさらに西側に広がる大規模なものである。整地は南側の東西道路を意識したものであり、活発な往来があったことが想定できる。一方で、周辺では東側道路の立会調査(図2-調査4)で、南北溝を検出し、寺域を画する区画が存在する以外は、当該期の遺構、遺物は非常に少ない。平安時代後期には、大覚寺の寺勢は衰えていたと考えられる中、大規模な土木工事が実施されたことは、文献上の記載がほとんど無い寺史の空白を埋めるものとして注目すべきものである。

鎌倉時代から南北朝時代にかけては、大覚寺に後宇多院が入り再興が進むことは先述した通りである。調査地についても引き続き遺構、遺物が豊富であり、活発な土地利用が認められる。しかし、室町時代後期に至ると遺構、遺物が激減し、再び生活の痕跡が認められるのは近世後半に至ってからで、隣接地が引き続き活発な土地利用が行われていることと対照的である。

大覚寺内外側の調査事例は少なく、嵯峨野の開発状況を示す事例として今回の調査は貴重である。都人が憧れた嵯峨野の景観を明らかにするためにも、さらなる調査が必要といえる。

(西森 正晃)

註

- 1) 『京都府地誌』京都府、1881～1884年頃
- 2) 『嵯峨誌』(財)嵯峨教育振興会、1998年
- 3) 林屋辰三郎「後院の創設—嵯峨上皇と壇林寺をめぐって—」『中世日本の歴史像』創元社、1978年
- 4) 『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告 大沢池北岸地復原整備事業に伴う調査』舊嵯峨御所大覚寺、1997年
- 5) 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂、1985年
- 6) 5)に同じ。
- 7) 「遊猟干の野。便御親王諱(嵯峨) 莊、關府五位已上衣被。」『類聚国史』巻32遊猟 延暦21年8月29日条
- 8) 「幸嵯峨別館。命文人賦詩。雅楽寮奏樂。關文人已上綿有差。」『類聚国史』巻31天皇行幸下 弘仁7年2月27日条
上記以外にも、弘仁7年から10年にかけて嵯峨院にて度々詩宴を開いている。
- 9) 「遊猟北野。日晚御嵯峨院。關侍臣衣被。」『日本後紀』巻24 弘仁5年閏7月27日条
上記以外にも、弘仁8年、9年、天長7年(830)に遊猟した際の行幸記事が見える。
- 10) 「先太上天皇及太皇太后遷御嵯峨新院。」『続日本後紀』巻3 承和元年8月18日条
- 11) 「嵯峨院寢殿新成。今上遣使奉獻。以賀之。」『続日本後紀』巻3 承和元年10月21日条
- 12) 「勅。以山城国葛野郡二条大山田地卅六町、為大覚寺地。其四裏、東至朝原山、西至觀空寺并栖霞觀東

路，北至山嶺。自余山野入嵯峨院四至者，皆為公地。」

『日本三代實錄』卷39 元慶5年8月23日条

- 13) 「淳和太皇太后。請以嵯峨院為大覺寺曰。嵯峨院者。太上天皇昔日閑放之地也。霑之後。涉日既深。階庭不被。臺亦壞。仍比年頗加修葺。僅避風雨。尋想宿昔之除哀。欲守終焉於此地。而今尊像禪經。時敬札。鍾磬香花。隨以安置。伽藍之體。佛地之端。五六年來。適然具足。若不變名定額以示往來。殊恐樵夫牧童或致誤犯。願也樓閣仍舊。便為道場。名号惟新。稱曰大覺。欲使追慕攀瞻之志今古无移。眞如法性之因自他共利。勅曰。宜隨太后御願。賜額曰大覺寺。頒行天下。」
『日本三代實錄』卷28 貞觀18年2月25日条
- 14) 13) に同じ。
- 15) 12) に同じ。
- 16) 淳和院永置公卿別当。先是，无品恒貞親王奏言。「(扶桑略記) 淳和院，緣先太后遺旨，為京城不能自存者，所依止也。凡其所行諸事，一如太上天皇在世時。又大覺寺，是嵯峨太上天皇旧居也。又嵯峨太上天皇，太皇太后，淳和大后三陵，在其近側。又檀林寺，是嵯峨太皇太后御願所建也。三所行事，同如一家。請永置公卿別当，令其檢校。詔聽之。」『三代實錄』卷40 元慶5年12月11日条
- 17) 元享元年(1321)，後宇多法皇が「伽藍・僧坊」を築いたとある。「大覺寺譜」「大覺寺文書」上巻
- 18) 『統史愚抄』建武3年8月28日条
- 19) 「以山城國葛野郡觀空寺預之定額。勅。觀空寺者。嵯峨太上天皇創建。宜以其後親王源氏為檀越。永為恒例。」『日本三代實錄』卷18 貞觀12年8月26日条
- 20) 宮本 救「山城國葛野郡班田園について」『續日本紀研究』第6巻第3号，續日本紀研究会，1959年
- 21) 『權記』長保4年3月25日条
- 22) 2) に同じ。

Ⅱ 山科本願寺跡（1）

1. 調査経過

今回の調査は、京都市山科区西野山階町地内で実施した。敷地の西側には山科本願寺の「御本寺」を囲う土塁の一部が残り、この地が「御本寺」の中心部に近い場所にあたることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という。）が公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、遺構の遺存状況を確認するための調査を実施することとなった。調査は平成26年1月20日から2月7日まで実施し、調査面積は30㎡である。今回の調査地は平成22年度の16次調査、平成23年度の17次調査、平成24年度の18次調査の北側に位置し、

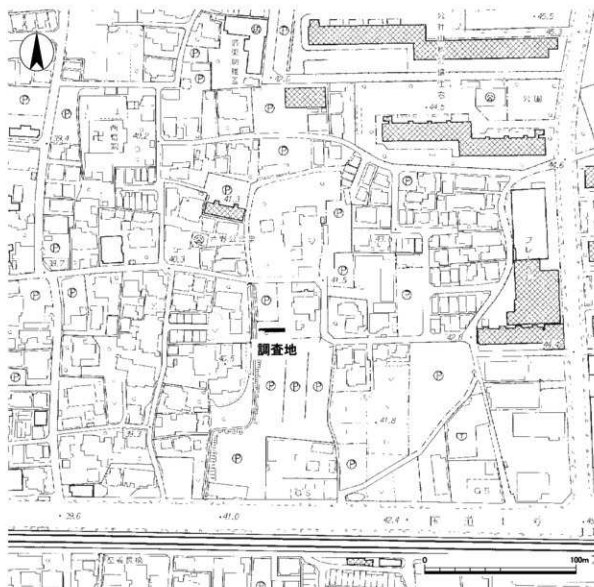


図1 調査位置図（1：2,500）



図2 調査前全景（東から）



図3 作業風景（東から）



図4 土塁保護および埋め戻し状況（東から）



図5 土塁西面保護状況（東から）

山科本願寺跡20次調査となる。

調査は文化財保護課の指導に従い、敷地南西部に現存する土塁を含め、幅1～2m、東西17mの調査区を設定した。調査面積は30㎡である。調査の結果、土塁本体と寺内の整地面を確認し、整地面上では、東西方向に並ぶ柱穴を検出した。

なお、確認調査であるため、遺構の保護に重点を置き、各遺構は部分的な掘り下げに留め図面作成、写真撮影などの記録作業を行った。調査終了後、遺構を土糞と真砂土で保護し埋め戻しを行った。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と歴史

山科本願寺跡は、山科盆地の中央やや西寄りに位置し、山科川、四ノ宮川、音羽川、安祥寺川などにより形成された扇状地の先端にあたる。周囲より標高が高く、比較的安定した地盤を形成している。遺跡北方には京と東国を結ぶ旧東海道が東西にはしり、東西には東海道から分岐する奈良街道や渋谷街道が通る交通と物流の要衝であった。また、遺跡の東を限る山科川は醍醐、六地藏を経て巨椋池に流れ込み、桂川・宇治川・木津川と合流し淀川となって大阪湾まで通じており、山科本願寺は、水運の面から見ても利便性の高い立地であったと考えられる。山科本願寺は、この地に文

明10年(1478)に浄土真宗中興の祖・蓮如上人によって造営が開始された。文明12年(1480)には「御影堂」の棟上、翌13年には「阿弥陀堂」の棟上が行われている。文明15年(1483)までに「向所」「寝殿」などを含めた主要堂舎が揃ったと考えられる。寺域は主要堂舎のある「御本寺」、有力末寺の坊舎が置かれた「内寺内」、門徒の居住区などがある「外寺内」の3つの郭で構成され、それぞれの郭を土塁と濠で囲み、あるいは自然河川を利用して防御施設とした環濠城塞都市であった。その範囲は南北約1km、東西約0.8kmにおよぶ。また延徳元年(1489)には、山科本願寺から約1km東に蓮如の隠居所が造営され、山科本願寺南殿と呼ばれた。蓮如は明応8年(1499)に南殿で没している。京が応仁の乱によって荒廃し混乱が残る一方、山科本願寺は寺内町の経済的な発展にも支えられ大いに繁栄するが、天文元年(1532)、法華宗を中心として、管領細川晴元の配下、近江守護職六角定頼などの連合軍による攻撃により焼亡した。その後、本願寺は大坂(石山本願寺)へ移転する。織田信長との石山合戦などを経て、豊臣秀吉の命により山科に寺領を回復するが、本願寺が山科に戻ることはなかった。

現在は遺跡中心部を国道1号線と東海道新幹線が東西に貫く。それに沿って市街地化が進み、山科本願寺の痕跡は国道1号線の北側で土塁や濠の一部がわずかに残るのみである。そのうち、山科中央公園内に残る「内寺内」と「外寺内」を限る土塁と南殿跡が平成14年に「山科本願寺南殿跡附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定されている。

(2) 周辺の調査(図6、表1)

山科本願寺跡では、今回の調査を含めて20次にわたる発掘調査が実施されている。それ以外にも多数の試掘調査、立会調査が行われ、山科本願寺に関わる整地土や遺構が見つかっている。主要な調査については図6と表1にまとめた。また、蓮如の隠居所となった山科本願寺南殿跡でも二度の発掘調査が実施され、両調査ともに遺構は地中に保存されている。

今回の調査地周辺では、山科本願寺跡2・11～14・16～18次の調査が実施されている。2次調査では、石室や石組溝、礎石などが見つかっている。11・12次調査では南北方向の土塁基底部と石組暗渠が見つかった。13次調査では、土塁の際で泉状遺構や石組溝からなる庭園遺構や小規模な炉、土取穴などが見つかっている。14次調査では池や石敷きからなる庭園遺構や礎石列などが見つかった。また14次調査では遺構埋土や遺構を覆う焼土層から多量の輸入陶磁器や堆黒・蒔絵など的高級漆芸品が出土した。16・17次調査では通路状遺構、柱列、集石遺構、石組溝群、土塁屈曲部、刀埋納遺構などが見つかっている。同敷地内の18次調査では石組井戸、風呂関連遺構群、塀、土塁などが見つかっている。

以上のように、調査地周辺では山科本願寺「御本寺」に関連する遺構が多数検出されている。また、建物の密度の高さや庭・風呂遺構などから、調査地一帯が宗主一族の居住空間および本願寺の実務空間にあたる想定されている。そして、その東側に阿弥陀堂や御影堂などの主要堂舎が位置すると推測される。

表1 山科本願寺関係略年表

応永22年 (1415)		七世存如の嫡子として蓮如が生まれる。
長祿元年 (1457)		蓮如、本願寺八世宗主となる。
文明3年 (1471)		蓮如、越前吉崎に坊舎を構える。
7年 (1475)		蓮如、越前吉崎御坊を去る。
9年 (1477)		応仁・文明の乱一応終わる。
10年 (1478)	1月	蓮如、野村柴の庵に居す。馬屋新造。(この年、大津近松にて越年。) (山科本願寺の造営始まる。)
11年 (1479)	1月	整地と作庭を始める。
	3月	向所を新造。
	4月	堺の古坊を移し、寢殿をつくりはじめる。
	8月	庭できる。
12年 (1480)	12月	御影堂建設用材柱50余本など、山科につく。
	1月	三結敷の小御堂を作る。
	2月	御影堂造作事始め。
	3月	御影堂、棟上の祝。
13年 (1481)	8月	ひわだ大工をよんで御影堂の檜皮葺はじめる。 仮仏壇を設けて、絵像の御影をうつす。 整地。
	11月	大津にあった根本御影を野村にうつし、山科ではじめて報恩講を催す。
	12月	吉野で阿弥陀堂用大柱20余本をあつらえる。
	1月	寢殿の大門柱立。
	2月	阿弥陀堂の事始め。
14年 (1482)	4月	阿弥陀堂棟上。
	6月	仮仏壇をつくって、本尊をすえる。
	1月	御影堂大門の事始め。 阿弥陀堂の橋題の柱を用意。 阿弥陀堂の四方の柱も立つ。 大門の地形をならす。 四壁の内に排水用の小堀を南北に掘る。 門前の両所に橋をかける。
	4月	冬のたき火所だった四門の小棟を改築。
15年 (1483)	5月	寝殿の天井をはる。
	6月	阿弥陀堂の仏壇をつくりなおす。
	7月	仏壇に奈良塗師をやとってぬらせる。
	9月	仏壇ぬり終る。
	8月	河内蕃田の野中之馬という瓦師をよんで、大葺屋をつくり、 西山の土で瓦を焼く。 阿弥陀堂瓦葺きおわる。
長享2年 (1488)		加賀一向一揆おこる。
延徳元年 (1489)		山科南殿を造営する。
明応6年 (1497)		大坂石山坊舎造営。
8年 (1499)	2月20日	蓮如大坂から山科南殿に戻る。
	3月25日	蓮如没す、85歳。
大永5年 (1525)		九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。
天文元年 (1532)	8月24日	法華宗・延暦寺・六角氏の攻撃により焼亡。山科本願寺陥落。
2年 (1533)		証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。
5年 (1536)	7月	天文法華の乱。
元亀元年 (1570)		織田信長との石山合戦開始。
天正8年 (1580)		本願寺顕如、信長と和睦。石山本願寺退去。 その後、紀伊鷲森・和泉貝塚・大坂天満と移転を繰り返す。
14年 (1586)		豊臣秀吉の朱印状をもって山科に寺領を回復する。
19年 (1591)		本願寺、京都七条堀川(現西本願寺)へ移転。
慶長7年 (1602)		東本願寺別立。このときから東西本願寺となる。
享保年間 (1716~1736)		東西本願寺がそれぞれ山科別院を建立。

(西川幸治「都市史の中の中世寺院」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年を一部改変)

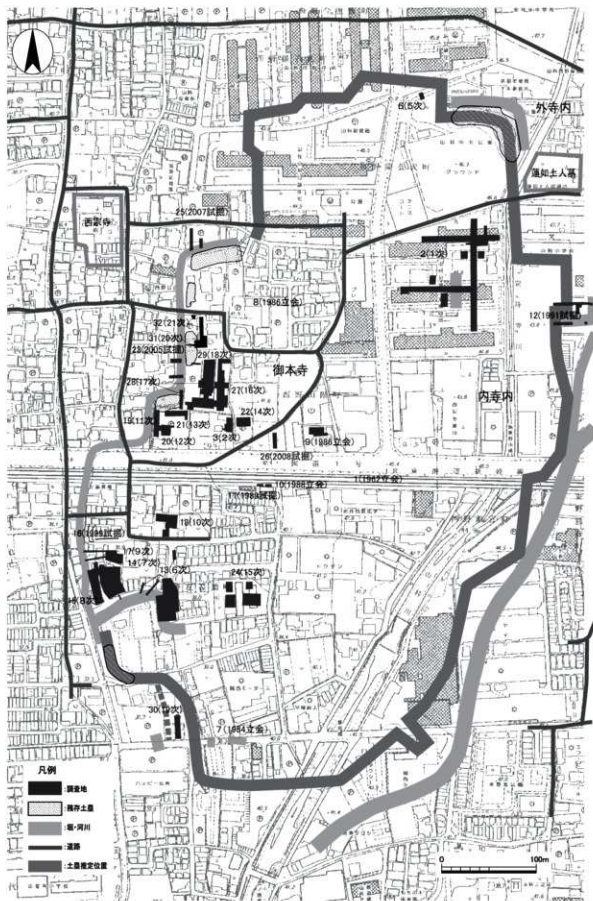


図6 主要調査位置図(1:4,000)

表2 周辺調査一覧表

No.	回数・調査名(調査記号)	所在地:山科区	調査期間	方法	概要	文献
1	新幹線立会	西野左義長町・山階町・離宮町	1962.8.9～ 11.11	立会	南北方向の石組溝、暗渠、南北方向の土塁	1
2	1次調査	西野阿芸沢町・山階町・離宮町	1973.5.21～ 8.4	発掘	建物・鍛冶場、石垣、樋、南北方向の堀・土塁	2
3	2次調査	西野山階町	1974.10.9.～ 11.3	発掘	石組溝、石室、庭園の一部	2
4	3次調査(76RT-YG001)	西野今屋敷町9(安祥寺中学校)	1976.11.17～ 11.30	発掘	田耕作土層	3
5	4次調査(76RT-YG002)	西野大手洗町20(山階小学校)	1977.2.14～ 3.5	発掘	江戸時代以降の落込み	4
6	5次調査(76RT-JN001)	西野阿芸沢町(山科中央公園)	1978.10.30～ 11.13	発掘	復元のみ	5
7	下水立会(83RT-SW061)	西野左義長町・東野舞台町ほか	1984.3.6～ 11.17	立会	東西および南北方向の堀、土坑群	6
8	下水立会(85RT-SW04)	西野大手洗町・今屋敷町ほか	1986.4.1.～ 1987.5.16	立会	南北方向の堀と土塁、土坑	7
9	(86BB-RT0109)	西野山階町12	1987.1.27～ 1.30	立会	東西方向の石組溝	8
10	(88BB-RT005)	西野山階町29	1988.5.30～ 6.2	立会	東西方向の石組溝	9
11	(89BB-RT021)	西野山階町29	1989.10.2～ 10.14	試掘	東西方向の石組溝	10
12	(91RT-AH001)	西野大手洗町20(山階小学校)	1991.8.2～ 10.18	試掘	土塁と堀の屈曲部	11
13	6次調査(96RT-HG001)	西野左義長町16ほか	1997.4.20～ 7.10	発掘	東西および南北方向の堀、東西方向の土塁、暗渠、建物、井戸	12
14	7次調査(97RT-HG002)	西野左義長町23	1997.7.16～ 9.18	発掘	鉤型に曲がる土塁と堀、建物、井戸、鍛冶場	13
15	8次調査(98RT-HG003)	西野左義長町23-1, 23-4	1998.8.17～ 11.9	発掘	南北方向の堀と土塁、暗渠	14
16	(センターNo.60)	西野左義長町19-11ほか	1999.10.28	試掘	南北方向の土塁を測量	15
17	9次調査(00RT-HG004)	西野左義長町19-11ほか	2000.5.10～ 6.30	発掘	建物、溝、暗渠、土塁基底部	16
18	10次調査(04RT-HG006)	西野左義長町13-2	2005.1.17～ 3.18	発掘	東西および南北方向の堀、堀、樋	17
19	11次調査(04RT-HG007)	西野山階町30	2005.3.1～ 3.15	発掘	土塁基底部の構築状況を調査	17
20	12次調査(05RT-HG008)	西野山階町30	2005.5.11～ 5.25	発掘	土塁内側斜面と暗渠	18
21	13次調査(05RT-HG009)	西野山階町30	2005.5.30～ 7.2	発掘	土塁屈曲部、泉状遺構、炉、土取穴、暗渠	17
22	14次調査(05RT-HG010)	西野山階町28-5, 28-6	2005.11.11～ 12.16	発掘	焼成土坑、庭園遺構、柱列、多量の輸入陶磁器、ガラス玉出土	17
23	(保護課No.05 S 208)	西野広見町31-11ほか	2005.9.20	試掘	御本寺西側を限る堀の南屑口	19
24	15次調査	西野左義長町25-411ほか	2006.7.31～ 9.15	発掘	御本寺南側を限る堀の落込、土坑、井戸、溝、柱穴	20
25	(保護課No.07 S 274, 275)	西野広見町5-7, 5-10	2007.9.25	試掘	御本寺北側を限る堀の北屑部	21
26	(保護課No.08 S 103)	西野山階町11-51ほか	2008.9.1	試掘	GL-0.4mで整地層を確認	22
27	16次調査(10RT-HG012)	西野山階町30-11ほか	2011.1.11～ 3.11	発掘	整地面、焼土の堆積、通路状遺構	23
28	17次調査(11RT-HG013)	西野山階町30-11ほか	2011.7.21～ 9.30	発掘	整地面、石組溝、土塁など	23
29	18次調査(12RT-HG014)	西野山階町30-11ほか	2012.7.17～ 10.4	発掘	石組井戸、風呂関連遺構群、泉状遺構、土塁など	24
30	19次調査(13RT-HG016)	東野舞台町20, 20-4	2013.10.28～ 11.25	発掘	中世の塚土または整地土、平安時代中期の建物、溝、土坑など	25
31	20次調査(13RT-HG017)	西野山階町3513ほか	2014.1.20～ 2.7	発掘	整地土、土塁基部	本報告(1)
32	21次調査(14A001)	西野山階町3513ほか	2014.7.22～ 9.30	発掘	整地面、土塁、堀、溝、柱穴など	本報告(2)

文献一覧（表1の文献番号と一致）

- 1 杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道 1965年
- 2 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 3 「山科本願寺跡1」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 4 「山科本願寺跡2」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 5 「山科本願寺跡」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 6 平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 7 百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年』京都市文化観光局 1988年
- 8 百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 9 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 10 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 11 本弥八郎「山科本願寺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12 永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 13 近藤知子「山科本願寺跡2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 14 吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 2000年
- 15 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
- 16 吉崎 伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 17 小椋山一良・清藤玲子・柏田有香「山科本願寺跡（1）（2）（3）（4）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 18 柏田有香「山科本願寺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 19 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 20 未報告（古代文化調査会による調査）
- 21 家原圭太「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 22 堀 大輔「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
- 23 柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 24 柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 25 近藤奈央「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年

3. 遺構・遺物

(1) 基本層序 (図7)

調査地の現地表面の標高は約42.3m、土塁最頂部は約43.7mである。

寺内側の基本層序は、地表下0.5～0.7mまで近・現代層が堆積する。近代層は、にぶい灰黄褐色のシルト～細砂を主体として炭化物が混じり締まりは悪い。一部土壌化しており、層厚は0.2～0.4mある。その下には近世盛土層が堆積する。近世盛土層は大きくは上下2層

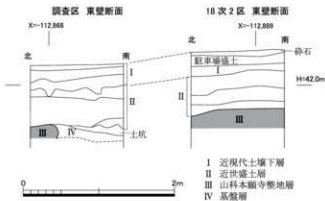


図7 断面模式柱状図 (1:50)

に分かれ、上層は礫混じりのにぶい黄褐色シルト～細砂が主体で非常に締まりが悪い。層厚は0.1～0.3m、下層は暗褐色砂質土層で炭化物・焼土を中量含み締まりが弱い。層厚は0.25～0.4mである。その下、地表下0.8～1mで山科本願寺期の遺構面と考えられる整地層となる。上層は、にぶい黄褐色やオリーブ褐色シルト～細砂に粘土～シルトのブロックが混ざり、固く締まる。下層は、黒褐色や黄褐色シルト～細砂で非常に固く締まる。整地層上面の標高は41.45mである。調査区南東部では整地層直下で褐色粗砂の自然堆積層の基盤層となる。基盤層上面の標高は41.3mである。

土塁部分は、頂部から西側にかけて樹木が繁り、樹根による攪拌が著しいが、地表下0.34mの根の下でにぶい黄褐色砂質土の土塁構築土を確認した。東面も同じく、竹の根による攪拌や近代の攪乱が著しいが、表土以下0.1mでオリーブ褐色砂質土の土塁構築土を確認した。

(2) 遺構 (図8～10)

現存する土塁の内側裾部を検出し、一部断割りにより土塁の構築土を確認した。また、近世盛土層以下で山科本願寺期の整地土を検出し、整地面で東西方向の柱列を検出した。以下では、主要な遺構の概要を述べる。なお、確認調査であるため、遺構の掘り下げは部分的なものにとどまっている。

土塁 土塁の内側裾部を検出した。検出標高は41.55mで約40度の傾斜角で立ち上がる。土塁

表3 遺構概要表

時代	遺構	備考
中世	土塁、柱列1、柱列2	一部掘下げのみ
近世	土坑5	

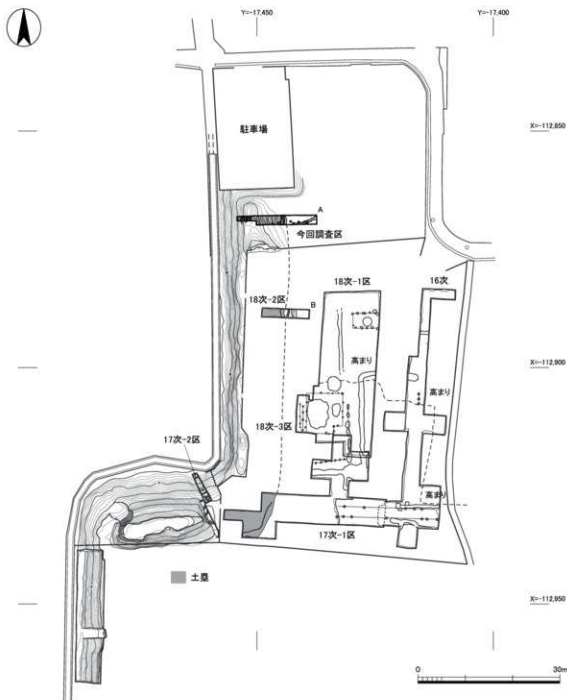


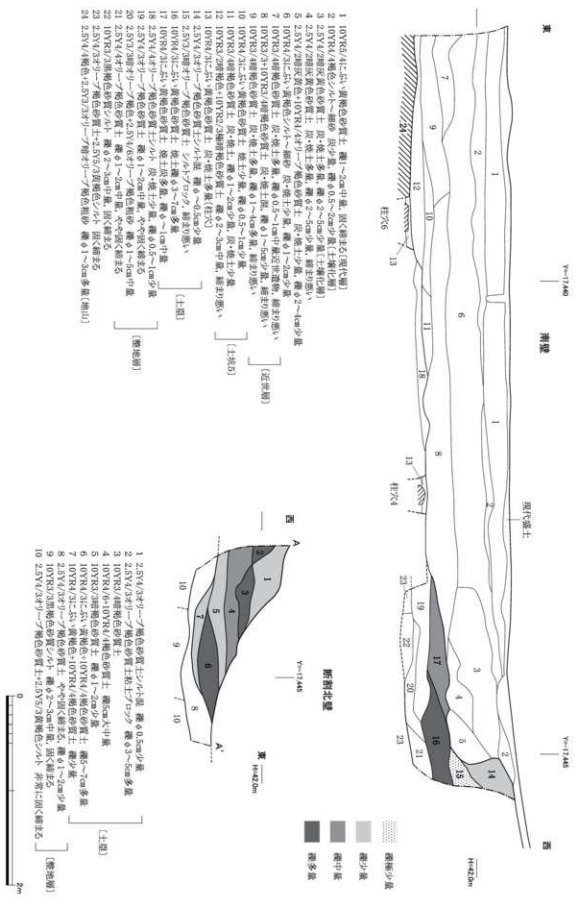
図8 調査区配置図(1:800)

裾部の一部断割り、断面視察を行った結果、構築土は、シルト～細砂の砂質土層と3～7cm大の礫を多く含む砂質土層、礫を中量含む砂質土を交互に積む状況が確認できた。また、土塁は山科本願寺の整地土の上に構築されていることが確認できた。

土塁頂部付近から西側は樹木や竹が繁り、樹根による攪拌が著しいが、土塁構築土を確認した。

柱列1 土塁裾部から東へ約0.6mの位置で東西方向に並ぶ柱穴を3基検出した。座標東に対して約4度南に振れる。柱間は1.7mで、柱掘形の直径は0.4～0.5mある。埋土には焼土、炭を含む。

柱列2 土塁裾部から東へ約1.2mの位置で東西方向に並ぶ柱穴を2基検出した。正方位を示



- 1 10YR3/4棕色砂質土 礫1~2cm中量、固く締まる(現代層)
- 2 10YR3/4褐色シルト-細砂 灰少量、礫φ0.5~2cm少量(土質層)
- 3 2.5Y4/2暗灰褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ2~5cm少量(土質層)
- 4 2.5Y4/2暗灰褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ2~5cm少量(土質層)
- 5 2.5Y4/2暗灰褐色10YR3/4切-7褐色砂質土 灰-粘土少量、礫φ2~4cm少量
- 6 10YR3/4褐色シルト-細砂 灰-粘土多量、礫φ0.5~1cm中量(近表層)
- 7 10YR3/4褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ0.5~1cm中量(近表層)
- 8 10YR3/4褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ0.5~1cm中量(近表層)
- 9 10YR3/4褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ0.5~1cm中量(近表層)
- 10 10YR3/4褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ0.5~1cm中量(近表層)
- 11 10YR3/4褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ0.5~1cm中量(近表層)
- 12 10YR3/4褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ0.5~1cm中量(近表層)
- 13 10YR3/4褐色砂質土 灰-粘土多量、礫φ0.5~1cm中量(近表層)
- 14 2.5Y4/2切-7褐色砂質土 粘土多量、礫φ0.5~1cm中量
- 15 2.5Y4/2切-7褐色砂質土 粘土多量、礫φ0.5~1cm中量
- 16 10YR3/2Si-黄褐色砂質土 粘土多量、礫φ0.5~1cm中量
- 17 10YR3/2Si-黄褐色砂質土 粘土多量、礫φ0.5~1cm中量
- 18 2.5Y4/2切-7褐色砂質土 粘土多量、礫φ0.5~1cm中量
- 19 2.5Y4/2切-7褐色砂質土 粘土多量、礫φ0.5~1cm中量
- 20 2.5Y4/2切-7褐色砂質土 礫φ1~2cm中量、固く締まる
- 21 10YR3/3暗褐色砂質シルト 礫φ2~5cm中量、固く締まる
- 22 2.5Y4/2切-7褐色砂質土 礫φ2~5cm中量、固く締まる
- 23 2.5Y4/2切-7褐色砂質土 礫φ2~5cm中量、固く締まる
- 24 2.5Y4/4褐色2.5Y4/3切-7褐色砂質土 礫φ1~3cm多量(崩山)

図10 調査区南壁・断削り北壁断面图 (1:40)

す。柱間は3.0mで、柱掘形の直径は0.4～0.5mある。柱穴にはそれぞれ2石を据える。埋土には焼土、炭を含む。柱穴6の一部は柱穴3に切られる。

土坑5 調査区北東角から南西方向に整地土を切りこみ、上層には少量の近世の遺物を含む。南東へ延長するため、全体の規模は不明である。

(3) 遺物

今回の調査では整理箱に1箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、銭貨、石製品がある。大半が近世、近代以降のものであるが、極少量の中世の土師器、焼締陶器が近世盛土に混入している。瓦類には二次焼成を受けたものがある。

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
中世	土師器、焼締陶器、瓦				
近世	土師器、染付、施軸陶器、磁器、瓦、金属製品、銭貨、石製品				
近代以降	施軸陶器、磁器、瓦				
合計		1箱	0点(0箱)	0箱	1箱

4. まとめ

今回の調査では、山科本願寺に関わる遺構を検出した。平成24年度調査(18次調査)の2区で検出した土塁裾部の位置は、Y=-17.444m付近で、今回検出した土塁裾部と南北方向の延長線に連続する。しかし、18次調査で検出した土塁裾部に位置する溝は今回の調査では検出されなかった。また、土塁内側裾部の南側で実施した断割り箇所では、整地土の上に土塁が構築されていることが判明した。つまり、寺内が整地された後に土塁が構築されたことを物語っており、これまでの成果と矛盾はない。

また、山科本願寺整地土の検出面は、18次調査では標高41.7～41.75mであるのに対し、今回は41.45～41.5mと約0.2m低い。18次調査の北部で検出した高まりが、今調査区まで及んでいないことが推察される。

さらに、土塁の裾部に近接した位置で、建物の一部と考えられる東西方向の柱列を検出した。埋土上層に焼土を含むため、山科本願寺廃絶時まで存続した建物と考えられるが、土塁に近接することから、建物の性格や土塁が構築される以前の建物の可能性など課題を残すものである。

今回は狭小な調査区であったが、現存する土手状の高まりが土塁の残存部であったこと、その裾部を検出できたことや構築法が確認できたこと、山科本願寺整地土と土塁の関係についての知見が得られたことは大きな成果と言える。

(近藤 章子)

Ⅲ 山科本願寺跡（2）

1. 調査経過

本調査は、京都市山科区西野山階町地内で実施した山科本願寺跡の範囲確認調査である。今回の調査は平成22年度から平成24年度にかけての16～18次調査の北側隣接地であり、山科本願寺の中核となる「御本寺」の中心部に近いことから、その土地利用の解明が期待された。なお、今回は山科本願寺跡の21次調査となる。

調査は平成26年7月22日から9月30日まで実施し、調査面積は231㎡である。調査区は1区と2区の2カ所を設定し、1区は218㎡、2区は13㎡である。1区は20次調査（第Ⅱ章参照）の調査区と重複させた。また廃土置き場を確保するため、1区を南半と北半に分け、南半の調査終了後に北半を調査した。

調査の結果、山科本願寺期に築かれた建物跡や土塁・堀、さらに山科本願寺造営以前に遡る可能性のある遺構を検出し、8月30日には現地説明会を開催した（参加者約150名）。

なお、保存を前提とした確認調査であることから、遺構の掘削は埋没時期や性格を解明するための最低限度にとどめ、埋め戻しの際には土嚢と砂で遺構面を保護している。

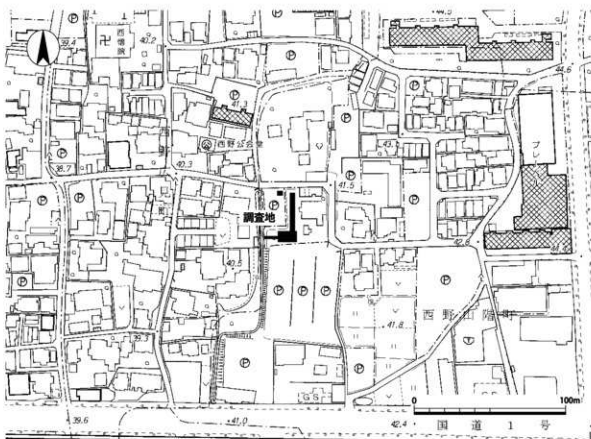


図1 調査位置図（1：2,500）



図2 調査前全景 (南東から)



図3 作業風景 (南東から)



図4 1区埋め戻し状況 (南東から)



図5 2区埋め戻し状況 (北東から)

2. 遺構

(1) 基本層序 (図6)

現地表面は宅地内の1区が標高約42.0～42.3mで高低差は小さいが、敷地内南西の土塁部分のみ盛り上がりしており、土塁の残存頂部は標高43.5mである。一方、駐車場として利用されていた2区は1区の敷地から1段低くなっており、標高約40.7～40.9mほどである。

1区では地表下0.2～0.3m程度の近現代盛土が堆積している。その下層では北端とそれ以外ではやや異なる堆積状況を示しており、北端については後述する。北端以外では、現代盛土の下に暗オリーブ褐色や暗灰黄色の泥砂からなる約0.5m程度の近世盛土層が認められる。近世盛土層は焼土や炭化物を含んでおり、山科本願寺焼亡後の処理に伴うものと推定される。近現代盛土、近世盛土のいずれも層厚には多少の幅があり、近世盛土層除去後の、地表下約0.5～0.8m、標高約41.5～41.6mで山科本願寺焼亡時の遺構面となる。遺構面はおおむね整地層上面に成立しているが、南半では土壌化した基盤層の上面で、焼土を含む柱穴などの焼亡時の遺構を検出している。南に隣接する18次調査区では整地層が厚さ0.6～1.2mに及ぶことが確認されており、今回調査区の整地層よりもかなり厚い。両調査区の遺構面はおおよそ水平であり、旧地形の高低差を大規模な整地で均していることが改めて確認できる。

1区北端では、中央付近に大規模な攪乱を確認したため、その下端まで掘り下げている。北壁断

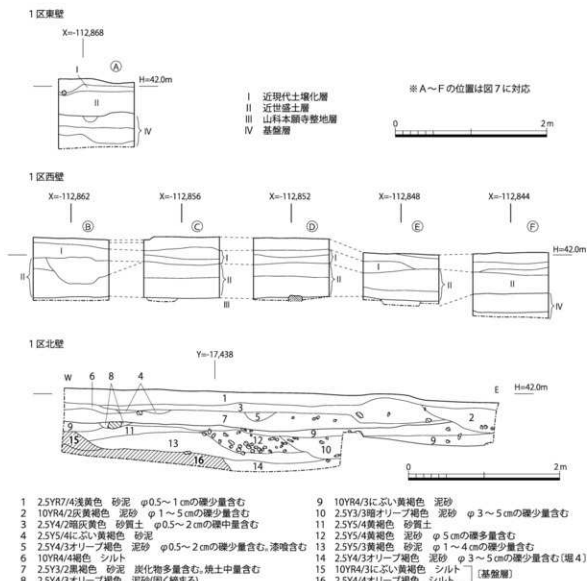


図6 調査区断面模式柱状図・断面図(1:50)

面では近現代盛土の下層に近世盛土層がなく、炭化物・焼土を多量に含んだ黒褐色砂泥の層が確認できた。この層の下面で建物礎石と推定される石を検出しており、炭化物・焼土がこの石を覆っている。礎石は礫を含んだ整地層上面に据え付けられており、さらにその整地層の下面では基盤層を掘り込む南北方向の堀(堀4)を検出している。

1区の土塁部分では土塁東斜面で約0.1mの現代盛土、土塁西斜面で0.5~0.6mの腐葉土を除去し、土塁構築土を検出している。

2区では地表下0.1~0.2mに駐車場造成に伴うアスファルト・碎石、その下約0.1mに現代盛土が堆積し、標高40.6m以下で、山科本願寺造営に関わると推定される層を検出している。1区よりも一段低いことを考えると、上部はかなり削平されていると思われる。

(2) 1区(図7~11)

土塁(図8) 土塁はY=-17,444ラインで東裾を検出し、そこから西に立ち上がる。頂部はY=

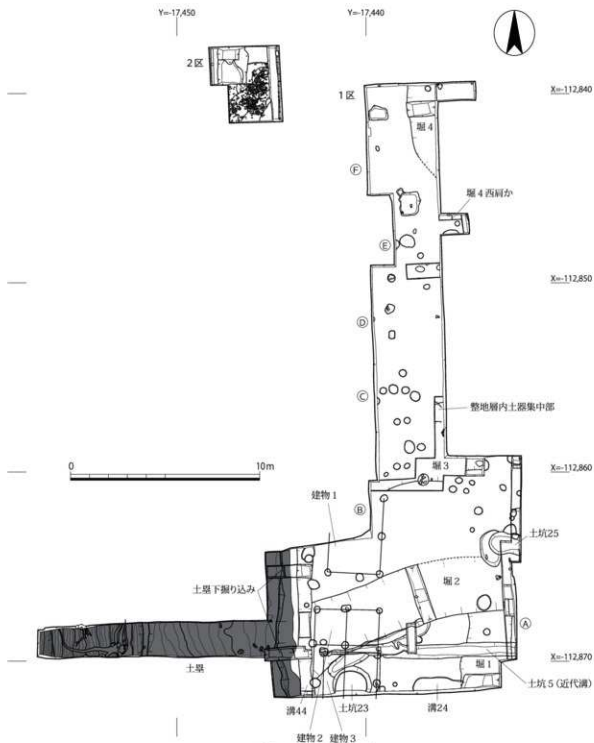


図7 遺構平面図 (1 : 200)

-17,452ライン付近で、標高43.5mである。一方、西斜面は $Y = -17,457$ ライン付近に傾斜変換点があり、傾斜が急になる。この $Y = -17,457$ ラインは濠の肩口だと考えられるため、土塁基底部の幅はおよそ13mとなる。また、18次調査区(図18)で検出された土塁の東裾も $Y = -17,444$ ライン上であり、この間ほぼ正方位で土塁を築いている。土塁東斜面は後世に削平されており、傾斜は緩やかである。元の傾斜が残る東裾の立ち上がり傾斜及び西斜面の傾斜から復元すると、土塁の頂部は $Y = -17,449 \sim -17,450$ ライン付近で、標高45.5m程度となる。一方、南西敷地での平成17

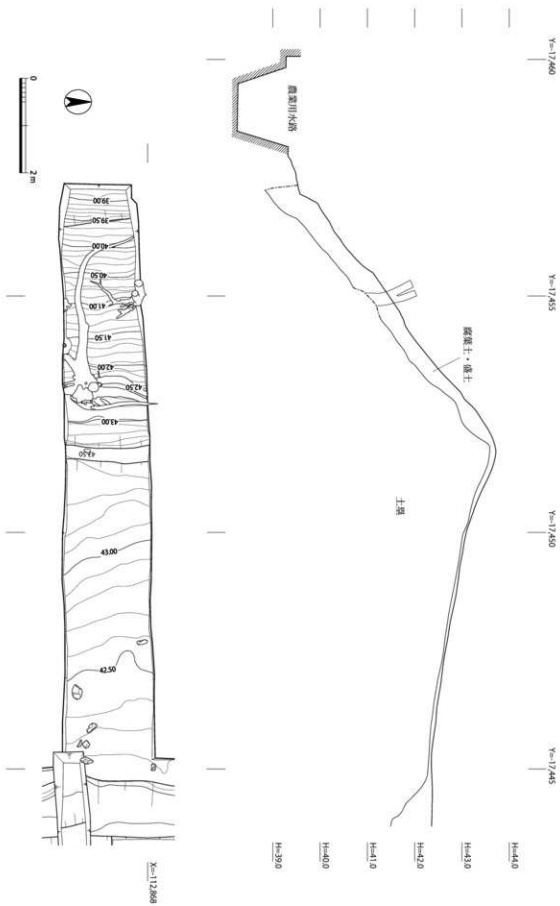


图8 土壘断面图·平面图 (1:80)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代	建物1～3, 堀1～4, 溝44, ビット群, 土塁	
江戸時代～近代	土坑5, 土坑23・25, 溝24	

年度試掘調査では濠の西肩を検出しており、この成果から復元される濠幅はおよそ8mとなる。

土塁は20次調査時に断割調査を実施しており、今回の調査ではその断割トレンチを再掘削するとともにさらに深く掘り下げた(図9)。土塁は7次調査や17次調査で、砂礫層と粘質土層を交互に積み重ねていることが判明している。Ⅱ章で指摘した通り、今回も同様の堆積を確認することができ、構築法が共通することを確認した。

また、土塁の東裾から土塁中心方向への掘り込みを検出した。この掘り込みは土塁基部から深さ1.2mに及び、上面は鉄分の沈着により硬化していた。この掘り込みの延長を確認するため、北側にも断割を入れた。北側断割でも、南側と同じく硬化面を確認し、掘り込みが連続することが判明した。この掘り込みの性格として、

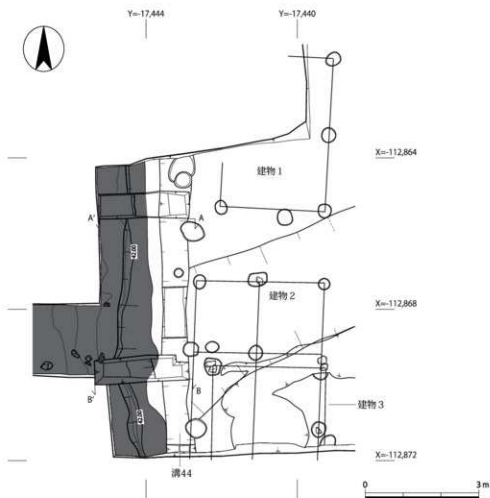
- ①土塁構築時の地盤改良
- ②土塁構築以前の土取穴
- ③土塁構築以前の南北方向の堀

といった可能性が考えられる。①について、掘り込みの上面は硬化しており、極めて強固である一方、埋土はそれほど締まっていない。②については、断ち割りで確認した限りでは掘り込みは後述する堀4の埋土内で止まっており、土取り穴としては不自然である。③の可能性も否定できないが、いずれの可能性も西肩を検出していないため、決め手に欠き、現時点では断定できない。なお、埋土から山科本願寺期の土師器や陶磁器などの遺物が出土している。

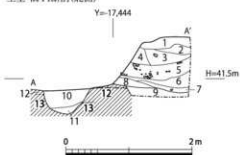
溝44(図9) 土塁の東裾で検出した溝である。幅0.6～0.8m、深さ0.2～0.4mで、南から北に向けて傾斜している。底には微砂ないし砂泥などの砂質層が認められる。17次調査や18次調査でも土塁裾部で溝を検出しており、連続するものだろう。ただし、18次調査で検出した溝は北から南に傾斜しており、溝の傾斜方向は逆である。12・13次調査で土塁の下を通る暗渠が見つかっており、同様の施設につながる排水用の溝であろう。埋土に焼土は含まれず、溝の上面で焼土を埋土とする柱穴(建物2)を検出したため、焼亡以前に埋没したことが確実である。ただし、検出範囲北端から3mほど南までの間には溝44の上面に焼土が溝状に堆積していた。溝44埋没後も周囲よりもやや低い凹みとして残り、焼亡時の焼土が堆積したと考えている。

建物1(図9) 東辺2間、南辺1間分の柱穴列を検出した。柱穴掘方の直径は0.3～0.4m程度である。柱間は南北が約2m、東西で約2.8mで、北で東に約3度振っている。各柱穴は柱当りに焼土や炭化物を含んでおり、山科本願寺焼亡時点まで建っていたものであろう。完掘していないため、柱穴の深さや構造は不明である。

建物2(図9) 北辺、東西辺の南北2間、東西2間分の柱穴列を検出した。柱間は南北で約2

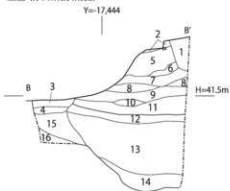


土塁・溝44断面(北側)



- 1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
 - 2 10YR4/4褐色泥砂(固く締まる)
 - 3 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂(固く締まる)
 - 4 2.5Y6/2灰黄色泥砂(固く締まる)
 - 5 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 φ1~5cmの礫少量含む
 - 6 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂
 - 7 2.5Y4/1黄灰色泥砂
上面0.5cmに10YR4/4褐色泥砂の硬化面
 - 8 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
 - 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 φ3cmの礫少量含む
上面0.5cmに10YR4/4褐色泥砂の硬化層
 - 10 2.5Y5/3黄褐色泥砂
 - 11 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
 - 12 2.5Y3/2黒褐色泥砂(基盤層)
 - 13 2.5Y6/2灰黄色砂泥(基盤層)
- (土塁構築土)
- (土塁下掘り込み)
- (溝44)

土塁・溝44断面(南側)



- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 φ0.5~4cmの礫少量含む。プラスチック片あり(現代)
 - 2 2.5Y5/3黄褐色砂泥(土塁上盛土)
 - 3 2.5Y4/4オリーブ褐色泥砂
 - 4 2.5Y5/3黄褐色砂泥 φ0.5~1cmの礫少量含む (溝44)
 - 5 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂(固く締まる)
 - 6 2.5Y3/2黒褐色泥砂
 - 7 10YR4/4褐色泥砂(固く締まる)
 - 8 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥~粗砂 φ2~3cmの礫中量含む(固く締まる)
 - 9 2.5Y3/2黒褐色砂泥~粗砂 φ2~3cmの礫中量含む(固く締まる)
 - 10 2.5Y5/3黄褐色砂泥 φ2~5cmの礫中量含む
 - 11 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 2.5Y5/3黄褐色 粗砂
 - 12 2.5Y3/2黒褐色泥砂 上面0.5cmに10YR3/4暗褐色の硬化層
 - 13 2.5Y3/2黒褐色泥砂 φ3~5cmの礫少量含む (土塁下掘り込み)
 - 14 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂
 - 15 2.5Y6/3にぶい黄色泥砂(固く締まる)
 - 16 2.5Y6/3にぶい黄色泥砂 φ0.5~1cmの礫中量含む (層2)
- (土塁構築土)
- (土塁下掘り込み)
- (層2)

図9 土塁・溝44実測図(平面1:100, 断面1:60)

m、東西で約1.7mであり、北で東に約2度振っている。南辺は調査区外になると推定している。柱穴には焼土・炭化物が含まれ、建物1と同じく山科本願寺焼亡時点まで存在していた建物であろう。東辺の柱穴は溝44の埋土上面で検出しており、溝44埋没後に建てられたことがわかる。いくつかの柱穴で直径0.2～0.3m程度の根石（地下式礎石）を検出しているが、全ての柱穴に共通するかどうかは不明である。

建物3（図9） 建物2と重複する位置で北辺、東西辺を各1間分検出した。柱間は南北で約2.1m、東西で約2.8mであり、北で東に約1度振っている。埋土に焼土や炭化物を含まず、建物2よりも古い段階のものである。溝44との間に切りあい関係はなく、溝44と同時に機能していたと考えている。建物2と同程度の大きさの根石を検出した柱穴もあるが、全ての柱穴に共通するかどうかは不明である。

ピット群 1区で検出した。完掘していないため、いずれも深さは不明であり、遺物も細片の出土にとどまるため、埋没時期の決定には至らない。南北に直線に並ぶものもあるが、今回の調査区内では、建物などの復元はできなかった。

堀1（図10） 1区南端で検出した堀である。断ち割り断面では西肩を確認したにとどまるが、平面的には東肩を検出しており、幅2.3～2.7m、深さ1.5mを測る。少量だが土師器が出土している。底部が平らとなり、台形を呈する。

堀2（図10） $X = -112.864$ から $X = -112.871$ 付近で検出した東西方向の堀である。幅3.0～3.2m、深さ2.0mを測り、断面形はU字状である。北東から南西へと緩やかな曲線を描く。土塁の断ち割り部分でも埋土を検出しており、土塁構築以前に掘られていたことが判明する。埋土は非常に固く締まっており、遺物や礫は極めて少ない。かなり丹念に固められており、堀2を埋めた後の土地利用を強く意識した結果であろう。堀2の埋土は堀1の埋土を切り、堀1よりも後に機能している。埋土の最上層はそのまま整地層となり、堀の北側を覆うため、東半の北辺は検出できていない。東壁際の断割では上述したように、堀1の東肩と基盤層を検出しているため、北肩がここには及ばないことが判明する。

堀3（図11） $X = -112.857$ から $X = -112.861$ 付近で検出した東西方向の堀である。整地層の下面から掘り込んでいる。断ち割り以北肩を確認し、幅は約3.1mとなる。断ち割り部分で礎石と考えられる石を検出し、掘り下げを止めたため、深さや形状は判明しない。墨書のある土師器皿が出土している。なお検出した石は断面で掘方を確認しており、堀埋没後に据えられたことがわかるが、対応する柱穴等は検出していない。

堀4（図11） 調査区北端で検出した南北方向の堀である。西肩のみを検出しており、幅は不明だが、深さは検出面から0.6mであり、底部は緩やかな弧を描く。北壁で確認できる堀上面から断ち割り内の堀下端までは深さ0.7mとなるが、堀上面の整地層は基盤層を掘り込んでおり、堀の機能時はさらに深かった可能性がある。なお、 $X = -112.844$ 付近から南では整地層下を掘り下げておらず、堀の肩は検出していない。南で東に曲がっており、断ち割り部分で西肩を確認している。

溝24 調査区南端で検出した東西方向の溝で、深さは0.4mである。土師器・国産施釉陶器（唐

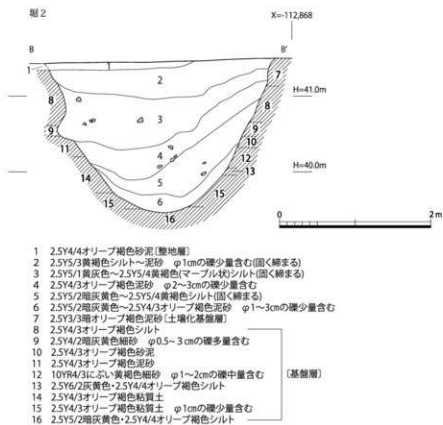
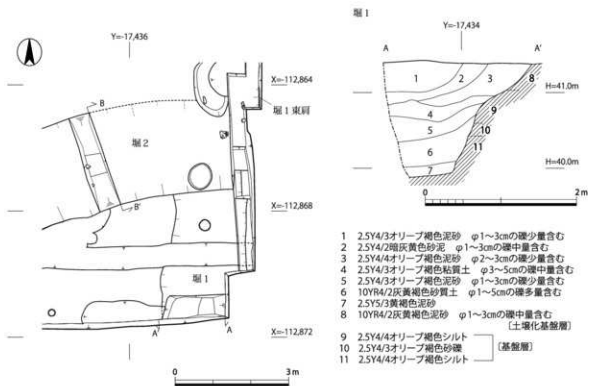


図10 堀1・2実測図(平面1:100, 断面1:50)

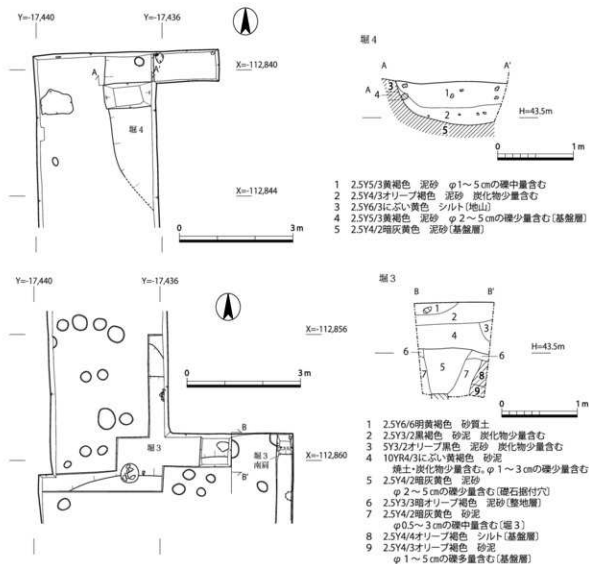


図11 堀3・4実測図(平面1:100, 断面1:50)

津・瀬戸美遺産)などが出土した。遺物は近世初頭に帰属し、溝の埋没もこの頃であろう。山科本願寺期からこの遺構から出土した資料群までの間に位置づけられる資料は出土しておらず、山科本願寺焼亡後再び土地利用が始まるのはこの時期まで下るのであろう。

土坑25 南半東辺で検出した楕円形の土坑である。17世紀後半ごろの土師器皿、瓦器、施軸陶器、瓦などが出土した。

土坑23 調査区南端で検出した円形土坑である。漆喰で円形の枠を作っており、肥溜めとして使われたものであろう。直径約2m、深さ約1mである。幕末から明治初頭ごろの陶磁器、施軸陶器、瓦などが出土した。

土坑5 (近代溝) 20次調査で検出していた遺構だが、東へ伸びる溝であることが判明した。上層は幅2.1m、深さ0.35mだが、下層は幅が狭まり、幅0.7m、深さ0.3mとなる。吹き付け技法を用いた染付やガラス瓶などが出土しており、明治時代後半以降である。

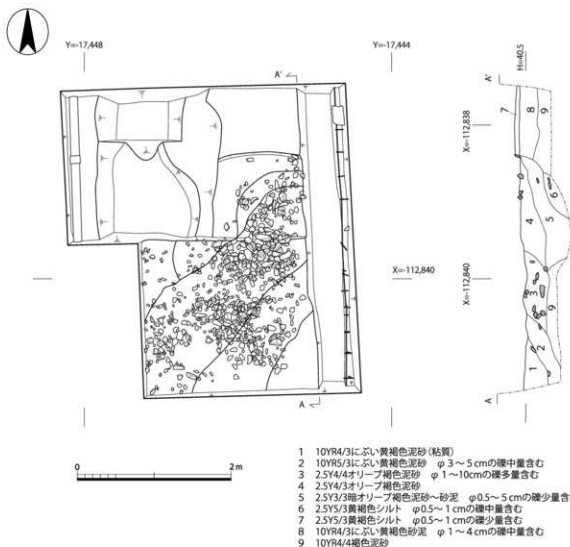


図12 2区実測図(1:100)

(3) 2区(図7・12)

2区では複数の落ち込みを検出している。南の落ち込みが北の落ち込みを切る状態で連続する、すなわち北から南へと新しい落ち込みに連続していく。いずれも北肩の検出であり、規模・深さは不明である。落ち込み内には拳大の礫が多い。落ち込みは人為的なものと考えられ、その性格は明確にできなかったが、個々の落ち込みが山科本願寺造営時の整地の単位と考えたい。1区や18次調査で検出した土塁の東裾を延長すると2区は土塁の範囲内に位置している。1区のある宅地と2区の駐車場の地割りの境がかつての土塁の際を反映していると考えれば、駐車場区画全体が土塁内だった可能性もある。

3. 遺物(図17)

今回の調査では整理箱に8箱の遺物が出土した。大半は土器・陶磁器であり、瓦なども少量出土している。山科本願寺期の遺物が大半を占める。

堀1(1・2)堀1からは土師器が出土している。1・2はともに土師器皿である。いずれも

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器, 瓦器, 焼締陶器, 施釉陶器, 輸入陶磁器, 瓦, 金属製品, 銭貨		土師器28点, 瓦器2点, 焼締陶器2点, 輸入陶磁器3点		
江戸時代 ～近代	土師器, 焼締陶器, 施釉陶器, 輸入陶磁器, 瓦, 金属製品, ガラス製品		施釉陶器3点		
合計		10箱	38点 (1箱)	1箱	8箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くになっている。

白色系で1は口径8.8cm, 2は口径13.8cmであり、口縁が緩やかに外反する。京都IX期新段階に帰属する。

堀2(3) 堀2からは土師器が出土した。中央の断割ではほぼ遺物が出土せず, 3は土壘断割の掘削底, 堀2の埋土から出土した。白色系で口径は13.5cm, 口縁がナデにより外反する。1点のみで, 年代の絞り込みには慎重にならざるを得ないが, 京都IX期新段階ごろの資料であろう。

堀3(4~9) 土師器, 瓦器が出土している。図化しているものはいずれも東壁際の断ち割りから出土した。4~8は土師器皿でいずれも白色系である。4・5・6には墨書が残る。同一固体の可能性が高い。4は図上で5と合成して口縁部までを復元したが, 接合部分がないため正確性には欠ける。内外両面に墨書があり, 見込みには「應仁□」と書かれる。外面は下半が欠損している

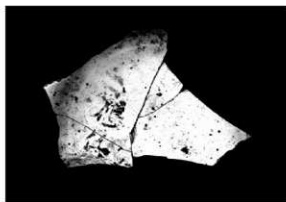


図13 土師器4内面 赤外線写真



図14 土師器4外面 赤外線写真

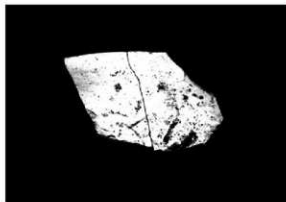


図15 土師器5外面 赤外線写真

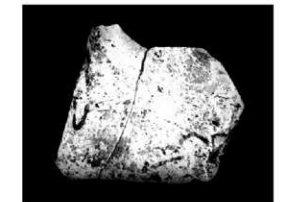


図16 土師器6外面 赤外線写真

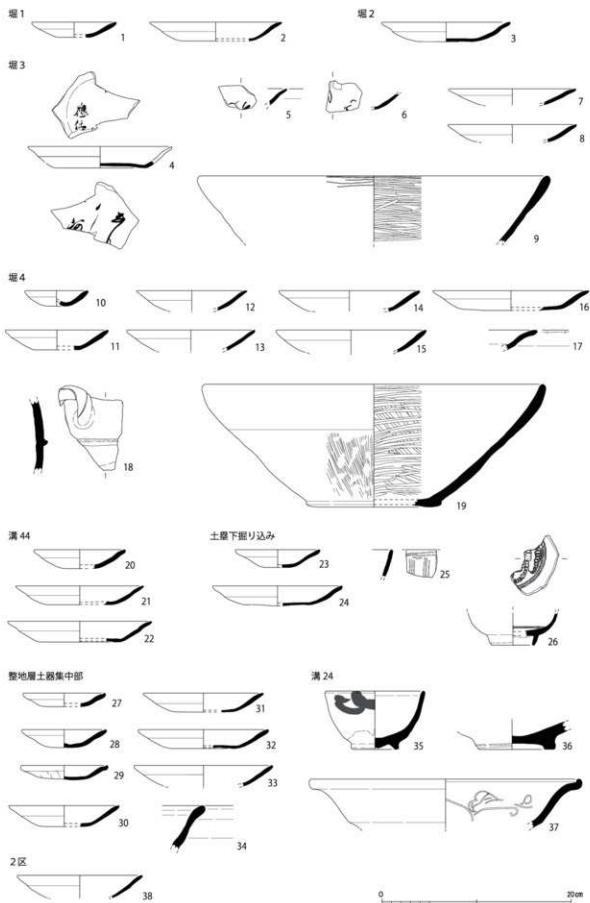


图17 出土遺物実測図(1:4)

が、「なむ」・「□」・「あ」の三列4文字が確認できる。5は口縁部片で外面に墨書があるが判読不能である。6は底部から体部にかけての破片であり、外面に墨書があるがこれも判読できない。7は口径13.4cm, 8は口径13.6cmで、ともに白色系である。9は瓦器の鉢で外面は広く剝離しているが、内面は丁寧に磨く。内面の摩滅は認められない。堀3から出土した土師器皿は体部と底部の境が明瞭になり、体部が短いことから既往の編年では京都IX期新段階からX期古段階に位置づけられ、15世紀末から16世紀初頭の実年代を与えることになる。しかし、4の墨書「應仁」が使用時の年号であれば応仁元年(1467)ないし同2年に絞り込む事ができ、上述した年代観との開きは非常に大きい。応仁は文明10年(1478)の山科本願寺創建をさかのぼる年号であり、年号以外に本願寺に所属する僧侶の名前である可能性も検討すべきであろう。以上のように、直ちにこの資料を実年代の定点とすることには慎重にならざるを得ないが、これまで実年代比定の根拠がなかった14・15世紀の土師器皿編年に再考を促す資料であることは疑いない。

堀4(10~19) 北壁付近の断ち割りから比較的まとまった量の遺物が出土している。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器が出土した。10~16は土師器皿でいずれも白色系である。10は底部を押し上げるいわゆる「ハソ皿」であり、口径6.6cmである。11~16は口径が10.8cm~16.4cmまで幅がある。14はやや赤味がかった色調だが、他は白色系である。17は輸入陶磁器で青磁皿である。18は焼締陶器(備前焼)であり、「水屋裏」と呼ばれる。19は瓦器鉢で、内面はミガキ、外面の上半は横ナデ、下半は縦ハケの上に指頭圧痕が残る。底部には離れ砂の痕跡があり、内面は一切磨耗していない。堀4から出土した土器群は京都IX期新段階に属する。備前焼の水屋裏は15世紀後半に出現したとされ、初現期の資料となる¹⁾。

溝44(20~22) 溝44からは土師器皿、焼締陶器、瓦器が出土している。20~22は土師器皿でいずれも白色系であり、20は口径9.6cm, 21は口径13.4cm, 22は口径15.2cmである。器厚が薄く、体部は直線的であるが、器面はナデによる凹凸を持つ。溝44から出土した土師器皿は底部と体部の境が明瞭で、直線的に開くことから、山科本願寺焼亡時とされる資料に極めて近い。京都X期中段階に属するが、出土状況から山科本願寺の焼亡よりも一段階遡ることは間違いない。

土壘下掘り込み(23~26) 土壘の断ち割り内で検出した掘り込みから出土した資料群である。土師器、焼締陶器、輸入陶磁器などが出土している。23・24は土師器皿でいずれも白色系である。23は口径8.8cm, 24は口径13.6cmである。25は輸入陶磁器の青磁碗で、口縁部のみが出土、26は同じく輸入陶磁器で青花の碗である。これらは京都IX期新段階からX期古段階に属する。

整地層土器集中部(27~34) 堀3北端確認のための断ち割りで、整地層内から出土した。土師器が集中して出土し、焼締陶器も含まれる。27~33は土師器皿で、27~29は皿Sb, 30~33は皿S系統である。口径は27~29は9.0cm前後、30~33は12.0~14.0cm前後である。IX期新段階に属する。34は焼締陶器(信楽焼)の播鉢であり、15世紀中葉から16世紀初頭に比定できる²⁾。

溝24(35~37) 山科本願寺焼亡後に成立した遺構であり、土師器、施軸陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦が出土した。35, 36は唐津産の施軸陶器である。35の外面には鉄絵、36の見込みには胎土目の痕跡が確認できる。37は施軸陶器大皿で、瀬戸・美濃産か。2次被熱を受け、表面は黄

色味を帯びている。溝24から出土した資料はいずれも16世紀末から17世紀初頭に比定できる。今調査で出土した中で山科本願寺焼亡期以後、最も古い資料群であり、山科本願寺跡地の整理・再利用がこの時期まで下ることを示すと考える。

2区(38) 38は2区の東壁際掘乱内から出土した土師器の皿Sで、口径は13.1cmである。2区は上面を削平されているが、山科本願寺期の遺物が出土することから、当該期の活動を裏付けられる。

4. まとめ

今回の調査では山科本願寺焼亡時の建物や土塁を検出した。また、基盤層のレベルが高く、整地層のない一画を含んでいたため、整地以前の遺構を検出することができた。中でも4本の堀は特筆に値する。堀1は堀2に先行し、堀2が埋められたのは本願寺焼亡面の整地とほぼ同時期である。堀3と堀4の前後関係や堀1・2との関係は切り合いからは明らかにできない。出土遺物及び他の遺構との切り合いから、いずれも山科本願寺焼亡以前、本願寺の大規模整地以前に埋没していることが明らかである。山科本願寺の整地が本願寺造営初期のものか、ある程度の施設が出来上がった段階のものかによって、これらの堀の評価が変わる。今回の「應仁」銘土師器の出土により、土師器編年の年代観が揺らぐ以上、出土遺物の年代からの推測は難しい。ここでは2つの可能性を示すにとどめ、結論は資料の増加を待ちたい。

山科本願寺の選地理由として旧来は、この地が扇状地上に位置し、耕作に向かない空地であったためとしてきた。しかし、今回検出した堀が山科本願寺造営以前に遡るのであれば、当地が在地主豪などの勢力により、堀を有する城館として利用されていた可能性がある。基盤層のレベルが高く、山科本願寺造営以前には今回調査区が周囲よりも一段高い地であり、城館としての利用に向いているといえよう。そうであれば、蓮如が本願寺造営に山科の地を選んだ理由として、これまで考えられてきた以上の、在地勢力による積極的な関与・誘致を考慮しなければならない。

他方、検出した堀が山科本願寺造営以前に遡るとは言い切れない。草野顕之氏は土塁の構築は永正年間(1504～1521)で、それ以前は築地塀であったと指摘する³⁾。蓮如は最晩年の明応8年(1499)に「トキ(土居)」と「ホリ(堀)」を見ており、この「トキ」が築地であったのか土塁であったのかは不明だが、堀は確実に存在している。現在も残る、最終段階の土塁及び濠の構築を永正年間と考えるにせよ、15世紀末の時点では現復元案の濠とは別の堀があった可能性は高い⁴⁾。その一部が今回検出した堀の可能性は十分にある。平成17年に国道1号線・東海道新幹線の南で行った発掘調査⁵⁾では、東西方向・南北方向の堀のほか、斜め方向の堀を検出しており、断面形状は今回検出した堀と一致している。当該報告ではこれらの堀を土塁「内部」の防衛施設と評価しているが、今回の調査成果から、土塁構築以前の「御本寺」外郭を示す可能性も考えねばならない。山科本願寺の姿を最終段階の外郭線のみでとらえるのではなく、より動態的なものとしてとらえる必要性は既に指摘されているが、今回の調査成果でその一端をつかむことができた。今後は山科本願寺が、寺内町を囲んだ複雑な外郭線を持つにいたる過程の解明が求められる。

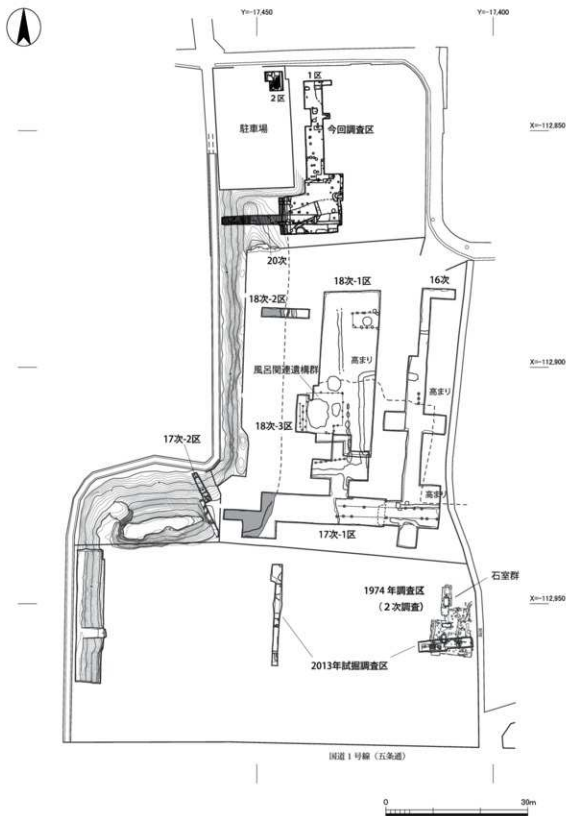


図18 今回調査区と周辺調査 (1 : 800)

調査区内に現存する土塁は東斜面が削平されているが、構築方法は他の地点と共通しており、その規模もおおむね一致することを明らかにした。20次調査の所見でも述べている通り、整地の後に土塁が築かれている点は注意すべきであろう。7次調査では土塁を断ち切り、土塁構築土の裾がそのまま寺内町の整地に連続することを確認している⁶¹つまり、同じ「御本寺」内であっても、中心部に近い今回の調査区付近では土塁構築以前に整地していた一方で、7次調査を実施した南西部は土塁構築と整地は同時である。土塁構築に伴い、それ以前よりも寺内町の領域を大きく広げて整備した可能性は十分にあらう。土塁下の掘り込みの性格は不明だが、上述の課題とも絡め、山科本願寺焼亡期よりも一段階古い出土遺物は土塁の構築年代を考える一助となろう。土塁東裾で検出した溝44は天文元年（1532）の焼亡以前に埋められ、溝に重なる位置で焼亡時の建物跡を検出した。調査区内で復元できた建物は多くないが、土塁際のあまり条件の良い位置に、排水機能を犠牲にしても建物を建てていることから、このあたりでの非常に密な土地利用を推測できる。18次調査では南半で石風呂を検出する一方、北半では井戸から多量の炭化米が出土したことなどから、炊事施設や土蔵の存在が推定されている。18次調査地点の土地利用状況から鑑みると、石風呂や、さらに南で検出されている庭園遺構なども含めた宗主の私的空間から、北側では徐々にそれを支える実務空間へと移っている。さらに北に位置する今回の調査区も土地利用の密度から、実務空間であったと推定する。

2区では調査範囲の制約もあり、性格は明確にできなかったが人為的と考えられる落ち込みを検出した。当初、調査区の北側を通る道が山科本願寺期に遡る可能性を考え、その道に対する施設の検出を期待した。しかし、調査結果からは2区全体が土塁内であった可能性も指摘できる。そうであれば、道を挟んだ北側に残る土塁との間は非常に狭く、山科本願寺期の開口部の有無、すなわち道の有無は慎重な判断が必要となる。福島克彦氏は山科本願寺を描いた絵図を11点挙げている⁷¹。このうち、洛東高校所蔵の『山科古図』や大谷大学所蔵の『山科本願寺旧迹絵図』には今回調査区付近に道を描き込んでいるが、光照寺所蔵の『野村本願寺古御屋敷之図』や大谷大学所蔵の『山科本願寺旧迹之図』には他地点の開口部を描く一方で、当該箇所は開口していない。後者は宣如（1602～1658）が写させたとの書き込みがあり、これを事実とみれば江戸時代初期の状況を示すことになる。調査所見と合わせ、西辺の開口部は江戸時代の中期以降に開けられたものと推定しておく。

今回の調査では、山科本願寺造営に至る過程、「御本寺」外郭線の復元のために、非常に有益な成果を得た。また、「御本寺」内の空間利用の実態についても新たな知見を得ることができた。

（新田 和央）

5. 総 括

(1) 調査成果と山科本願寺跡

当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地、山科本願寺跡の中核「御本寺」に含まれる。平成22年度から24年度の南隣接地での保存目的のための確認調査に続いて、今回の25・26年度の調査の結果、本願寺門主の私的空間である「宗主空間」内の様相が明らかになってきた。御影堂と阿弥陀堂が南北に並び、両堂の西側には、炊事関連施設、石風呂遺構群、さらにこの遺構群の南東や南西には「御亭」や「寝殿」に比定できる複数の建物や庭が検出されている。今回の調査では、炊事関連施設の北側に小規模な掘立柱建物群が配置されていたことが明らかとなった。

また、複雑な折れを持つ堀と土塁、「御本寺」「内寺内」「外寺内」で構成される山科本願寺の姿は創建当初からのものではなく、3段階以上の変遷を経て、天文元年（1532）に落城したことが明らかとなった。創建時の形態がこれらの特徴と異なることは、草野顕之が文献資料から⁸⁾、柏田有香が過去の調査成果から論じている⁹⁾。今回の調査の重要性は、それらの論拠を裏付ける確実な遺構や遺物が出てきたことである。「御本寺」西側を限る土塁構築土の下層に、「宗主空間」を構成する整地土が広がること、この整地土の下層から、4条の堀跡が検出されたことである。「應仁」と墨書された土師器皿の出土もこの地を考える上で極めて重要である。

変遷の第1段階は、宗主空間の整地及び土塁が構築される以前の段階である。今回検出された4条の堀はいずれもこの段階に属する。断面逆台形の堀1は、断面U字形の堀2に先行しており、堀の築造にも先後関係がある。また、堀2・堀3が御本寺北限よりもかなり南の位置を緩やかな弧を描いて北東から南西の現存土塁の側に延びていることから、御本寺の形態そのものを再考する資料になると考える。「應仁」墨書土器の出土から、一部の堀は山科本願寺成立以前に遡る可能性もある。当該地は、中世の山科七郷のうち、「野村」を構成する西野村にあり、応仁・文明の乱中、度々戦乱に巻き込まれている。特に文明2年（1470）6月末に山科七郷の大半が焼亡している¹⁰⁾ことも、変遷を理解する上で重要である。

第2段階は、大規模な整地と土塁の構築が行われた時期である。

第3段階は、土塁内側の排水機能を担っていた土塁裾の南北溝を埋め立て、宗主空間を拡大している段階である。この溝を埋めた後に成立した建物2は建物1とともに、柱穴に焼土・炭化物が含まれており、天文元年まで存続したと考える。

以上、本調査では、山科本願寺が従来考えられていたよりもはるかに複雑な課程を経て成立したことが明らかとなり、当該敷地の重要性は極めて大きいと考える。

(2) 今後の課題

最大の課題は、山科本願寺の中核施設である阿弥陀堂と御影堂の両遺構を検出できていないことである。次に、蓮如・実如・証如のそれぞれの時期の山科本願寺の実態を解明することである。3

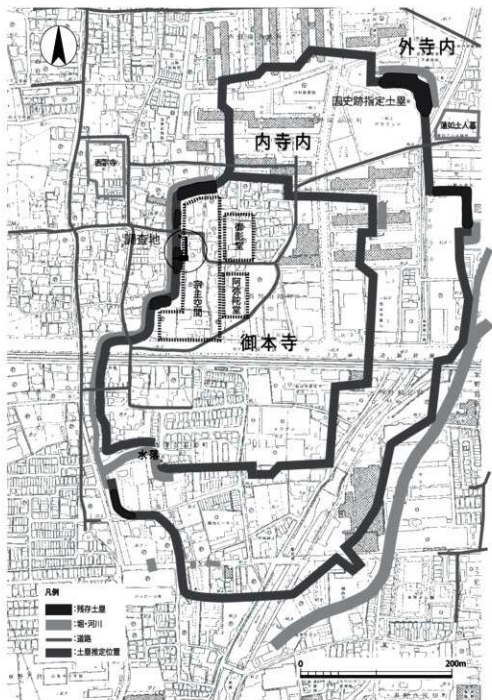


図19 山科本願寺概念図(1:5,000)

代54年間にどのように変化したのか、特に、蓮如の『御文』に「惣而四壁」とあり、創建当初は一般的な方形の境内と考えられる一方、蓮如最晩年には「マハリノトキ(土居)」と「ホリ」の巡見を行っており、15世紀末には土塁と堀を備えていたと考えられることである。最終段階を特徴づける多重構造の成立時期の解明が必要である。

(馬瀬 智光)

註

- 1) 乗岡実「中世備前境の水屋裏」『山陰中世土器研究』1, 山陰中世土器検討会, 2013年。

- 2) 畑中英二「信楽焼の編年と技法」『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版、2007年。
- 3) 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館、2002年。
- 4) 小楡山一良「山科本願寺跡(1)」『京都市内遺跡 発掘調査報告』平成17年度、京都市文化市民局、2006年。調査位置はⅡ章 図6・表1-13。
- 5) 最終段階の濠が前代の堀を踏襲している可能性もあるが、土塁構築に要する多量の土砂調達は、濠の掘削によって大部分を賄ったと考えられるため、少なくとも土塁構築以前は最終段階の濠とは異なる形状であったことは指摘できる。
- 6) 近藤知子「山科本願寺2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1999年。
- 7) 福島克彦「城郭研究からみた山科寺内町」『戦国の寺・城・まち—山科本願寺と寺内町—』山科本願寺・寺内町研究会編、法蔵館、1998年。
- 8) 3)に同じ。
- 9) 柏田有香「山科本願寺の造営と堂舎配置～最新の調査成果より～」『京都市府下の重要遺跡の再検討3』京都市埋蔵文化財研究会、2014年。
- 10) 酒井紀美『応仁の乱の在地社会』同成社、2011年。

IV 中臣遺跡 88次

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

この調査は、京都市山科区勤修寺西金ヶ崎244でおこなった文化庁国庫補助事業による発掘調査である。今回の敷地は、旧石器時代から中世にいたる集落遺跡である中臣遺跡の中央西半に該当しており、中臣遺跡の88次調査となる。

耕作地であった当該地に共同住宅の建設が計画されたため、平成26年7月3日に文化財保護法第93条に基づく届出がされ、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が平成26年9月26日に試掘調査をおこなった。その結果、弥生時代から古墳時代とみられる遺構群を検出した。届出された計画では遺跡が保存されないため、記録保存のための発掘調査をおこなった（図1）。

(2) 調査の経過

発掘調査は11月10日から開始し、地表下0.5～0.7mの地山まで重機掘削をおこなった。その



図1 調査位置図 (1:5,000)



図2 調査前全景(北から)



図3 作業風景(北から)

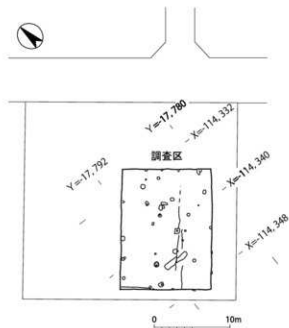


図4 調査区配置図(1:500)

後、人力掘削で遺構検出と遺構掘削をおこない、調査区の平面および壁面の実測図作成と写真撮影を実施した。11月26日に埋め戻しをおこない、現地での調査を終了した。調査区は計画建物にあわせて東西12m、南北16mの約192㎡を設定した(図4)。

今回の発掘調査では、試掘調査で検出した遺構群の確認と、その広がり把握を主目的としておこなった。また、これまで継続的におこなわれている中臣遺跡の発掘調査成果とあわせ、集落の様相を明らかにすることを念頭におき調査を進めた。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

中臣遺跡のある山科盆地は、北を如意ヶ嶽、東を音羽山、西を稲荷山に囲まれ、南側に開けた地形となっている。この盆地の中央を山科川が南流し、北西から南東に流れる旧安祥寺川と合流する。中臣遺跡は、この山科川と旧安祥寺川合流地点北方の栗栖野丘陵を中心に広がる遺跡であり、山科盆地の中心的な集落遺跡である。

中臣遺跡は旧石器時代から中世の集落遺跡であるが、出土したもっとも古い遺物は、74次調査でみつかった約2万年前の旧石器時代後期のナイフ形石器であり、剥片・破片を含めて約1,400点みつまっている。

縄文時代には後期の土坑、晩期の土器棺墓などがみつかっており、また鉄・槍先などの石器や縄文土器が出土し、集落が営まれたことが明らかになっている。

弥生時代には多くの竪穴建物や方形周溝墓が見つかり、活発な土地利用がおこなわれる。弥生時代後半から古墳時代初頭になると多くの竪穴建物がつくられ、中臣遺跡の盛期となる。竪穴建物は、栗栖野丘陵上ではあまりみられず、西方の旧安祥寺川左岸と東方の山科川右岸で多くみられる。

5世紀中頃から後半には一辺6～12mの方墳が山科川右岸に造られる。方墳の主体部は削平により残存していないが、横穴式石室導入以前に用いられた木棺直葬であったと推定される。6世紀中葉から7世紀初頭には山科川右岸の段丘斜面に沿って土坑墓が分布する。土坑墓は7世紀の初め頃までは造られつづけるが、6世紀後半から7世紀初頭には、土坑墓と並行して旧安祥寺川左岸の段丘斜面に横穴式石室を有する古墳もつくられた。これが「中臣十三塚」である。

古墳時代後期には多くの竪穴建物とともに掘立柱建物もつくられ、中世まで継続的に集落が営まれる。7世紀末から8世紀初頭になると竪穴建物は減少し、8世紀前半には掘立柱建物のみで集落を構成するようになる。

(2) 周辺の調査(図5)

当該地の周辺では多くの発掘調査がおこなわれている。

3次 当該調査地の北側にある道路部分で昭和48年に発掘調査をおこなっている。今回の調査地に近いところでは、3～4世紀の竪穴建物2棟、6～7世紀の竪穴建物2棟、掘立柱建物2棟を検出している¹⁾。

8次 南東部で昭和52年度に発掘調査をおこない、柱穴状ピットが確認されているが、詳細は不明である²⁾。

35次 52次と68次調査区の北西隣地で昭和55年度に発掘調査をおこない、弥生時代後期の竪穴建物3棟、土坑3基、7世紀中頃の竪穴建物3棟、掘立柱建物2棟を検出した³⁾。

52次 南西隣地で昭和57年度に発掘調査をおこない縄文時代晩期の埋室、3～4世紀の竪穴建物5棟、6世紀後半から7世紀前半の竪穴建物1棟を検出している⁴⁾。

63次 3次調査の北東部で昭和60年度に発掘調査をおこない、古墳時代後期の竪穴建物2棟、掘立柱建物2棟、北西から南東方向の溝1条を検出した。竪穴建物からは馬具(鉸具)が出土している⁵⁾。

68次 北西隣地で昭和62年度に発掘調査をおこない、弥生時代後期の土坑1基、6世紀中頃の南北溝1条、7世紀前半の竪穴建物1棟を検出している⁶⁾。

03N370 当該地の南東隣地で平成15年に試掘調査をおこない、竪穴建物2棟と柱穴や土坑12基を検出した。線掘り調査のためこれらの遺構の時期は不明であるが、周辺の調査成果から、弥生時代～古墳時代のものと考えられる。設計変更により遺構は地中保存されている⁷⁾。

95N657 03N370の南東隣地で平成8年に試掘調査をおこない、竪穴建物を複数検出した。線掘り調査のためこれらの遺構の時期は不明であるが、周辺の調査成果から、弥生時代～古墳時代のものと考えられる。設計変更により遺構は地中保存されている⁸⁾。

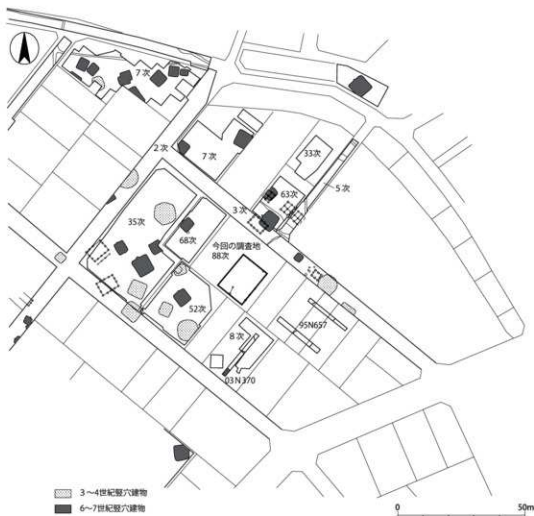


図5 周辺調査位置図 (1:1,500)

3. 遺 構

(1) 層序 (図6)

基本層序は、現代耕作土、床土、旧耕作土、旧床土、黒褐色泥砂層、にぶい黄褐色シルト・暗灰黄色シルト・暗灰黄色砂礫 (地山) である。現代耕作土～旧床土までは厚さ0.3～0.4mである。その下層の黒褐色泥砂層は厚さ0.1mで調査区の北半でのみみられ、南半ではほぼ同じ厚さで灰褐色泥砂層が堆積する。これらの層からは遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、遺構群の上面を覆うため、中世以降に堆積したものと考えられる。

地山は断ち割り調査の結果、にぶい黄褐色シルト、にぶい黄色シルト、暗灰黄色砂礫の3層に分けることができる。最下層の砂礫層は北が低く南が高い。調査区北半では砂礫の地山とにぶい黄褐色シルトの間ににぶい黄色シルトが堆積するが、南半にはみられない。地山は標高28.8mで検出した。なお、現状の地表面は前面道路から約0.8m低くなっている。

(2) 遺構 (図7)

遺構検出は地山上面 (GL-0.4m) でおこなった。検出した遺構は柱穴と土坑である。

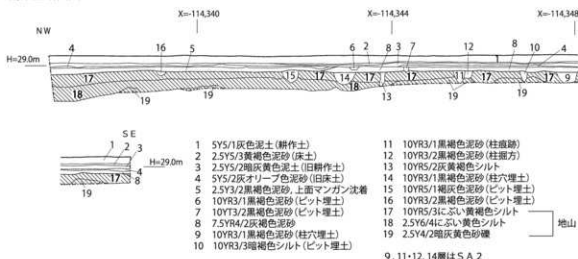
SA1 南西部で検出した柱穴列である。柱穴を2基検出した。柱掘方は一辺0.5～0.6mの隅丸方形で、直径0.2mの円形の柱痕跡が残る。柱間は2.7mであり、約23度東に振れる。柱穴の残存深は0.1mである。

SA2 南東壁で検出した柱穴列である。柱穴を3基検出した。南から2つ目の柱穴には直径約0.3mの柱痕跡がみられるが、ほかの2つにはない。柱掘方は一辺0.5mで、隅丸方形を呈するとみられる。柱間は柱痕跡がないものがあるため詳細は不明だが、およそ南から2.7m、3.0mであり、約41度東に振れる。柱穴の残存深は0.3mである。

SA3 北東壁で検出した柱穴列である。柱穴を3基検出した。柱掘方は直径0.4mの円形である。柱間は2.1m等間であり、約50度西に振れる。柱穴の残存深は0.3mである。

その他に柱穴や土坑などを検出したが、建物として復元できるものはない。ただし、SP4は柱掘

南東壁断面図



北東壁断面図

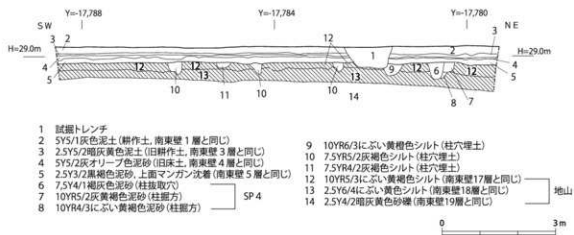


図6 調査区断面図(1:100)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
古墳時代～古代	掘立柱列 SA1～SA3, 柱穴 SP4	

方が一辺0.7mで柱抜取穴をともない、抜取穴は深さ0.5mである。今回の調査区では対になる柱穴を検出できなかったが、北東に展開する掘立柱建物の可能性がある。

今回の調査で出土した遺物は、土師器小片が数点だけで遺構の時期を特定できるものは出土しなかった。

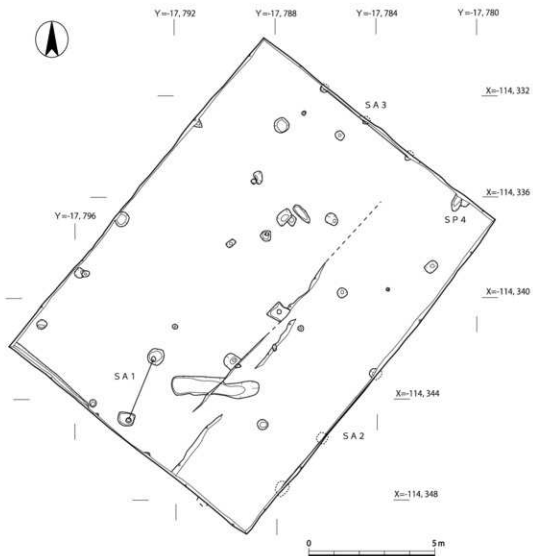


図7 調査区平面図 (1 : 150)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代 ～古代	土師器, 石製品				1箱
合計		1箱	0点 (0箱)	0箱	1箱

4. まとめ

今回の調査では、周辺の調査成果などから弥生～古墳時代の竪穴建物が検出されることが予想された。しかし、竪穴建物は検出できず、掘立柱列を検出した。遺構密度はそれほど高くなかったが、掘立柱列を検出したことは重要な成果である。

周辺で検出している竪穴建物は検出レベルが標高約29.3mであり、竪穴建物の底が29.0mの例が多い。竪穴建物の支柱穴の底は標高28.0～28.5mとなっている。今回の調査では、現地表面が標高29.3mで旧耕作土の下が標高28.9mとなっている。周辺の調査成果から当該地では遺構面が削平されている可能性が高いと判断できる。

中臣遺跡は丘陵頂部から山科川と旧安祥寺川へと低くなる地形となっている。当該地では南西を流れる旧安祥寺川へ地形が下がっているものと考えられたが、断ち割り調査によって砂礫層が南から北に下がっていることが明らかになった。また、黒褐色泥砂層も北半にのみ堆積していることから南が高く北に低い地形であったものを、耕地化する際に南を削り平坦にしたものとみられる。今後の調査では、中臣遺跡の微地形と遺構の広がりに注意する必要がある。

(家原 圭太)

註

- 1) 『中臣遺跡 1973 京都市埋蔵文化財年次報告 1973-Ⅲ』京都市文化観光局文化財保護課, 1974年。
- 2) 『中臣遺跡 文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977年』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1978年。
- 3) 「35次調査」『中臣遺跡発掘調査概報 昭和55年度』京都市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1981年。
- 4) 平方幸雄・辻裕司「52次調査」『中臣遺跡発掘調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1982年。
- 5) 木下保明・丸川義広「63次調査」『中臣遺跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1986年。
- 6) 平方幸雄「68次調査」『中臣遺跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1988年。
- 7) 「一覧表 No.54」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局, 2004年。
- 8) 「一覧表 No.61」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局, 1997年。

V 芝古墳

1. 調査の目的と経過 (図1～4)

本調査は文化庁国庫補助事業に伴う発掘調査である。調査地は西京区大原野石見町632番3にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地「芝古墳(旧芝1号墳)」に該当する。

京都市域では、現在までに177の古墳(群)が認知されており、その総数は800基以上にのぼる。このうち京都盆地に所在する古墳は、盆地を囲む三方の丘陵とその付近に集中する傾向が強い。これらの古墳の中でも桂川右岸、いわゆる「乙訓地域」に所在する古墳は全国的にも著名であり、学史上においても重要な役割を果たしている。近年、

京都市・向日市・長岡京市・大山崎町において、この乙訓地域に存在する古墳のうち、一定の規模を有するものに対して保存を目的とした発掘調査が多数実施されている。しかし、芝古墳は乙訓地域の首長墓の一つと考えられる前方後円墳であるが、これまで本格的な調査は実施されておらず、その評価は不明確なものに留まっていた。このような状況下において、芝古墳を明確に位置付ける上での基礎資料の整備は急務であった。そのため、昨年度の測量調査に引き続き、今年度は範囲確認を主目的とした発掘調査を実施することとなった。

調査区は、後円部に3ヶ所(1～3トレンチ)、前方部に1ヶ所(4トレンチ)設けた。調査面積は4ヶ所の合計で45.9㎡で、調査期間は平成26年10月1日から11月28日である。なお、現地説明会を11月8日に実施し、約130人の参加者を得た。

2. 遺跡 (図5)

遺跡の位置と地理・歴史的環境

地理・歴史的環境 古墳の所在する大原野石見町は、現在の京都市西京区に属しており、京都の市街地からおおよそ南西に10kmの場所に位置する。この大原野という地域は、乙訓と呼ばれる地域の中では南西部にあたる¹⁾。北と西に西山山地がそびえ、東は松尾山から南北に派生する向日丘陵によって京都盆地とは画された地域である。三方が山に囲まれているため、独立した盆地のような体を成す。

乙訓地域の東方には桂川とその支流が流れ、やがて大阪湾へと流れ込む。また、西国街道や久我



図1 調査位置図 (1:15,000)



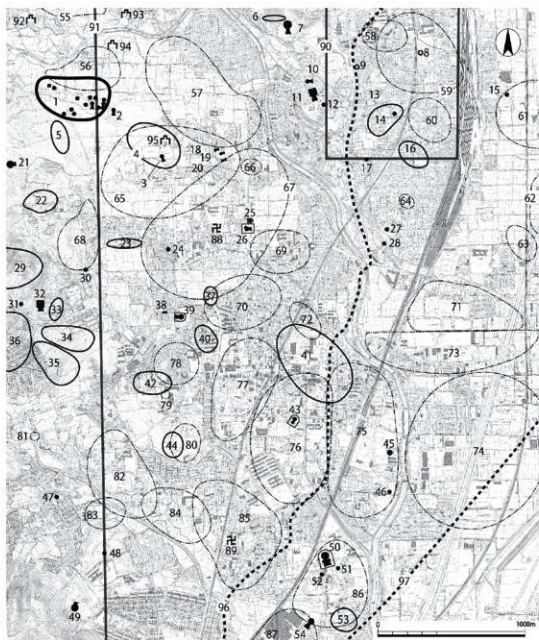
図2 樹木伐採風景（左上・北東から）
 図3 現地説明会風景（左下・北西から）
 図4 トレンチ埋戻し後風景（右上・北から）

曠の存在は、乙訓という地域が古くから陸運・水運の要衝であったことを示唆する。加えて、継体天皇の3番目の宮である「弟国宮」がこの地におかれたとされる伝承や、『日本書紀』の延暦6年10月8日条では長岡京遷都に際して桓武天皇が「朕、水陸の便なるをもつて、都をこの邑に遷す」と述べている点からもそれを首肯出来よう。

現在まで、この地域では多くの遺跡が確認されている。中でも、今里遺跡で出土した国府型ナイフ形石器は後期旧石器時代の所産であり、古くから人類の痕跡が認められる。続く縄文時代においても、上里遺跡や井ノ内遺跡などで縄文土器や竪穴住居が確認されている。その後、弥生時代では、雲宮遺跡や神足遺跡などが乙訓における代表的な弥生時代の集落遺跡として知られる。

古墳時代においても、依然として多くの遺跡が認められる。特に、古墳時代を通して活発にみられる造墓活動は乙訓地域を特徴づけている。これまで、この地域の古墳に関しては多くの研究が蓄積されているが、その中でも都出比呂志氏による首長墓系譜に関する論考は、その後の研究に強い影響を与えた²⁾。これらの研究によると、乙訓地域の首長墓は大きく3つに大別される。すなわち、櫻原・山田グループと向日グループ、そして長岡グループである³⁾。

この乙訓地域において、まず古墳の築造を始めるのは向日グループであり、それに櫻原・山田グループが続く。長岡グループでは、他のグループには遅れるものの前期後半に境野1号墳や長法寺南原古墳が出現し、前期後葉には今里車塚古墳や鳥居前古墳が築かれる。中期には、今里庄ノ淵古墳や鏡山古墳、カラネガ岳2号墳、そして恵解山古墳が築造される。恵解山古墳は、中期前葉に位置付けられる約128mの前方後円墳であり、この規模は乙訓地域で最大となる。また、前方面中央の副葬品納施設からは鉄製武器を中心に約700点もの遺物が出土していることから、政権中枢との強い結びつきを見て取れる。現時点においては、この恵解山古墳以降から中期末葉の舞塚古墳まで顕著な古墳が確認されていない。しかし、後述のように遺物の散布や絵図などから既に消滅し



【古墳】

- 1 芝古墳群 2 井ノ内車塚古墳 3 井ノ内稲荷塚古墳 4 井ノ内古墳群 5 北平尾古墳群 6 大牧古墳群 7 五塚原古墳 8 山開古墳
 9 中ノ段古墳 10 北山古墳 11 元稲荷古墳 12 稲荷社古墳 13 大極殿古墳 14 山畑古墳群 15 狐山古墳 16 南海古墳群 17 御塔道古墳
 18 南内堀古墳 19 下東ノ口古墳 20 殿玉郎塚古墳 21 カラネガ岳2号墳 22 光明寺古墳群 23 長法寺七ツ塚古墳群 24 兼助堂古墳
 25 今里庄ノ湖古墳 26 今里車塚古墳 27 西小路古墳 28 南小路古墳 29 南原古墳群 30 山ノ下古墳 31 望ノ上古墳 32 長法寺南原古墳
 33 南原車塚古墳 34 稲荷山古墳群 35 走田古墳群 36 大原古墳群 37 舞塚古墳群 38 船塚古墳 39 今里大塚古墳 40 宇津久志古墳群
 41 開田古墳群 42 東代古墳群 43 塚本古墳 44 天神山古墳群 45 丸敷古墳 46 神足古墳 47 塚穴ノ前古墳 48 西明寺古墳
 49 鳥居前古墳 50 惠解山古墳 51 南栗ヶ塚古墳 52 西ノ口古墳 53 久保古墳群 54 境野1号墳

【古墳時代の集落遺跡等】

- 55 上里北ノ町遺跡 56 大原野石見遺跡 57 上里遺跡 58 岸ノ下遺跡 59 森本遺跡 60 内裏下層遺跡 61 竊冠井遺跡 62 竊冠井清水遺跡
 63 芝ヶ本遺跡 64 円山遺跡 65 井ノ内遺跡 66 更ノ町遺跡 67 今里遺跡 68 井天芝遺跡 69 北ノ町遺跡 70 陶器町遺跡 71 鴨田遺跡
 72 明星野遺跡 73 馬場遺跡 74 雲宮遺跡 75 神足遺跡 76 開田遺跡 77 開田城ノ内遺跡 78 東代遺跡 79 西陣町西遺跡 80 天神山遺跡
 81 碓遺跡 82 下海印寺遺跡 83 西山田遺跡 84 伊賀寺遺跡 85 友岡遺跡 86 南栗ヶ塚遺跡 87 碓遺跡

【古墳時代以降の遺跡】

- 88 乙訓寺 89 新間興寺 90 長岡宮跡 91 長岡京跡 92 上羽城跡 93 上里城跡 94 石見城跡 95 井ノ内館跡 96 西国街道 97 久我堀

図5 周辺の遺跡位置図(1:25,000)

たと考えられる古墳の存在が想定されており、その中には親皇御塚古墳などのように前方後円墳と推察されるものがみられることには注意が必要であろう。後期前半には、今回調査を行った芝古墳や井ノ内車塚古墳・稲荷塚古墳、塚本古墳が築かれる。しかし、後期末には前方後円墳の可能性を有する今里大塚古墳を最後に首長墓は確認されていないことから、この古墳をもって乙訓における首長墓の築造は終焉を迎えたものと推定される。その後は、横穴式石室を主体とする群集墳が7世紀代まで営まれていくのみである。

現在、このような造墓活動の基盤となったと推定される集落遺跡も多く確認されている。大原野以南の地域においては、神足遺跡や今里遺跡、開田城ノ内遺跡などで古墳時代を通して集落が営まれたことが判明している。芝古墳の付近にも、大原野石見遺跡や上里遺跡などの集落遺跡が確認されており、その関係性が注目される。

続く飛鳥時代以降には、乙訓寺や鞆岡廃寺などの寺院が造営された。特に、乙訓寺はこの地域の中でも中心的な寺院と考えられ、同一地域における権力者による古墳築造の終了と寺院の造営開始という推移が見て取れる。その後、784年には、都がこの地に移され長岡京と命名されたものの、794年には平安京に遷都される。これ以降は、平安京の隣接地域として度々、文献に登場することとなる。中世においては、集落のほかには土豪の居館などが確認されており、芝古墳の周辺でも上里城跡や石見城跡、井ノ内館跡などが確認されている。

以上、この地域の概略に触れた。やはり、古墳時代における活発な造墓活動は、この地域の特徴の1つに挙げられる。また、これに限らず多くの遺跡が確認されていることは、この地域が交通の要衝であることを示唆し、かつ「弟国宮」や長岡京が乙訓の地に設けられたことは、政権中枢においてこの地域の重要性が強く意識されていたことを示している。この地理的環境こそが、乙訓地域に刻まれた歴史の基盤と言えよう。

芝古墳群 芝古墳群は、桂川の支流である小畑川によって形成された低位段丘上に立地しており、その標高はおよそ50mである。現在の京都市西京区大原野石見町から長岡京市井ノ内頭本・向井芝、今里口山の範囲に分布しており、計14基から成るとされる⁴¹。しかし、この数字は現在までに確認できた古墳の総数である。古墳群の所在する付近は、筍の生産が活発な地域として有名であり、現在でも芝古墳が所在する敷地の付近一帯では竹藪が多く確認できる。その筍栽培には、大量の土が必要になるため、古墳等の構築物は土取りの恰好の対象となる。事実、芝14号墳は大正7年に土取りにより破壊されている。また、このように古墳を破壊して土取りを行うと、土やその周辺には古墳に伴う遺物が散乱する。この付近一帯は、このような遺物の散布が多く認められる地域として知られており、消滅した古墳も少なくないものと推察される。その点に関しては、これまでに地図・地籍図・地誌からの検討もなされている⁴²。それに加えて、『向日市史』には芝古墳群の中の1基から5世紀前葉から中葉の時期の円筒埴輪が採集されたことが記されるものの、この周辺で当該期の古墳の存在は確認されていないため、これについても消滅した古墳の遺物である可能性が高い⁴³。あわせて、芝古墳の南側にかつて大きな土山が存在したという地元の古老の話も参考にするならば、その全てを芝古墳群として同一視できるかどうかは検討を要するものの、この

近辺に所在した本来の古墳の数が増える可能性は非常に高いといえる⁷⁾。

さて、芝古墳群ではこれまで正式な調査はほとんど実施されていない。昭和42年に京都府教育委員会によって分布調査が行われて以降、平成25年の京都市による測量調査まで手付かずの状況であり、情報は総じて少ない⁸⁾。現時点で、明らかになっている芝古墳群の情報をまとめると下のようになる。

まず、芝古墳群は前方後円墳1基、円墳12基、方墳1基の計14基から構成される。その中で時期がある程度判明している古墳は2基存在する。明治30年代に開墾によって発見された12号墳と、大正7年に破壊された14号墳である⁹⁾。12号墳の横穴式石室からは須恵質四注式陶棺2基が出土しており、7世紀前半に位置づけられる。14号墳からは、破壊に伴い横穴式石室から単籠環頭太刀・馬具・須恵器が出土しており、それらから6世紀中頃の築造と考えられている。また、前述のように古墳群中から5世紀前半の円筒埴輪が採集されたこととされるが、詳細は不明である。この他の情報としては、昭和42年の調査時の知見から4号墳と10号墳は土坑墓と推定されている程度である。芝古墳に関しても情報は少なく、これまでの測量調査によって全長32m程の前方後円墳であることが知られるのみで、埋葬施設・外表施設・築造時期などは明らかになっていなかった。そのため、これまで古墳の属性に関する推察がなされてきたが、各研究者によって異なる知見が示されることもあった。特に、築造時期に関しては5世紀前葉～6世紀末までと非常に振れ幅の大きいものであった。

芝古墳の現状 地権者の方への聞き取りによると、古墳の所在する敷地では20年ほど前まで筍の栽培を行っていたが、以降は特段の管理を行っておらず、平成25年度の測量調査時には竹が繁茂している状況であった。

この測量調査によって、約半世紀ぶりに墳丘とその周辺の状態が明らかになった。まず、注目されるのは後円部北西の小丘と墳丘東側の土手状のマウンドである。この2つの高まりは、墳丘裾から5m程離れた場所に位置する。後世の造作とも考え得るが、古墳に伴う遺構の可能性もある。これに加えて、現在の敷地の南側と西側の隣地境界を見ると、墳丘裾から5m程の距離で古墳に沿って盾形に巡っているようにも見える。隣地境界とマウンドで状態は異なるものの、古墳の四方において墳丘裾から約5mの位置にこれらが存在する点には注意が必要であろう。

また、墳丘に関しては後円部の西側斜面において傾斜変換点が認められることから平坦面が存在する可能性が想定される。この他にも、墳丘で5ヶ所の等高線の乱れが確認できる。すなわち、後円部中央と後円部北東斜面、西側くびれ部、墳丘の東側、前方部前面である。後円部中央については盗掘を受けた結果とみられ、深さは約2mに及ぶ。後円部北東斜面は判然としなないものの、盗掘に伴う排土が流出した可能性が想起される。墳丘東側については、墳丘が南北に直線的になりかつ平坦面が広がっていることから、後世に切土をして何らかの土地利用がなされたものと推測される。芝古墳の西側隣接地は現時点で墓地として利用されているが、地元の方への聞き取り調査によると江戸時代末期以前は古墳の墳丘東裾付近まで墓域として利用されており、その後、明治以降には区画が整理されて現在に至るようである。前方部前面と西側くびれ部については、原因を想定し

かねるものの、明らかに人為的な改変である。これらの改変を受けていない部分に関しては概ね良好に墳丘が遺存している。特に、前方部の状況の良さは特筆される。

3. 遺構 (図6, 図版1・2)

調査にあたっては、古墳の規模の確定と墳丘の構築法、外表施設の有無の確認を主目的として、後円部に3ヶ所、前方部に1ヶ所の計4ヶ所のトレンチを設けた。トレンチの設定に関しては、まず現地での観察と墳丘測量図から後円部の中心を設定した(図6のK5)。その後、前方部とくびれ部の幅を復元し、その幅の中心とK5を結んだラインを墳丘の主軸とした。この主軸は、ほぼ真北をむく。この主軸に平行するように後円部北側(1トレンチ)と前方部前面(4トレンチ)に調査区を配した。また、K5を起点として主軸に対して東西にそれぞれ90°振ったラインも併せて設定し、この軸に平行するように後円部西側(2トレンチ)と後円部東側(3トレンチ)に調査区を設けた。以下、その成果について述べていく。

なお、各トレンチの掘削に際しては竹根の繁茂が著しく墳丘面の確定は困難を極めた。そのため、調査区幅の1/3~1/2ほどを先行して断割って墳丘面をとらえて調査を進めていった。従って、部分的に等高線などを壁断面から復元した箇所が存在することを予め断っておきたい。

(1) 1トレンチ (図7・8, 図版3)

後円部の北側に設定したトレンチで、墳丘の北裾と墳丘盛土の様相を確認することを主目的とした。調査区の規模は、幅1mで長さ12.9mとなる。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	古墳墳丘・排水溝・排水溝	
古墳時代以降	火葬墓・石組み遺構・近世墓・牛の埋葬土坑	

調査の結果、墳丘の盛土の様相と古墳に伴う可能性のある溝を確認した。しかし、墳丘裾付近は後世の削平を受けて破壊されており、その正確な位置をおさえることはできなかった。

墳丘盛土 墳丘盛土は、標高52.2m~50.0mの範囲で確認できる。50.0m以下は地山となるが、この地山の上面には土壌化が認められるため、墳丘構築以前の地表面と考えられる。調査区内では、約3.5mにわたってこの地山が水平に続いているのが確認できる。この古墳に使用されている盛土は、大きく2種類存在する。地山由来の黄色系の土と旧表土由来の黒色系の盛土である。これらの盛土は、その堆積状況から、大きく6つの盛土の大単位に分けられる。ここでは、盛土1A(86~95層)、盛土1B(83~85層)、盛土1C(70~82層)、盛土1D(47~69層)、盛土1E、(39~46層)、盛土1F(16~37層)とする。層位的な検討から、盛土1Aから1Fまで順次盛られていったものと考えられ、おおよそ厚さ0.5mごとに水平な面が確認できることから、これが工程の際の大きな単位になるものと考えられる。つまり、厚さ0.5m程の盛土を後円部の中心から外側に

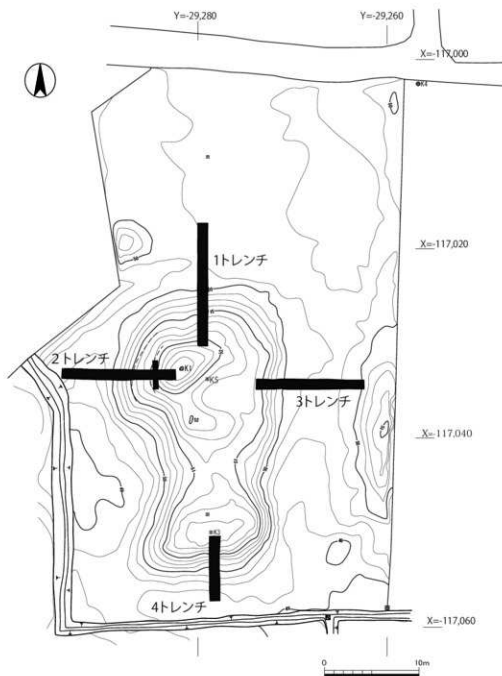


図6 トレンチ配置図(1:400)

向かって水平に積み、それを何度も繰り返すことによって墳丘を構築していく様相が想定できる。

後円部北側の溝 後円部の北側で、古墳に伴う周溝の可能性を有する溝を検出した。この溝は、トレンチの北端から4mほど南に位置する。幅約2.6mで深さ約1.2mの規模で、地山を掘り込んで形成されている。後述するが、今調査では他のトレンチでも古墳に伴う可能性のある周溝を検出している。それらと比較すると、この1トレンチの溝は、傾斜や深さなどで様相を異にする。埋土には、墳丘からの流出土がほとんどみられず、褐色系の礫を多く含む同質の土が大きな単位で堆積しているのが特徴的である。加えて、出土した埴輪片の量も比して少ない。また、溝の底に近い12層からは中世の瓦器が出土している。以上の事から、この溝が後世において何らかの再利用がなさ

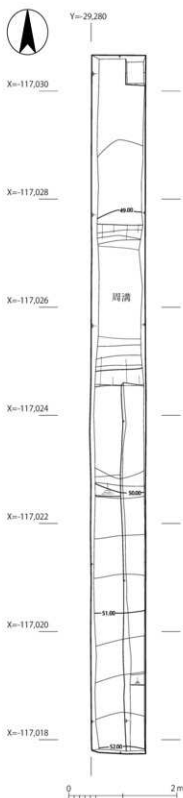


図7 1トレンチ平面図(1:70)

使用されている盛土は、他の箇所と同じく地山由来の黄色系の土と旧表土由来の黒色系が主に使用されているが、部分的にこのトレンチのみで認められる白色系の盛土も存在する(19・20層)。墳丘に関しては、盛土の様相が標高50.5m前後を境として著しく変化する。標高49.8～

れた可能性が想定できる。この近辺では、上羽城や上里城、石見城、井ノ内館などの中世城館が複数確認されている。現時点では知られていないものの、芝古墳の近辺にそのような施設が存在していた可能性が想定できる。2トレンチでは、少なくとも長岡京期まで周溝が凹地として残っていたものと考えられ、そのような地形を利用して堀などを造った可能性も想定できるが、現時点ではこれ以上の情報がなく不明である。

(2) 2トレンチ (図9～13, 図版4・7～9)

後円部の西側に設定したトレンチで、墳丘の西裾と外表施設の有無を確認することを目的とした。調査区の規模は、幅1mで長さ12mとなる。今調査では排水溝を検出したため、その構築に関する情報を得るためトレンチの東端から約2m西で調査区の拡張を行った。拡張部の規模は幅0.5mで長さ2.9mである。

調査の結果、墳丘盛土と周溝、そして埋葬施設に伴う排水溝を検出した。しかし、このトレンチでも墳丘裾付近は後世の削平を受けており、その正確な位置をおさえることはできなかったものの、周溝の傾斜や地山の高さ、そして傾斜変換点等からおおよその位置を推測できる。

墳丘盛土 墳丘盛土は、標高52.8m～49.8mの範囲で確認できる。49.8m以下は地山となる。地山の上面に土壌化が認められることから、墳丘構築以前の地表面と考えられる(56層)。墳丘盛土の下では、約1.9mにわたってこの地山が水平に続いている。また、トレンチの西端付近では標高49.7mで地山と考えられる層を確認している(57層)。地山を掘削して周溝を造るため、その間の地山の高さは不明であるが、おおよそ平坦であったものと推定される。

さて、前述のようにこの調査区では排水溝を検出している。この排水溝を確実に保存するため、このトレンチでの墳丘の断割りの深度を浅く留めている。そのため、不明な点も残されているが、現時点での所見を述べていきたい。

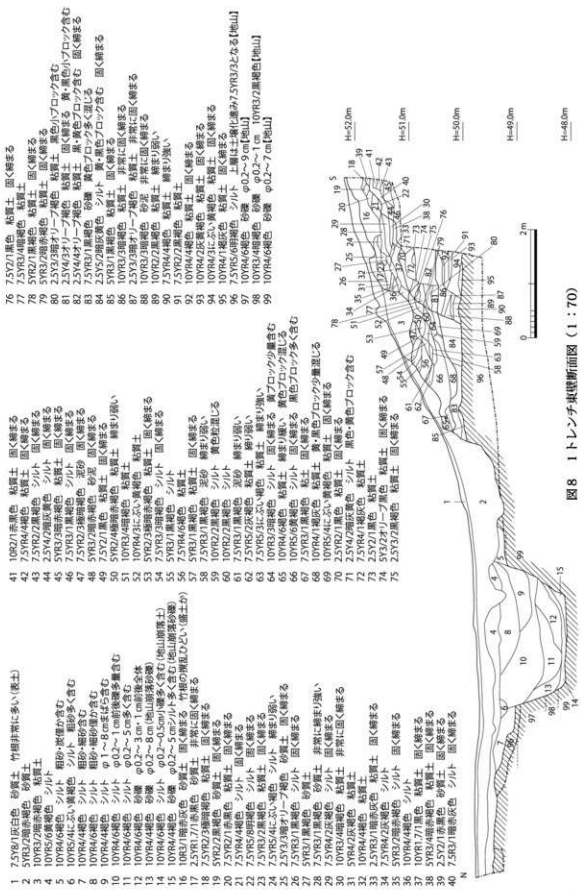


図8 Iトレンチ東断断面図(1:70)

- 1 7.5YR1/1灰白色 砂質土 竹間非常に多い(腐土)
- 2 7.5YR2/2黒赤褐色 粘質土
- 3 10YR3/2暗赤褐色 粘質土
- 4 10YR5/6暗赤褐色 シルト
- 5 10YR5/6暗赤褐色 シルト
- 6 10YR5/6暗赤褐色 シルト
- 7 10YR5/6暗赤褐色 シルト
- 8 10YR4/4暗褐色 シルト
- 9 10YR4/4暗褐色 シルト
- 10 10YR4/6暗褐色 シルト φ0.2~1mm前後硬多量含む
- 11 10YR4/6暗褐色 シルト φ0.2~5mm含む
- 12 10YR4/6暗褐色 砂礫 φ0.2~3mm(地山崩落体)
- 13 10YR4/6暗褐色 砂礫 φ0.2~8mm(地山崩落体)
- 14 10YR4/6暗褐色 砂礫 φ0.2~25mm(硬多量含む)(地山崩落土)
- 15 10YR4/6暗褐色 砂礫 φ0.2~25mm(硬多量含む)(地山崩落土)
- 16 10YR1/1暗赤褐色 粘質土 非常に固く締まる
- 17 2.5YR1/1暗赤褐色 粘質土 非常に固く締まる
- 18 7.5YR2/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 19 7.5YR2/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 20 7.5YR2/1赤黒色 粘質土 固く締まる
- 21 7.5YR4/4暗褐色 シルト 固く締まる
- 22 7.5YR5/6暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 23 7.5YR5/4暗褐色 粘質土 固く締まる
- 24 7.5YR5/4暗褐色 粘質土 固く締まる
- 25 7.5YR3/1暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 26 7.5YR3/1暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 27 5YR3/1暗赤褐色 粘質土
- 28 7.5YR3/1暗赤褐色 砂質土 非常に締まり強い
- 29 7.5YR4/2灰褐色 粘質土 固く締まる
- 30 10YR3/4暗褐色 粘質土 非常に固く締まる
- 31 5YR4/2灰褐色 粘質土
- 32 2.5YR3/1暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 33 10YR4/4暗褐色 粘質土 固く締まる
- 34 7.5YR4/2灰褐色 シルト 固く締まる
- 35 5YR3/2暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 36 10YR1/1灰白色 粘質土 固く締まる
- 37 10YR1/1灰白色 粘質土 固く締まる
- 38 5YR3/4暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 39 2.5Y2/1赤黒色 砂質土 固く締まる
- 40 7.5YR3/1暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 41 10R2/1黒褐色 粘質土 固く締まる
- 42 7.5YR4/4暗褐色 粘質土 固く締まる
- 43 2.5YR2/2暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 44 2.5YR2/2暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 45 5YR3/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 46 7.5YR2/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 47 7.5YR2/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 48 5YR3/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 49 7.5Y2/1黒褐色 粘質土 締まり強い
- 50 5YR2/4暗赤褐色 粘質土 締まり強い
- 51 10YR3/1暗赤褐色 粘質土
- 52 10YR4/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 53 7.5YR2/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 54 5YR3/2暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 55 7.5YR4/4暗褐色 シルト
- 56 7.5YR4/4暗褐色 粘質土
- 57 5YR3/1暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 58 7.5YR3/1暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 59 10YR2/2暗褐色 シルト 黄色混入する
- 60 10YR2/2暗褐色 シルト
- 61 7.5YR3/1暗赤褐色 粘質土 締まり強い
- 62 7.5YR5/2灰褐色 粘質土 締まり強い
- 63 7.5YR5/3灰褐色 粘質土 締まり強い
- 64 7.5YR5/3灰褐色 粘質土 締まり強い
- 65 10YR4/4暗褐色 粘質土 締まり強い
- 66 10YR4/4暗褐色 粘質土 締まり強い
- 67 7.5YR5/6暗赤褐色 シルト 固く締まる
- 68 10YR4/1暗赤褐色 粘質土 黒色プロック多量混入
- 69 10YR5/4暗赤褐色 粘質土 黒色プロック多量混入
- 70 2.5YR2/1黒褐色 シルト 固く締まる
- 71 2.5YR2/1黒褐色 シルト 固く締まる
- 72 7.5YR4/1暗赤褐色 粘質土 黒色・黄色プロック含む
- 73 2.5Y2/1黒褐色 粘質土 固く締まる
- 74 2.5Y2/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 75 2.5Y2/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 76 7.5Y2/1黒褐色 粘質土 固く締まる
- 77 2.5YR3/4暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 78 5YR3/2暗赤褐色 粘質土 黒色プロック含む
- 79 5YR3/2暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 80 2.5Y3/3暗赤褐色 粘質土 黒色プロック含む
- 81 2.5Y4/3暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 82 2.5Y4/4暗赤褐色 粘質土 黒・黄色プロック含む
- 83 7.5YR3/1暗赤褐色 砂礫 黄色プロック多量混入
- 84 2.5Y5/2暗赤褐色 シルト 黒・黄色プロック含む
- 85 5YR2/1暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 86 5YR2/1暗赤褐色 粘質土 固く締まる
- 87 2.5Y3/3暗赤褐色 粘質土 非常に固く締まる
- 88 10YR2/2暗褐色 粘質土 締まり強い
- 89 10YR4/4暗褐色 粘質土 締まり強い
- 90 2.5YR4/4暗褐色 粘質土 締まり強い
- 91 7.5YR4/4暗褐色 粘質土 固く締まる
- 92 10YR4/4暗褐色 粘質土 固く締まる
- 93 10YR4/2灰褐色 粘質土 固く締まる
- 94 10YR4/3灰褐色 粘質土 固く締まる
- 95 10YR4/1暗褐色 粘質土 固く締まる
- 96 10YR4/6暗褐色 粘質土 固く締まる
- 97 10YR3/4暗褐色 砂礫 φ0.2~9mm(地山)
- 98 10YR3/4暗褐色 砂礫 φ0.2~1cm 10YR3/2暗褐色(地山)
- 99 10YR4/6暗褐色 砂礫 φ0.2~7cm(地山)

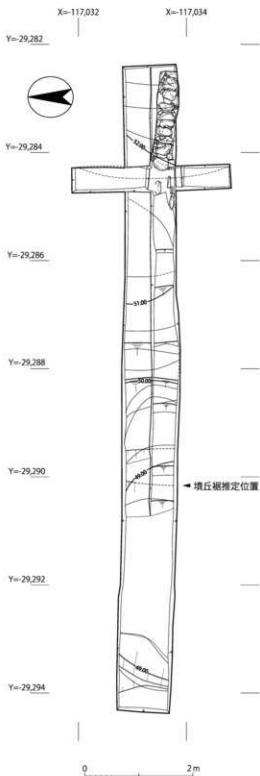


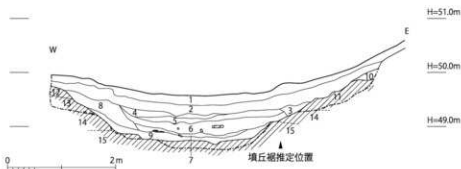
図9 2トレンチ平面図 (1 : 70)

50.5mまでは、大きな単位の盛土を水平に積んでいく工程を繰り返すことによって墳丘を構築していくという基本的な部分は共通するが、盛土の小単位が非常に大きいという点が特徴的であり、厚さ0.5mほどの盛土の大単位を同質の土を大量に積むことで構築している。これに対して、標高52.8m～51.5mの範囲では非常に小さい単位の盛土を積んでいるのが確認でき、この盛土は大きく2つに分けられる。排水溝の構築に伴うと考えられる黄色系の土を主体とするもの(41～49層)と墳丘の盛土と考えられる土である(19～40層)。また、標高52.7m付近で確認できる非常に固くしまった白色系の盛土は注目される(19・20層)。

これらの層をまとめると、盛土2A(53～55層)、盛土2B(51～52層)、盛土2C(50層)、盛土2D(40・42・45～49層)、盛土2E(41・43・44層)、盛土2F(21～39層)、盛土2G(19・20層)の7つの盛土の大単位に分けられる。

以上のように、このトレンチでは1・3トレンチとは異なる盛土の様相を確認できた。このことから、後円部でも場所によって盛土の用法が異なる可能性が想定できる。標高51.5mを境に盛土の単位が小さくなるなどの変化がみられる点は、排水溝の存在を加味するならば埋葬施設に伴って盛土を意識的に変化させているものと考えられる。また、50.5mより下部の盛土に関しては、このような盛土は2トレンチと4トレンチで一部で確認できるのみである。何らかの理由で盛土を変化させている可能性や、2トレンチのある箇所は後円部の中で最も遺存状態の良い箇所であり、本来的に墳丘盛土の外側はそのような土の使い方をしていない可能性もある。しかし、このトレンチでは排水溝の保存を第一に考えてごく浅くしか断割りを行っていないため、これ以上は不明である。

周溝 後円部の西側で、古墳の周溝を検出した。



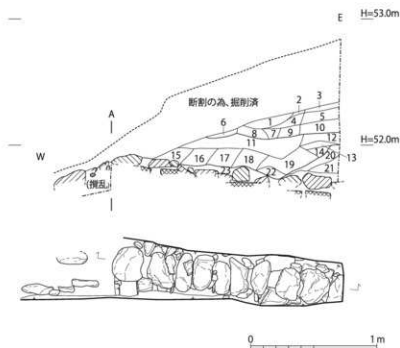
- | | |
|--------------------------------|--------------------------------------|
| 1 10YR8/1灰白色 腐植土【表土】 | 8 10YR5/4いぶい黄褐色 砂質土 |
| 2 10YR5/4いぶい黄褐色 砂質土 締まり弱い 埴輪含む | 9 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 遺物含まず |
| 3 5Y3/2オリーブ黒色 粘質土 | 10 2.5Y4/6オリーブ褐色 粘質土 固く締まる |
| 4 10YR4/4褐色 シルト 細砂・粗砂含む | 11 2.5Y4/4オリーブ褐色 粘質土 地山の上層は土壌化を受け黒ずむ |
| 5 10YR3/4暗褐色 シルト 細砂・粗砂含む | 12 2.5Y6/6明黄褐色 砂礫層 φ5mm前後の礫多く含む【地山】 |
| 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土 | 13 2.5Y6/6明黄褐色 砂礫層 φ5mm前後の礫多く含む【地山】 |
| 7 10YR3/4暗褐色 泥砂 締まり弱い | 14 2.5Y4/4オリーブ褐色 砂礫 マンガン多く含む【地山】 |
| | 15 5Y7/8黄色 シルト 固く締まる【地山】 |

図11 2トレンチ北壁断面図(1:70)

トレンチの西端からおよそ2mの位置である。規模は、幅は約4.6m、深さは約0.7mで、地山を掘り込んで形成している。埋土は、まず墳丘や地山からの流土と思われる遺物を含まない層が堆積し(18・19層)、その上に埴輪片を含む墳丘からの流土と思われる層が認められる。その上には、部分的ながら土壌化層が確認できる(14層)。そして、その土壌化層の上には、大量の埴輪片と共に長岡京期以降の遺物を含む層が堆積していることから、この周溝が長岡京期以降まで凹地としてその痕跡をとどめていたことが分かる。

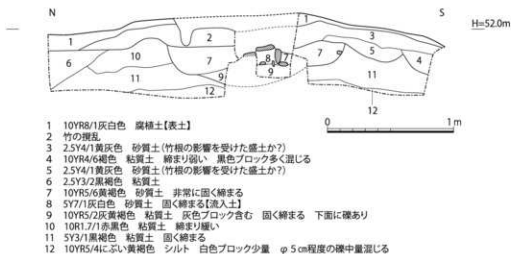
排水溝 おおよそ標高51.7m前後で埋葬施設に伴うと考えられる石組みの排水溝を検出した。この排水溝は、後円部の中心から西側に向かって伸びていく。主軸はほぼ東西方向となる。排水溝の西端は既に破壊されているため、本来的にどこまで続くかは不明である。東端は、トレンチよりも更に東にのびていくのを確認している。幅は約0.5m、長さは約2.5mであり、蓋石は10石確認している。底石・左右の側石・蓋石からなり、底石を両側石で挟みこみ、その上に蓋石を配す構造となる。石材の平坦な面を利用して構築しており、断面は「口」字形を呈する。石材は、主にチャートの河原石を使用しており、石材の大きさは人頭大である。調査終了の直前に、手前から数えて2・6・9石目の蓋石を取り上げ内側の構造の確認を行った。その結果、底石の上面と蓋石の下面の間隔はcm程しかないこと、そして底石の標高が後円部中心に向かうほど低くなることを確認した。確認できる範囲で底石の高低差は東西でおおよそ0.5mある。これが本来の構造である可能性もあるものの、そうであれば排水溝としての機能は望めないため、埋葬施設の盗掘に伴って既に築造当時の構造が損なわれている可能性も考え得る。

断面観察から、この排水溝は標高51.8m付近まで墳丘を築造した段階で構築されたものと考えられる。構築にあたっては、まず墳丘盛土に幅1.5mで深さ0.3mほどの溝を掘り、その底に固く締まった灰黄褐色粘質土を厚さ0.1m～0.2mほど敷き、その上に排水溝を構築している。構築後の排水溝の埋戻しに際しては、黄色系の土を多用しているのが特徴的である。その黄色系の土は標高52.0m前後まで確認でき、その上には墳丘盛土が積まれている。



- | | |
|--------------------|----------------------------|
| 1 5YR3/1黒褐色 粘質土 | 13 7.5YR3/2暗赤褐色 シルト |
| 2 7.5YR4/4褐色 粘質土 | 14 7.5YR2/2黒褐色 粘質土 |
| 3 5YR3/2暗赤褐色 粘質土 | 15 10YR6/4にぶい黄褐色 砂質土 締まり強い |
| 4 7.5YR3/2暗褐色 粘質土 | 16 10YR4/6褐色 砂質土 締まり強い |
| 5 10YR3/4暗褐色 粘質土 | 17 10YR5/3にぶい褐色 砂質土 締まり強い |
| 6 7.5YR3/3暗褐色 砂質土 | 18 10YR5/4にぶい黄褐色 砂質土 締まり強い |
| 7 10YR3/3暗褐色 砂質土 | 19 10YR5/6黄褐色 砂質土 締まり強い |
| 8 7.5YR3/1黒褐色 砂質土 | 20 2.5YR3/1暗赤灰色 シルト 締まり強い |
| 9 7.5YR4/2灰褐色 粘質土 | 21 7.5YR4/4褐色 砂泥 締まり強い |
| 10 10YR2/3黒褐色 粘質土 | 22 10YR5/8黄褐色 砂質土 締まり強い |
| 11 2.5Y7/6明黄褐色 砂質土 | 23 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質土 締まり弱い |
| 12 2.5Y3/1暗赤灰色 粘質土 | |

図12 2トレンチ排水溝平面及び断面図(1:30)



- | |
|---|
| 1 10YR8/1灰白色 腐植土【表土】 |
| 2 竹の攪乱 |
| 3 2.5Y4/1黄灰色 砂質土(竹根の影響を受けた盛土か?) |
| 4 10YR4/6褐色 粘質土 締まり弱い 黒色ブロック多く混じる |
| 5 2.5Y4/1黄灰色 砂質土(竹根の影響を受けた盛土か?) |
| 6 2.5Y3/2黒褐色 粘質土 |
| 7 10YR5/6黄褐色 砂質土 非常に固く締まる |
| 8 5Y7/1灰白色 砂質土 固く締まる【流入土】 |
| 9 10YR5/2灰黄褐色 粘質土 灰色ブロック含む 固く締まる 下面に礫あり |
| 10 10R1/7/1赤黒色 粘質土 締まり弱い |
| 11 5Y3/1黒褐色 粘質土 固く締まる |
| 12 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 白色ブロック少量 φ5cm程度の礫中量混じる |

図13 2トレンチ拡張部東壁断面図(1:30)

(3) 3トレンチ (図14・15, 図版5・10)

後円部の東側に設定したトレンチである。墳丘測量図から墳丘の東側は改変を受けていることが予想されたため、古墳の墳丘および付随する遺構が残存しているのかの確認を目的とした。調査区の規模は、幅1mで長さ11.4mとなる。なお、調査の中途段階で3トレンチの西端から東へ1.7mより以東では、古墳に関連する遺構はほぼ存在しないことが予想された。そのため、3トレンチに関しては更に平面的に掘り下げることせず、断割りを実施して断面観察を行うにとどめた。

調査の結果、墳丘盛土と周溝、時期不明の石組み遺構、近世墓5基を検出した。

墳丘盛土 墳丘盛土は、標高49.7m～51.1mの範囲で確認できる。なお、トレンチの西端から東へ1.7mより以東では後世の削平を受けたため墳丘盛土は残存していない。

このトレンチでは、墳丘盛土直下の地山は確認できていないものの、それ以外の場所では地山を確認しており、その標高は最高所でおおよそ49.5mである。なお、土壌化が認められないことから本来の地山面はもっと高かったものと考えられるが、墳丘盛土を加味するならば標高49.5m～49.7mの範囲におさまるものと推察される。さて、この部分の盛土は1トレンチでの所見とほぼ同じである。この盛土を大単位ごとにまとめると、盛土3A (57～60層)、盛土3B (30・56・58層)、盛土3C (50～55層)、盛土3D (47～49層)、盛土3E (27～30層)、盛土3F (31～45層)、盛土3G (20～26層)、盛土3H (19層)の8つに大別され、盛土3A～盛土3Gまで順に積まれている。このトレンチでは、唯一墳丘の中心部の盛土の様相を観察できた。その結果、墳丘の構築に際しては墳丘の外側だけではなく、中心部付近でも同じような構築法を行っていたことが明らかになった。

周溝 古墳に伴う周溝を検出した。トレンチの西端から東へ1.7mより以東は後世の削平を受けており、古墳の墳丘は確認できなかった。しかし、幸いなことにトレンチの中央付近、標高49.2mの場所で、周溝と考えられる

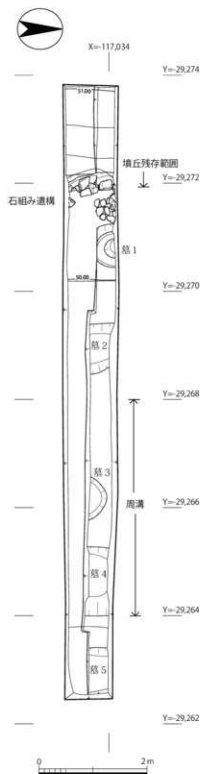
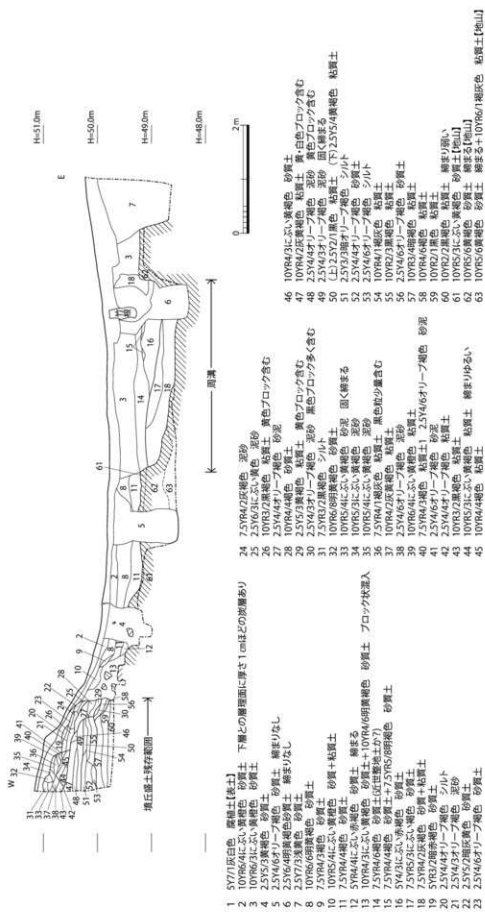


図14 3トレンチ平面図 (1 : 70)



- | | | | |
|----|----------------|---------|----------------------|
| 1 | 5Y7/1灰白色 | 腐植土【表土】 | |
| 2 | 10YR5/4にふい黄褐色 | 砂質土 | 下層との境界面に厚さ1cmほどの波層あり |
| 3 | 10YR5/3にふい黄褐色 | 砂質土 | |
| 4 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 | 砂質土 | |
| 5 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 | 砂質土 | 締まりなし |
| 6 | 2.5Y6/4明黄褐色 | 砂質土 | 締まりなし |
| 7 | 2.5Y7/3淡黄褐色 | 砂質土 | |
| 8 | 10YR5/6明黄褐色 | 砂質土 | |
| 9 | 7.5YR4/2褐色 | 砂質土 | |
| 10 | 10YR5/4にふい黄褐色 | 砂質土 | 砂質+粘質土 |
| 11 | 7.5YR4/4褐色 | 砂質土 | |
| 12 | 5YR4/4にふい黄褐色 | 砂質土 | |
| 13 | 10YR4/3にふい黄褐色 | 砂質土 | 砂質土+10YR4/6明黄褐色 |
| 14 | 10YR4/4褐色 | 砂質土 | 砂質土 |
| 15 | 7.5YR4/4褐色 | 砂質土 | 砂質土+5YR5/6明黄褐色 |
| 16 | 5Y4/3にふい黄褐色 | 砂質土 | |
| 17 | 7.5YR5/3にふい褐色 | 砂質土 | |
| 18 | 7.5YR4/2B褐色 | 砂質土 | |
| 19 | 5YR3/2暗赤褐色 | 砂質土 | |
| 20 | 2.5Y4/4オリーブ褐色 | シルト | |
| 21 | 2.5Y4/3オリーブ褐色 | 泥砂 | |
| 22 | 2.5Y5/2地底黄色 | 砂質土 | 締まり強い |
| 23 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 | 砂質土 | 締まる+10YR6/1地底色 |
| 24 | 7.5YR4/2B褐色 | 泥砂 | |
| 25 | 2.5Y6/3にふい黄褐色 | 泥砂 | |
| 26 | 10YR3/2黄褐色 | 粘質土 | 黄色ブロック含む |
| 27 | 10YR5/4にふい黄褐色 | 砂質土 | |
| 28 | 10YR5/4にふい黄褐色 | 砂質土 | |
| 29 | 2.5Y5/3黄褐色 | 粘質土 | 黄色ブロック含む |
| 30 | 2.5Y4/3オリーブ褐色 | シルト | 黒色ブロック多く含む |
| 31 | 7.5YR3/2黄褐色 | シルト | |
| 32 | 10YR5/6明黄褐色 | 砂質土 | |
| 33 | 10YR5/4にふい黄褐色 | 砂泥 | 固く締まる |
| 34 | 10YR5/3にふい黄褐色 | 泥砂 | |
| 35 | 10YR5/4にふい黄褐色 | 泥砂 | |
| 36 | 7.5YR4/2B褐色 | 粘質土 | 黒色少量含む |
| 37 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 | 粘質土 | |
| 38 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 | 泥砂 | |
| 39 | 10YR6/4にふい黄褐色 | 粘質土 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 |
| 40 | 7.5YR4/2褐色 | 粘質土 | |
| 41 | 2.5Y4/4オリーブ褐色 | 砂泥 | |
| 42 | 2.5Y4/4オリーブ褐色 | 粘質土 | |
| 43 | 10YR3/2黄褐色 | 粘質土 | |
| 44 | 10YR5/3にふい黄褐色 | 粘質土 | 締まり強い |
| 45 | 10YR4/4褐色 | 粘質土 | |
| 46 | 10YR4/3にふい黄褐色 | 砂質土 | |
| 47 | 10YR4/2B褐色 | 粘質土 | 黄色ブロック含む |
| 48 | 2.5Y4/4オリーブ褐色 | 泥砂 | 黄色ブロック含む |
| 49 | 2.5Y4/3オリーブ褐色 | 泥砂 | 固く締まる |
| 50 | (上)2.5Y2/1黒色 | 粘質土 | シルト |
| 51 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 | シルト | |
| 52 | 2.5Y4/4オリーブ褐色 | 砂質土 | |
| 53 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 | シルト | |
| 54 | 10YR4/1地底黄色 | 粘質土 | |
| 55 | 10YR4/2B褐色 | 粘質土 | |
| 56 | 2.5Y4/3にふい黄褐色 | 砂質土 | |
| 57 | 10YR3/4暗褐色 | 粘質土 | |
| 58 | 10YR4/6褐色 | 粘質土 | |
| 59 | 10YR2/1黒褐色 | 粘質土 | 締まり強い |
| 60 | 10YR2/2黄褐色 | 粘質土 | |
| 61 | 10YR5/3にふい黄褐色 | 砂質土 | 締まる【地山】 |
| 62 | 10YR5/6黄褐色 | 砂質土 | 締まる【地山】 |
| 63 | 10YR5/6黄褐色 | 砂質土 | 締まる+10YR6/1地底色 |

図15 3トレンチ北壁断面図 (1:70)

溝を検出した。周溝の上部は墳丘とともに既に削平されてしまったものと考えられる。東側の肩口は近世墓によって破壊されているため不明だが、最大幅は約3mで深さは最深部で0.8m程となる。17・18層は墳丘からの流出土と考えられるが、遺物は確認できていない。

石組み遺構 トレンチの西端から東へ1.7mの所に位置する。墳丘に沿って、南北方向の石垣を積み、その石垣より東側には現存幅0.5m程の平坦面を築いている。なお、石垣は辛うじて2段目まで確認でき、それが南北の調査区外に続いていくのを確認している。平坦面には、固く締まった土の面と拳大の礫を敷いた面が存在している。また、石材や床面には被熱痕や煤の付着が確認できるが、この遺構の性格・用途は不明である。また、遺物も出土していないため時期は不明であるが、近世墓によってこの遺構の一部が破壊されていることから、少なくとも江戸時代末期以前のものである。

近世墓 後円部の東側で近世墓を5基検出した。これは、地元の方への聞き取り調査の内容と一致しており、トレンチの幅は1mと非常に狭いにも関わらず5基もの近世墓を確認できることから、墳丘東側にはより多くの近世墓が存在している可能性が高い。これらの近世墓は、平面形が円形になる事から座棺を土葬したものと考えられる。遺物としては、人骨・染付・銭貨(寛永通宝)・伏見人形・煙管などが出土している。

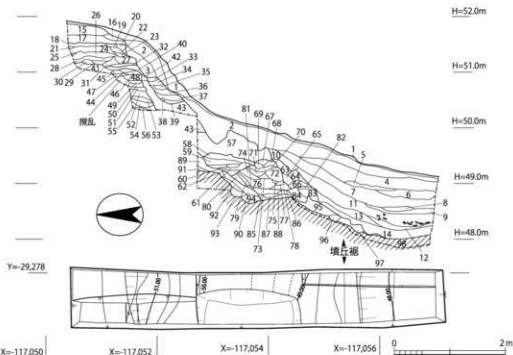
(4) 4トレンチ(図16・17、図版6・11)

今回の調査で、前方部に設定した唯一のトレンチである。前方部の前端の位置と、墳丘盛土の様相を確認することを目的とした。調査区の規模は、幅1mで長さ6.75mとなる。

調査の結果、墳丘裾の位置を今回の調査で唯一おさえることが出来た。あわせて墳丘の構築法と古墳に伴う周溝の北肩口も確認している。古墳以外の遺構としては、牛を埋葬した土坑や火葬墓とみられる遺構を確認している。

墳丘盛土 ここでは、西壁に関する所見を述べていく。墳丘盛土は、標高48.0m～51.9mの範囲で確認できる。地山は位置によって高さが大きく異なり、北から南に向かって低くなる。標高48.0m～49.2mの範囲で確認でき、その高低差は1.2mほどになる。

前方部で使用している盛土は後円部と同じだが、墳丘の構築法は若干異なる。まず、盛土を大単位に分割すると盛土4A(89～94層)、盛土4B(81～85～88層)、盛土4C(82～84層)、盛土4D(95～97層)、盛土4E(67～80層)、盛土4F(58～62層)、盛土4G(57層)、盛土4H(63～66)、盛土4I(45～56層)、盛土4J(40～43層)、盛土4K(33～39層)、盛土4L(18～32層)、盛土4M(15～17層)となる。およそ、標高49.5m・49.8m・51.0m・51.5m付近で水平な面を確認できるが、49.5m以下では外側に向かって盛土を水平に土を積んで行く様相は看取できない。その上から49.8m付近までは、同質の黄色系を呈する盛土を多量に積んでいる。それより上では、他のトレンチでも確認できるように細かい単位で水平に盛土を積む。なお、盛土4Hの上に張るように施された盛土4Iは非常に特徴的であり、前方部では後円部とやや異なる構築法がとられた可能性があるが、現時点では不明である。

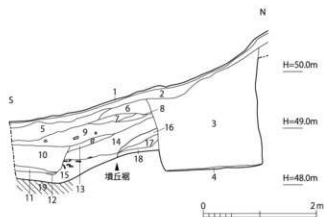


1	7.5YR5/6明褐色 腐植土	50	10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥
2	2.5Y4/3オリーブ褐色 砂質土 固く締まる 灰を含む	51	2.5Y3/1黒褐色 粘質土 固く締まる
3	7.5YR5/2灰褐色 砂質土	52	10YR4/4褐色 シルト
4	2.5Y4/3オリーブ褐色 砂質土 固く締まる	53	5Y2/2オリーブ黒色 粘質土
5	2.5Y6/2灰黄色 砂質土 白色ブロック含む	54	10YR3/4暗褐色 粘質土
6	2.5Y5/4黄褐色 泥砂	55	10YR2/2褐色 粘質土
7	2.5Y4/3オリーブ褐色 泥砂	56	10YR4/6褐色 粘質土 固く締まる
8	10YR5/4にぶい黄褐色 粘質土	57	7.5YR7/8黄褐色 シルト 7.5YR4/1褐色シルトがブロック状に混じる
9	10YR3/4暗褐色 泥砂	58	5Y2/1黒色 粘質土 締まり弱い
10	2.5Y5/3黄褐色 粘質土 締まり弱い	59	2.5Y6/6明黄褐色 シルト 黒色ブロック多く含む
11	10YR4/3にぶい黄褐色 粘質土 埋立杭土	60	2.5Y5/4黄褐色 シルト 固く締まる
12	7.5YR3/2黒褐色 粘質土 遺物少量含む	61	2.5Y8/8黄色 シルト 黒・白色ブロック含む 固く締まる
13	7.5YR4/3褐色 粘質土 遺物含まず	62	2.5Y7/6明黄褐色 シルト 黒色ブロック含む 固く締まる
14	10YR4/4褐色 泥砂 褐・黄色ブロック少量含む	63	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土 締まり弱い
15	7.5Y6/6褐色 砂質土	64	10YR5/3にぶい黄褐色 粘質土 締まり弱い
16	7.5YR5/4にぶい褐色 砂泥	65	10YR4/4褐色 砂質土 締まり弱い
17	7.5YR5/2灰褐色 砂泥	66	10YR3/2黒褐色 粘質土 締まり弱い
18	7.5Y7/4浅黄色 粘質土 白色ブロック含む	67	7.5Y4/5/2灰褐色 粘質土 締まり弱い
19	2.5Y6/2灰黄色 砂泥	68	2.5Y5/2暗灰黄色 砂質土 締まり弱い
20	2.5Y4/4オリーブ褐色 砂泥	69	2.5YR1/7 赤黒色 粘質土
21	10YR5/3にぶい黄褐色 粘質土	70	2.5Y6/6明黄褐色 シルト 固く締まる
22	10YR4/4褐色 砂泥	71	7.5Y3/1オリーブ黒色 砂質土 締まり弱い
23	2.5Y4/3オリーブ褐色 砂泥	72	2.5Y4/3オリーブ褐色 泥砂 固く締まる
24	10YR3/2黒褐色 粘質土	73	10YR5/3にぶい黄褐色 泥砂 締まり弱い
25	10YR2/1黒褐色 粘質土	74	2.5Y4/2暗灰黄色 粘質土 締まり弱い 黒色ブロック多く含む
26	2.5Y5/3黄褐色 砂泥	75	2.5YR2/1赤黒色 粘質土 締まり弱い
27	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質土	76	7.5YR4/3褐色 粘質土 黒色ブロック混じる 締まり弱い
28	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土	77	2.5Y6/6明黄褐色 粘質土 白色ブロック少量含む
29	2.5Y3/1黒褐色 粘質土	78	5YR4/1褐色 粘質土 締まり弱い
30	2.5Y4/1黄灰色 粘質土	79	2.5YR4/1赤灰色 砂泥 締まり弱い
31	2.5Y4/3オリーブ褐色 粘質土	80	2.5Y2/1黒色 シルト 固く締まる
32	5Y3/1オリーブ黒色 粘質土	81	5Y4/2灰褐色 粘質土 締まり弱い
33	10YR5/3にぶい黄褐色 砂泥	82	2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト 固く締まる
34	10YR4/3にぶい黄褐色 泥砂	83	5Y3/2オリーブ黒色 粘質土 固く締まる
35	10YR3/1黒褐色 粘質土	84	2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 黄・黒色ブロック混じる 固く締まる
36	2.5Y4/3オリーブ褐色 泥砂	85	2.5Y5/4黄褐色 シルト 黒色シルト少量混じる 締まり弱い
37	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 泥砂	86	2.5Y4/2暗灰黄色 粘質土 締まり弱い
38	2.5Y6/3にぶい黄褐色 砂泥39	87	2.5Y3/1黒褐色 粘質土 褐色ブロック少量含む 締まり弱い
39	7.5Y2/1黒色 粘質土	88	2.5Y6/6明黄褐色 シルト 黒色ブロック多く含む 固く締まる
40	2.5Y7/6明黄褐色 砂泥	89	10YR5/3にぶい黄褐色 粘質土 黒色ブロック含む 固く締まる
41	2.5Y6/6明黄褐色 粘質土 固く締まる	90	10YR8/4浅黄色 粘質土 黒色ブロック多く含む
42	10YR5/4にぶい黄褐色 砂泥	91	7.5YR5/4にぶい褐色 泥砂 締まり弱い
43	10YR7/6明黄褐色 シルト 固く締まる	92	5Y4/1褐色 粘質土 黒・赤色ブロック含む
44	2.5Y4/4オリーブ褐色 泥砂	93	2.5Y7/4浅黄色 粘質土 黒色ブロック含む
45	2.5Y4/3オリーブ褐色 粘質土 固く締まる	94	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土 黒色ブロック多く含む
46	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土 固く締まる	95	10YR7/8黄褐色 シルト 黒・白・褐色ブロック含む
47	2.5Y7/6明黄褐色 砂泥 固く締まる 白色ブロック含む	96	5Y6/2灰オリーブ色 砂泥 固く締まる
48	10YR4/4褐色 粘質土	97	5Y7/4浅黄色 シルト 白・赤色ブロック多く含む 固く締まる
49	10YR3/2黒褐色 泥砂	98	10YR8/1灰白色 シルト【地山】

図16 4 トレンチ平面及び東壁断面図 (1:70)

墳丘裾 前述のように、このトレンチでは前方部前端的墳丘裾の位置を確認することが出来た。東壁では判然とししないものの、西壁では墳丘盛土（16～18層）が南に向かって次第に低くなり、トレンチの南端から約1.8m、標高48.5m付近で確認できなくなるため、この位置を墳丘裾とした。この盛土の直上には、周溝の埋土と考えられる埴輪片を多く含む層の堆積を確認している。

周溝 前方部前面で周溝の北側の肩口を検出している。なお、南側の肩口は調査区外のため全体の幅は不明であるが、幅1.3m以上で深さ約0.5mの規模となる。墳丘裾付近から、なだらかに南に向かって低くなり、およそ標高48.0m付近で周溝の底に至る。底はほぼ平坦となる。



- 1 7.5YR5/6明褐色 腐植土
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂質土 固く締まる 灰を含む
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色 粘質土 白・黄色ブロック含む
- 4 2.5Y7/1灰白色 砂泥 しまり弱い
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂質土 固く締まる
- 6 10YR6/8黄褐色 粘質土 しまり弱い
- 7 2.5Y6/2灰黄色 砂質土 白色ブロック含む
- 8 2.5Y5/4黄褐色 泥砂
- 9 2.5Y4/3オリーブ褐色 泥砂
- 10 2.5Y7/4浅黄色 粘質土 白色ブロック含む
- 11 N1.5/黒色 炭
- 12 2.5Y7/3淺黄色 粘質土
- 13 10YR5/4にぶい黄褐色 粘質土
- 14 10YR3/4暗褐色 泥砂
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色 粘質土
- 16 2.5Y7/6明黄褐色 シルト 黄色ブロック少量含む 固く締まる
- 17 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 固く締まる
- 18 2.5Y7/8黄褐色 シルト 白色ブロック含む 固く締まる
- 19 10YR8/1灰白色 シルト[地山]

図17 4トレンチ西壁断面図（1：70）

4. 遺物（表2）

今調査で出土した遺物の量は、およそコンテナ箱9箱分に及ぶ¹⁰⁾。このうち8箱分が古墳に伴う埴輪片である。これ以外にも、古墳の周溝内や墳丘東側で検出した近世墓等から須恵器・土師皿・黒色土器・瓦器・瓦・染付・人骨・牛骨などが少量ではあるが出土している。今回は、古墳に伴う確実な遺物である埴輪とそれ以外の遺物に分けてその概要を述べる。

(1) 埴輪（図18～21、図版12）

種類 確認できるのは普通円筒埴輪と朝顔形埴輪の2種類のみである。朝顔形埴輪については頸部が出土しており、その存在を認めることができるものの全容は不明である（3）。現時点では、円形の透孔を有することや、一部の個体において、頸部の成形時に粘土同士の接合をより強化するために刻み目をいれている個体が存在することを確認している（26・27）。なお、底部しか出土しておらず、可能性の域を出ないものの、形象埴輪の基底部と考えられるものもある（19・20）。

段構成 調査区の広さや位置に制約されているため一概には言えないものの、底部から口縁まで接合する普通円筒埴輪が1個体あり、4条5段に復元できる（1）。

透孔 透孔は2～4段目に2個ずつみられ、段ごとに直行した配置をとる。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	円筒・朝顔形埴輪、須恵器	1.5箱	29点	5箱	0.5箱
古墳時代以降	須恵器・土師器・黒色土器 瓦器・瓦・銭貨・人骨など	0.5箱	10点		0.5箱
合計		2箱	39点	5箱	1箱

突帯 突帯は断面の形からおよそ三種類に大別できる。比較的に突出度の高い台形を呈するもの(1)、上稜と下稜に丸みを帯びるM字形の突帯(6~12)、上稜が突出した突帯である(4・5)。台形を呈する突帯は、現時点では(1)のみに認められる。なお、幾つかの個体では、断続ナデAが確認できる。また、少量ながら断続ナデBの可能性のある個体も存在する(28・29)。

法量 底部径は17.6~20.0cmとなり、底部高は9.0~11.6cmとなる。口縁部に関しては非常に資料が少ないが、径はおおよそ約29cm、後円部高は10.7cmとなる。突帯間隔は11cm前後となる。胴部径は18.0~24.2cmとなるが、20cm以上のものが圧倒的に多い。

焼成 焼成は全て穴窯焼成と考えられる。その中で、焼成が硬質なもの(須恵質)と軟質なもの(土師質)が存在する。

調整 外面調整は、成形後にタテハケが施される。大多数はこの一次調整のタテハケのみであるが、1個体のみ二次調整のヨコハケが施されているものを確認している(13)。内面調整は、タテハケ・ユビオサエ・タテナデが存在する。1個体の中でハケとナデの併用が確認できる個体も存在する。なお、口縁に関してはどの個体においても内面にヨコハケを施す。

底部調整 底部調整の施された個体とそうでない個体の2種類が確認できる。底部調整は、ケズリと板押圧、板ナデが確認できる(13~20)。

刷毛 工具に関しては、刷毛の条線が3本/1cm、4本/1cm、9本/1cmの3種類が最低でも存在するものと考えられる。なお、今回は厳密に刷毛目パターンの比較を行ってはいないため、更に工具の種類は細分される可能性が高い。なお、刷毛の向きとしては右上がりとし左がりの個体を確認しており、確認できる範囲ではその割合はほぼ同じ程度になるとと思われる。

U字形の痕跡 普通円筒埴輪の口縁にU字形の凹んだ痕跡を有する個体を確認している(1・22)。この痕跡を有する個体は1トレンチと4トレンチで出土しており、少なくとも2個体以上存在するものとみられる。類例としては、U字状の切込みを有する埴輪が市尾墓山古墳と北花内大塚古墳で認められる。芝古墳で見つかったU字状の痕跡は、意識的につけられたものと考えられるものの、その断面には刀子などを用いて切り込んだ際の砂粒の動きが見られず、U字状切込みと同一視できるかは検討を要する。

ヘラ記号 今回の調査では、ヘラ記号と思しき線刻を有する破片を3点のみ確認している。3点すべてが一部しか遺存しておらず判然としないものの、いずれも直線的な線刻である。同じ長岡グループに属し、かつ時期も近接した塚本古墳では複数のヘラ記号が確認されており、これを参考に

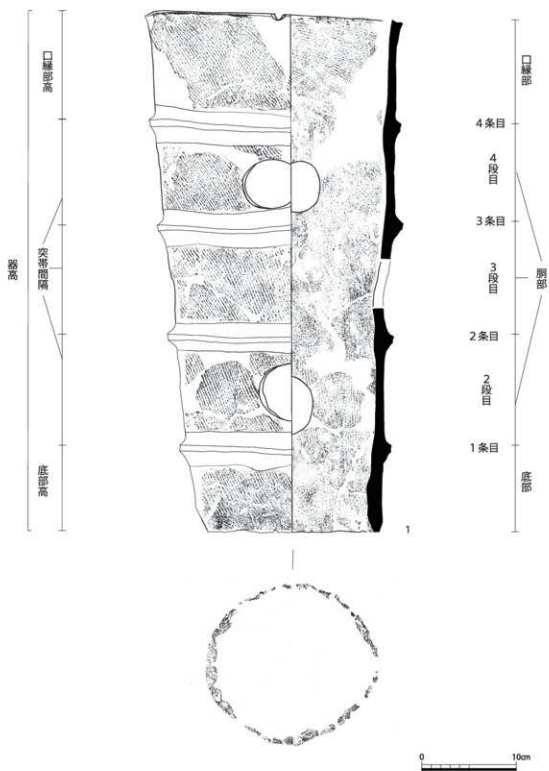


图18 遺物実測図1 (1:4)



图19 遗物实测图2 (1:4)

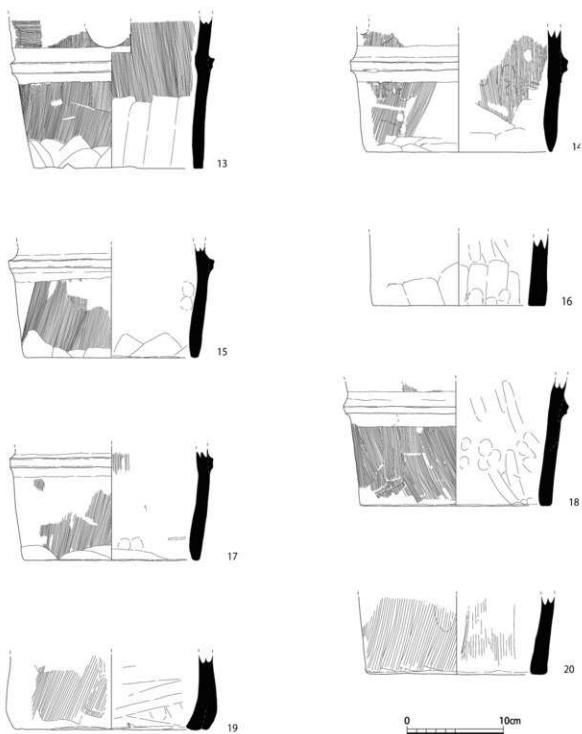


图20 遺物実測図3 (1:4)

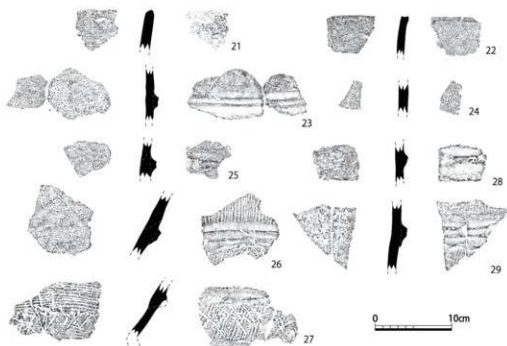


図21 遺物実測図4 (1:5)

するならば「△」や「×」などが候補として考えられよう (23・24・25)。

時期 上記の特徴を総合するならば、これらの埴輪は古墳時代中期後葉～後期初頭、須恵器型式でいうTK47～MT15型式期、埴輪検討会編年でいうV期1段階に相当するものと考えられる¹¹⁾。

(2) その他の遺物 (図22)

埴輪以外には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦・銭貨などが出土している。ここでは、埴輪以外の主だった遺物について述べる。

須恵器 杯Bは、身と蓋がそれぞれ2点出土している (30～33)。杯と蓋は共に部分的にしか残存していない。30は1トレンチの12層、31は2トレンチの16層から出土している。

34・35の2点に関しては、古墳に伴う遺物である可能性があるものの現時点では判断できない。

34は裏の頸部であり、内面にタタキ工具の痕跡が確認できる。35は小片であるが、波状文が施されていることや器厚から壺の頸部である可能性が考えられる。34は1トレンチの12層、35は後円部の盗掘坑付近での表採遺物である。

土師器 36は2トレンチの13層から出土している。

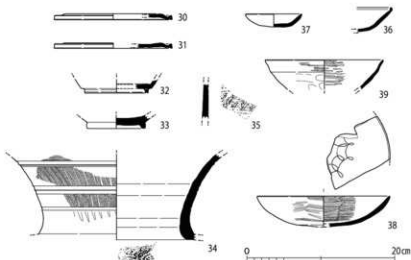


図22 遺物実測図5 (1:5)

口縁の断面形は玉縁状を呈しており、長岡京期の遺物と考えられる。37は3トレンチの近世墓にともなう遺物である。周辺の近世墓からは、寛永通宝や伏見人形が出土しており、それらと同時期のものと想定される。

黒色土器 38は2トレンチの13層からの出土である。内面には、暗文が施されている。長岡京期の遺物と考えられる。

瓦器 39は1トレンチの12層からの出土である。13世紀頃の所産と考えられる。

5. まとめ

以上、2014年度の芝古墳発掘調査についての報告を行った。測量調査を含めるならば、今回の調査は第3次調査となる。今調査では、多くの調査成果を得ることができた。その成果を示すと以下の5点にまとめられる。最後に、墳丘の規模と構築法、埴輪、排水溝に触れ今調査の報告の結びとしたい。

- ① 規模が判明した。(墳丘長32.7m、全長38.3m以上)
- ② 外表施設として周濠と埴輪を有することが判明した。
- ③ 後円部において埋葬施設に伴うと推定される石組みの排水溝を検出した。
- ④ 墳丘構築法の一部が明らかになった。
- ⑤ 造時期が明らかになり、具体的に位置づけることが可能になった。(5世紀後葉～6世紀初頭)

(1) 規 模

今調査では、4トレンチでのみ墳丘裾の位置を確認できた。後円部においては、墳丘裾付近は既に後世の削平を受けていることを確認しており、その正確な位置は不明である。ただし、周溝を検出していることから後円部径の規模は推定できる。周溝の肩口と墳丘裾の位置がほぼ同じであると仮定するならば、全長38.3m以上、墳丘長32.7m、後円部径22.4mの前方後円墳に復元できる。現段階の墳丘の復元案を示すと図23のようになる。後円部径と前方部長の割合はほぼ2:1となる。墳丘の高さは、残存している最も高い場所で計測すると、後円部が約3.6m、前方部が3.4mとなる。ただし、後円部では、想定している墳丘裾の高さから2.2mほどにあり、この排水溝の上面の高さが埋葬施設の床面の高さであるとするならば、本来の墳丘は1～2m前後高かったものと考えられる。

(2) 墳丘の構築法

今回の調査では、墳丘の構築方法に関してその一端を垣間見ることができた。ここでは大まかな説明に留めるが、墳丘の構築は以下のような流れで行われたものと推察される。

まず、古墳の築造以前の原地形を考えたい。今回、各トレンチにおいて旧表土と考えられる層を確認している。その標高は、1トレンチで50.0m、2トレンチで49.8m、3トレンチで49.5m、4トレンチで49.2mとなり、北西から南西に向かって緩やかな傾斜を持った平坦な地形が想定でき

る。なお、前方部の前面では地山に1.2mもの高低差が認められる。土壌化している面は確認できていないものの、盛土の様相などから旧地形は北から南に向かって急激に低くなるような地形が想定できる。

墳丘の構造に関しては、中心部の状況は不明だが墳丘のほぼすべてが盛土によって構築されたものと考えられる。後円部に関しては、幾つかの盛土の大きな単位が確認できる。それから推測すると、厚さ0.5m程の盛土を後円部の中心から外側に向かって水平に積み、それを何度も繰り返すことによって墳丘を構築しているものと考えられる。前方部では、若干異なる構築法も見られるが、おそらくは原地形に起因するものと推察される。

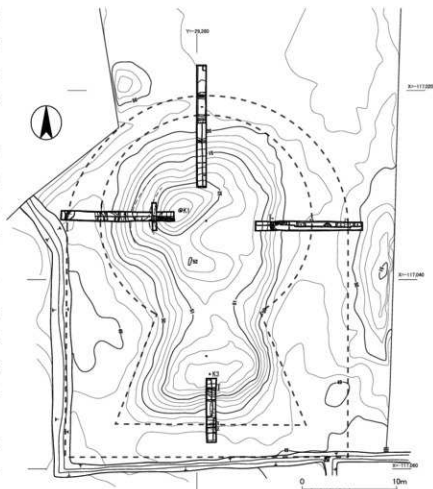


図23 墳丘復元図(1:400)

今回の調査で確認できた墳丘構築法や古墳の造営時に旧表土を残すという特徴は、周辺の長法寺七ツ塚古墳群や物集車塚古墳、今里大塚古墳で認められる¹²⁾。調査の方法や目的などによる資料的制約が存在するため一概には言えないものの、後円部の構築方法に関してはこの地域で一般的にみられる墳丘構築法の中で捉えられる可能性が高い。

今回の調査で確認できた墳丘構築法や古墳の造営時に旧表土を残すという特徴は、周辺の長法寺七ツ塚古墳群や物集車塚古墳、今里大塚古墳で認められる¹²⁾。調査の方法や目的などによる資料的制約が存在するため一概には言えないものの、後円部の構築方法に関してはこの地域で一般的にみられる墳丘構築法の中で捉えられる可能性が高い。

(3) 排水溝

今調査では、2トレンチにおいて埋葬施設に伴うと考えられる排水溝を検出した。そもそも、墳墓に伴う排水溝としては岡山県の橋築墳丘墓において既に認められる¹³⁾。古墳時代においても前期から後期まで、各時期において確認できる。しかし、古墳に伴う排水溝は研究の対象になる事が比して少ない。それは、古墳時代前期・中期の竪穴系の埋葬施設において、その検出が難しい事も関係しよう。

その排水溝の形態に関しては、かなりのバリエーションがある。素掘りの溝やV字形の溝の中に

小礫を詰め込む様な形態のもの、そして人頭程度の礫を「口」字形に組んだものなどが存在するが、各時期や地域によって様々なものが確認できる。

今回の調査で芝古墳の後円部で検出された排水溝は、人頭大のチャートを使用して、「口」字形に組んだものである。個体差はあるものの、各石材の平坦な面を利用して構築している。芝古墳の周辺では、長法寺南原古墳や灰方4号墳、今里大塚古墳、物集女車塚古墳などで確認されているが、形態的には物集女車塚古墳の排水溝が最も近似する¹⁶⁾。また、芝古墳のものとは異なり底板は存在しないものの、類似した形態をとるものは今里大塚古墳や灰方4号墳など横穴式石室に多く見られる。その際、排水溝の位置は羨道を通して墳丘外に向かっている。しかし、今調査では排水溝の両側の様相を探るために調査区を拡張したものの石材は確認されず、逆に排水溝の上にも墳丘盛土が積まれていることを確認した。

それでは、この結果からどのような埋葬施設を想定できるだろうか。まず、木棺や石棺などを直葬する場合、排水溝が設けられることは稀であることから、それは選択肢から外すことが出来る。しかし、芝古墳の築造された6世紀初頭という時期は、横穴式石室や直葬系の埋葬施設以外にも粘土槨や竪穴式石槨、竪名系横口式石槨などが存在しており、古墳時代の中でも最も埋葬施設に多様性が認められる時期といえる。そのため、これ以上絞り込むことは至難の業であり、今後の調査の進展を待つべきであろう。ただ、ここでは直葬系の埋葬施設の可能性は低くなったものだけ述べておきたい。

(4) 埴輪

今調査により、芝古墳の埴輪の様相は少しずつだが明らかになってきた。現時点では、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪のみ確認でき、出土した埴輪は特徴から古墳時代中期後葉～後期初頭、須恵器型式でいうTK47～MT15型式期、埴輪検討会の編年でいうV期1段階に位置づけられる¹⁵⁾。この埴輪について、近辺の同時期の古墳と普通円筒埴輪について比較をしてみたい。

まず長岡京市に所在する舞塚古墳である¹⁶⁾。この古墳からは、3条4段と4条5段の円筒埴輪が出土している。この埴輪の透孔は、胴部の各段に2個ずつみられ、段ごとに直行して配されている。外面調整は1次調整のタテハケのみである。これまで可能性はある個体が指摘されているものの、明確な底部調整は確認されていない。この古墳からは、埴輪と共にTK47型式とされる杯耳が出土している。

この舞塚古墳出土の埴輪と比較するならば、芝古墳の埴輪は部分的にでも底部調整を有するという点でやや新しい様相を程すると考えられる。併せて、舞塚古墳では朝顔形埴輪のごく一部で2次調整のヨコハケが確認されており、1個体のみだが芝古墳でもヨコハケが確認されていることを勘案するならば、芝古墳の埴輪は舞塚古墳のそれに後出するとしても、それほど時間差はなかったものと推察される¹⁷⁾。

また、桂川左岸になるが天塚古墳(MT15型式)の円筒埴輪にも触れておきたい。これは、今回は詳しく触れないが、芝古墳出土の中に天塚古墳で出土したものの中に非常に似た製作技法や

形態を有する資料が含まれているからである。近い特徴を有する天塚古墳と芝古墳出土の埴輪を比べるならば、刷毛目のパターンは異なるものの右上がりの刷毛を有する点で共通性を有する。また、突帯は共に上稜を突出した形態となるが、天塚古墳出土のものの方が突出度は低い。また、内面の調整は共にタテハケをした後にタテナデを施す。芝古墳のものは丁寧にタテナデが施されるため、ほとんどタテハケが見えないが、天塚古墳のものはタテナデが粗い為にタテハケを明確に確認できる。よく似た資料の中でみられるこれらの違いには、「省略」の方向性が見て取れるよう。つまり、芝古墳出土の埴輪は天塚古墳のものに先行する可能性が想定できるのである。

この舞塚古墳と天塚古墳から出土した円筒埴輪の検討から、芝古墳の埴輪はTK47～MT15型式の中古相に位置づけられるものと考えておきたい。

(4) 小 結

芝古墳群での位置付け これまで芝古墳群内で時期が明らかになっているものは12号墳と14号墳の2基のみであった。出土した遺物から12号墳は7世紀、14号墳は6世紀中頃と考えられている。今回の調査では、芝古墳が6世紀初頭の築造と判明した。現時点では、この古墳群内では最も築造時期が遅い古墳である。また、古墳群内で唯一の前方後円墳であることも加味するならば、芝古墳群の造営の契機はこの芝古墳に求められる可能性もある。少なくとも、芝古墳が築造された6世紀を前後する時期から、12号墳が築かれた7世紀頃まで芝古墳群における造墓活動は継続したものと考えられる。

また、その造墓活動の基盤となった集落としては芝古墳の北と西に近接する大原野石見遺跡や上里遺跡が想定される。特に上里遺跡では、その全容は未だ不明だが、2003年に実施された発掘調査において古墳時代中期末から後期前半にかけての集落跡が確認されている¹⁶⁾。報告書によると、この集落は何かの意図的な建物の配置をとるとされ、南北方向にのびる溝より東側には一辺5m以下の小規模な竪穴住居が設けられ、溝より西側には一辺6m以上の竪穴住居と倉庫のみが配されている。そして、その西側の一群の更に西には、集落の範囲を示すと考えられる南北溝が検出されており、それより以西では住居棟は確認されていない。この集落を限るとみられる南北溝から、約400m西南西の場所に芝古墳は存在する。また、南北溝より約250mの場所には井ノ内車塚古墳が所在しており、この両古墳と集落内の配置と時期的な要素を考えると非常に興味深い。

長岡グループでの位置付け 今回の調査によって芝古墳の時期は5世紀後葉～6世紀初頭に位置づけられることが明らかとなった。今後の調査の進展と詳細な資料の比較を要するものの、現時点では井ノ内車塚古墳に先行する可能性が高い。なお、井ノ内車塚古墳と井ノ内稲荷塚古墳はほぼ同じ時期に築造されたものと考えられるが、埴輪の有無から井ノ内車塚古墳が先行すると想定されている。

長岡グループのなかで芝古墳(TK47～MT15型式)の築造時期に近接して築かれた首長墓と考えられる古墳としては、舞塚古墳(TK47型式)や塚本古墳(MT15型式)、井ノ内車塚古墳(MT15～TK10型式)、長法寺七ツ塚4号墳(TK10型式)、井ノ内稲荷塚古墳(TK10型式)が挙げられる。こ

これらの古墳は分布において偏りが認められるため、長岡グループの首長墓系譜を更に小別した案が示されてきた。その中で、芝古墳や井ノ内の両古墳は地理・時期的にも近接して築かれていることから、連続した同一の首長墓系列と考えられている(上里・井ノ内小グループ)。また、舞塚古墳と塚本古墳の2基は地理的に若干離れているものの、芝古墳とはまた別の首長墓系譜を構成すると考えられている(長法寺・今里小グループ)。なお、長法寺七ツ塚4号墳は帆立貝古墳であり、かつ墳輪の有無や埋葬施設の様相から他の4基とは階層的が異なることが想定される¹⁹⁾。しかし、前方後円墳より劣る階層であっても、この古墳がどちらのグループの首長墓系譜に従属した存在であったのか、またはどちらかの首長墓系譜を構成する古墳であるのかは検討が必要となる。

さて、長岡グループにおける首長墓を築造順に並べると舞塚古墳、芝古墳→塚本古墳→井ノ内車塚古墳→井ノ内稲荷塚古墳、長法寺七ツ塚古墳となる。先の2つのグループとして考えるならば、舞塚古墳と芝古墳、井ノ内車塚古墳と塚本古墳が対応関係にあり、各グループではほぼ同じ時期に首長墓を築造するという図式が成り立つ。しかし、続く井ノ内稲荷塚古墳に対応するが現時点では長法寺・今里小グループには見られない。解釈としては、①長法寺・今里小グループでは、塚本古墳以降に空白が存在する、②後世の削平を受け消滅した首長墓が存在した、③長法寺七ツ塚4号墳が後続する首長墓に該当する事などが想定できる。②に関しては細塚古墳などがその候補として挙げられよう。③については、上里・井ノ内小グループが次第に墳丘規模を増大する傾向にある事、また舞塚古墳は帆立貝古墳と考えられるのに対して芝古墳は前方後円墳である事、井ノ内車塚古墳と塚本古墳は共に前方後円墳であるが井ノ内車塚古墳が規模で勝る事を勘案するならば、古墳時代中期後葉～後期において上里・井ノ内小グループが長法寺・今里小グループよりも多少なりとも優位にあったものと考えられる。そして、井ノ内稲荷塚古墳の時期には、約46mの前方後円墳と20m程の帆立貝古墳という明確な階層の差異が生じるに至ったものと推定することもできる。加えて、集落遺跡の動態に注目すると、6世紀前半は数の面で顕著な増加が認められるものの、後半にはその傾向がなくなり、7世紀には減少していく²⁰⁾。これは集落の人為的な統合の結果と考えられている。その7世紀の首長墓としては、現時点で山城盆地でも屈指の規模を誇る横穴式石室を有する今里大塚古墳1基のみが知られている。想像を逞しくするならば、先に述べた井ノ内稲荷塚古墳と長法寺七ツ塚4号墳における関係性は、この地域における統合の中途段階を示しているとも考えられよう。

いずれにしろ種々の慎重な検討を要するものの、このような調査や研究を積み重ねることで、この地域における古墳時代の様相は更に明確になるだろう。今後の調査と研究の進展に期待したい。

(熊井 亮介)

註

- 1) ここでいう「乙訓」という地域は、旧制の乙訓郡を中心として、隣接する葛野郡南部の一部の地域を含めた地域の総称として使用している。
- 2) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継統と断絶」『待兼山論叢』史学編22 1988年
- 3) この他にも、異なる大別案や各グループをさらに小別する意見も示されている。加えて、芝古墳が属

する長岡グループに関しては未だ多くの課題が残されている。そのため、現時点で新たに大別することはしない。

- 4) 京都市文化市民局『京都市遺跡地図台帳』第8版, 2007年。
長岡京市教育委員会『長岡京市遺跡地図』第5版, 2006年。
京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第4分冊〔第2版〕, 1989年。
- 5) 山本輝雄「第2章 井ノ内車塚古墳第5次調査概要—長岡京跡京第1045次調査(7 ANGKT-6 地区)一」『長岡京市文化財調査報告書』第64冊, 2013年。
- 6) この円筒埴輪は、蒔栽培のための客土に混入した可能性も想定される。しかし、芝古墳群の南方に近接する北平尾古墳群(7世紀前半)の付近でも5世紀前半とみられる円筒埴輪や朝顔形埴輪が確認されていることを併せて考えるならば、消滅した当該期の古墳が存在したと考える方が妥当であろう。
- 7) 古老の話によると、その土山は前方後円形を呈していたという。
- 8) 京都府教育委員会『向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概要(1968)』1968年。
京都市文化市民局『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』2014年。
- 9) 梅原未治「第二十九 乙訓郡今里ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊, 1923年。
- 10) 表面採集遺物も含む。
- 11) 埴輪検討会『埴輪論叢』第4・5号, 2003年。
- 12) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財調査概要 平成8年度』1988年。
向日市教育委員会『物集女車塚古墳』1988年。
長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成11年度』2001年。
長岡京市教育委員会『長岡京市における後期古墳の調査』2002年。
- 13) 近藤義郎編『植染弥生墳丘墓の研究』1992年。
- 14) 物集女車塚古墳の横式石室に伴う排水溝は、場所によって構造が異なることが判明している。
- 15) 周辺の井ノ内車塚古墳や塚本古墳などを参考にすれば、調査区の位置や範囲によって埴輪の種類に大きな偏りがみられることが判明している。このような状況が認められることを考慮に入れるならば、芝古墳に関して円筒埴輪や朝顔形埴輪しか存在しないと考えるのは早計だろう。今後の調査が待たれる。
- 16) 京都府教員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』1979年。
長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和58年度』1984年。
- 17) 報告書執筆段階では、長岡京地域の舞塚古墳・井ノ内車塚古墳・塚本古墳の遺物を実見していない。今後、資料調査を予定しているが、その知見によって舞塚古墳と芝古墳の時期が前後する可能性がある。
- 18) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『長岡京京二条四坊一・八・九町跡, 上里遺跡』2003年。
- 19) 長岡京市教育委員会『長岡京市における後期古墳の調査』2002年。
- 20) 長岡京市史編さん委員会『長岡京市史 本文編1』1996年。

調査と整理に際して、地権者様をはじめ下記の方々にご指導・御協力を賜りました。記して感謝致します。
向日市教育委員会、財団法人向日市埋蔵文化財センター、長岡京市教育委員会、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、石野博信、一瀬和夫、宇野隆志、國下多美樹、杉原和雄、高橋克壽、都出比呂志、菱田哲郎、広瀬和雄、福永伸哉、若林邦彦、和田晴吾、原田昌浩、花熊祐基、北山大照、岸本晴菜
(敬称略・順不同)

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはつくつちようざほうこく へいぜい26ねんど							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成26年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・家原主太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松住奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・近藤章子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル 2階							
発行所	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
嵯峨院跡	京都市右京区嵯峨 観空寺明水町34-1, 35-1, 36	26100	858	35度 01分 39秒	135度 40分 37秒	2014年5月 12日～2014 年6月20日	357㎡	個人住宅
山科本願寺跡(1)	京都市山科区西野 山園町34-1, 35	26100	626	34度 58分 56秒	135度 48分 32秒	2014年1月 20日～2014 年2月7日	30㎡	範囲確認
山科本願寺跡(2)	京都市山科区西野 山園町34, 34-1, 35	26100	626	34度 58分 56秒	135度 48分 32秒	2014年7月 22日～2014 年9月30日	231㎡	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
嵯峨院跡	雑宮跡	平安時代 ～室町時代	柱穴、土坑、井戸、整地層	土師器、焼締陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品		平安時代後期の整地層を検出		
山科本願寺跡(1)	寺院跡	室町時代	土塁、柱穴、整地層	—		山科本願寺の土塁や整地層を検出した。		
山科本願寺跡(2)	寺院跡	室町時代	土塁、建物、堀、整地層	土師器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦		山科本願寺の土塁や焼亡時まで存続した建物のほか、土塁構築以前の基を検出した。		

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはつくつちょうさほうこく へいせい26ねんど							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成26年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	馬瀬智光・家原主太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松住奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・近藤章子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2階							
発行所	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかのらいせき 中臣遺跡	きょうとしやましろくわんしやう 京都市山科区勧修 寺西金ヶ崎244	26100	632	34度 58分 09秒	135度 48分 18秒	2014年11月 10日～2014 年11月26日	192㎡	共同住宅
しばふじん 芝古墳	きょうとにしきやうくわんしやう 京都市西京区大原 ののりやま 野石見町632-3	26100	1048	34度 56分 40秒	135度 40分 46秒	2014年10月 1日～2014 年11月21日	45.9㎡	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中臣遺跡	集落跡	縄文～室町時代	柱穴	土師器		柱穴を検出した。		
芝古墳	古墳	古墳時代	墳丘、周溝、排水溝	埴輪		埋葬施設に伴う可能性のある排水溝を検出した。		

图 版



1 南区第1面全景（北西から）



2 北区第1面全景（南西から）

図版2 嵯峨院跡 遺構



1 南区第2面全景（北西から）



2 北区第2面全景（南西から）



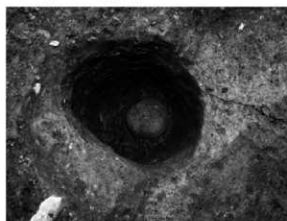
1 井戸4 (北から)



2 井戸200 (北から)



3 土坑23断面 (東から)



4 P436 遺物出土状況 (南から)



5 土坑171 (北西から)



6 土坑571 (西から)

図版4 嵯峨院跡 遺物



出土遺物



1 調査区東部全景(東から)



2 調査区西部全景(東から)

図版6 山科本願寺跡(2) 遺構



1 1区南半全景(北東から)



2 1区北半全景(南から)



1 2区全景(北西から)

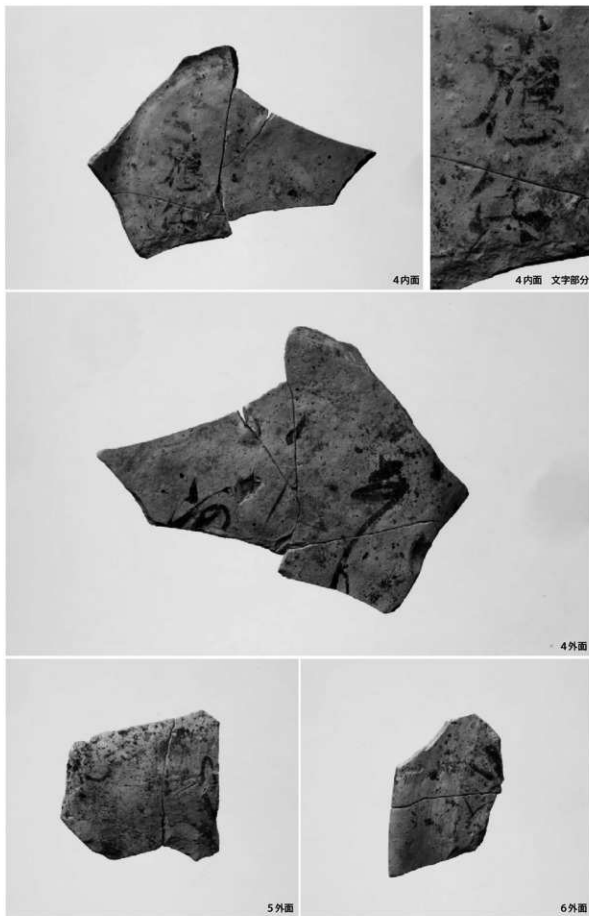


2 1区南半土塁北断割(北東から)



3 堀2(北西から)

図版8 山科本願寺跡（2）遺構



出土遺物



1 調査区全景（北東から）

図版 10 芝古墳 遺構



1 芝古墳全景（北西から）



2 芝古墳全景（南西から）



1 1トレンチ (北西から)



2 2トレンチ (西から)

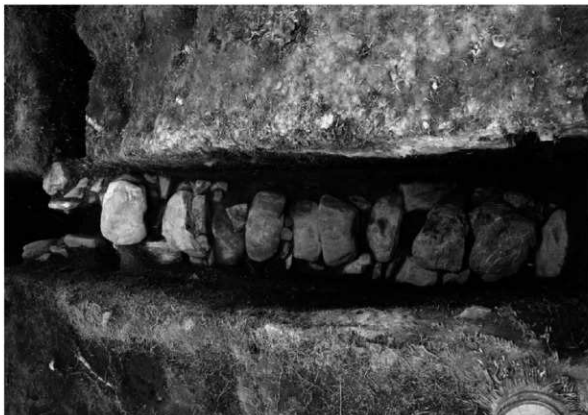


3 3トレンチ (南東から)



4 4トレンチ (南西から)

図版 12 芝古墳 遺構



1 排水溝（蓋石除去前）



2 排水溝（2・6・9石目の蓋石除去後）



1 2トレンチ排水溝 9石目除去後（西から）

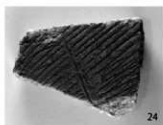


2 3トレンチ石組み遺構（東から）



3 4トレンチ墳輪出土状況（北から）

图版 14 芝古墳 遺物



出土埴輪

京都市内遺跡発掘調査報告

平成26年度

発行日 2015年3月31日
京都市印刷物 第263248号

発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住所 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地
Y・J・Kビル2階

TEL：(075) - 366 - 1498

印刷 奥田印刷株式会社
TEL：(075) - 441 - 7060

